

42955

教科書文庫

4
210
32-1937
25000
29788

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

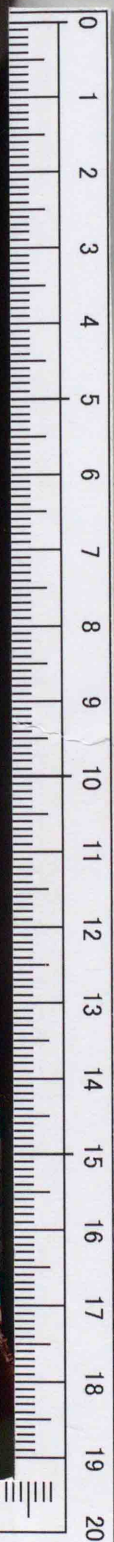


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

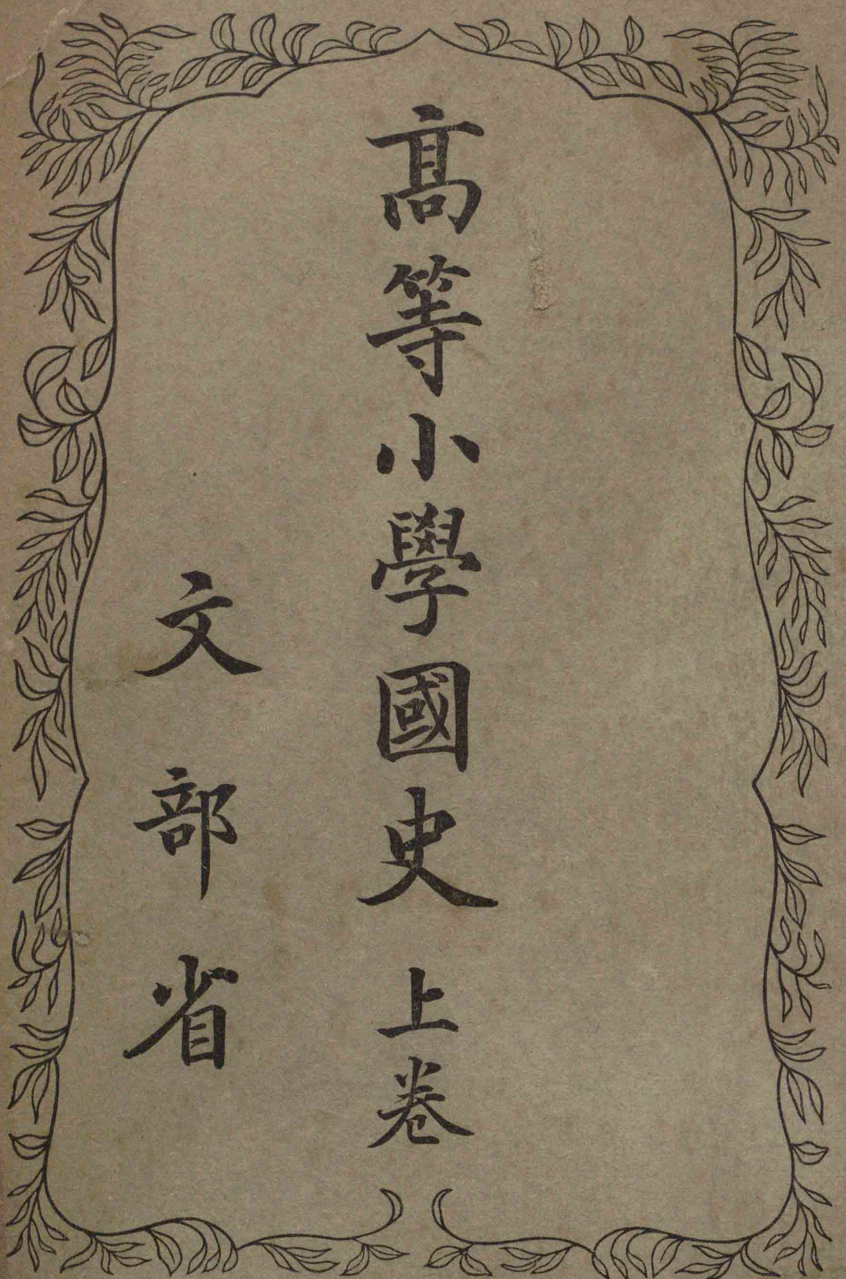
© Kodak, 2007 TM: Kodak



教
3
25

高等小學國史上卷

文部省



教科書文庫

4

210

32-1937

2500029788



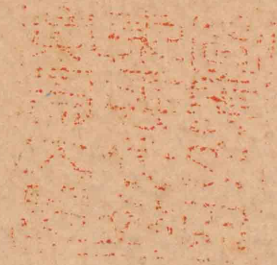
高等小學國史 上卷

文部省

登錄番号
29788
分
375.932
類
M

広島大学図書

2500029788



目録

御略系

第一	神代	一	第十一	奈良時代の學藝・風俗	四
第二	神武天皇の創業	四	第十二	奈良時代の佛教	五
第三	皇大神宮の創立	九	第十三	平安時代初期の發展	七
第四	皇威の振興	一五	第十四	藤原氏の專權	三
第五	朝鮮半島の服屬と文物の傳來	一八	第十五	朝臣の榮華と文化	九
第六	佛教の傳來と美術・工藝の發達	三	第十六	武士の興起	六
第七	支那との交通	二七	第十七	院政 武士の勢威	八
第八	大化の改新	三	第十八	平氏の驕奢	三
第九	東北地方の開拓と朝鮮半島の 離反	三	第十九	鎌倉幕府の創設	六
第十	律令の制定	四	第二十	北條氏の民政	一〇
			第二十一	元寇	一〇

目録

高麗史上

第二十二	鎌倉時代の文化	二一六	第二十八	室町幕府の衰微	二一五
第二十三	北條氏の滅亡	二一四	第二十九	室町時代の文化	二一七
第二十四	建武の中興	二一三	第三十	京都の疲弊	二一五
第二十五	吉野の朝廷	二一三	第三十一	戦國時代の大勢	二一六
第二十六	室町幕府の盛時	二一四	第三十二	邦人の海外渡航 西洋人の渡來	二一八
第二十七	關東管領	二一〇			

高國史上

高國史上

御略系

天照大神

天忍穗耳尊

天津彦彦火瓊杵尊
彦火火出見尊
彦波瀲武鸕鷁草葺不合尊

神武天皇
綏靖天皇
安寧天皇
懿德天皇
孝昭天皇
孝安天皇
孝靈天皇

孝元天皇
開化天皇
崇神天皇
垂仁天皇
景行天皇
日本武尊
仲哀天皇
成務天皇

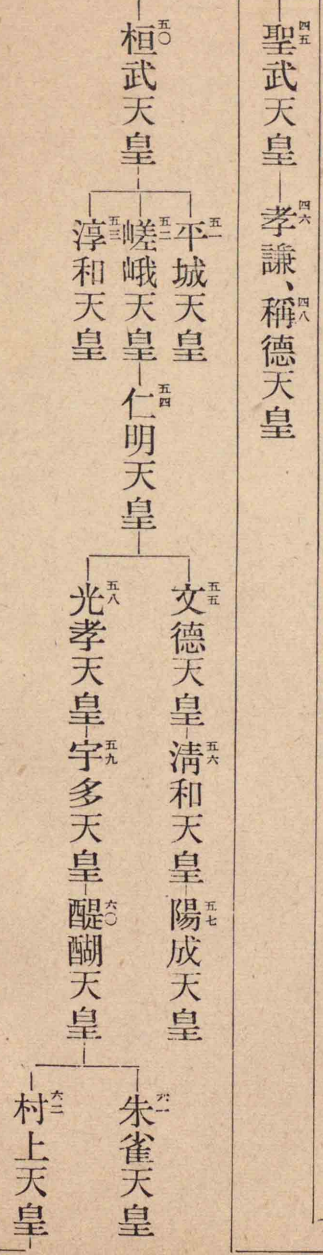
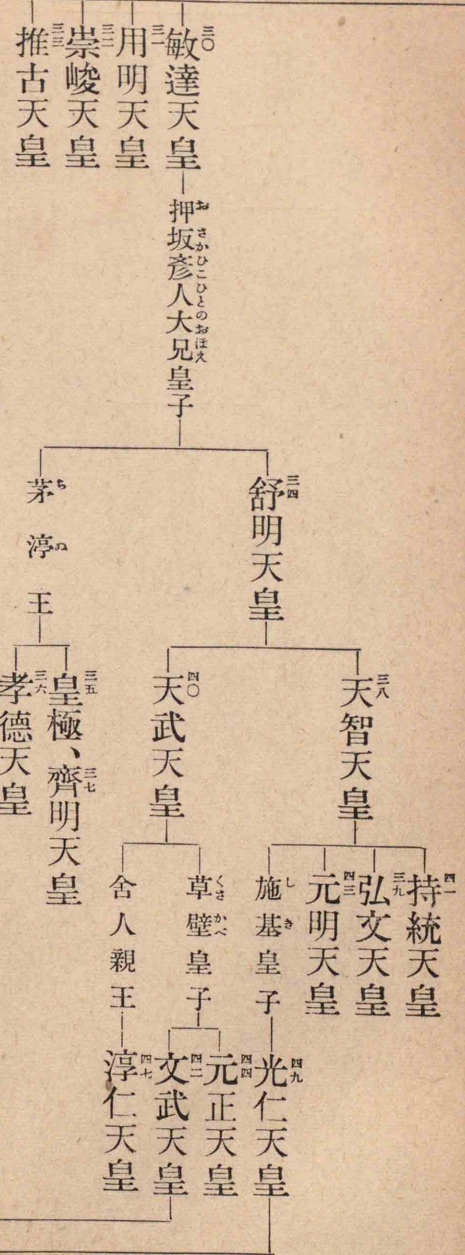
仁德天皇
履中天皇
市邊押磐皇子
仁賢天皇
武烈天皇
顯宗天皇

應神天皇
反正文皇
允恭天皇
安閑天皇
雄略天皇
清寧天皇
宣化天皇

稚野毛一派皇子
意富富杼王
宇斐王
彦主人王
繼體天皇
欽明天皇

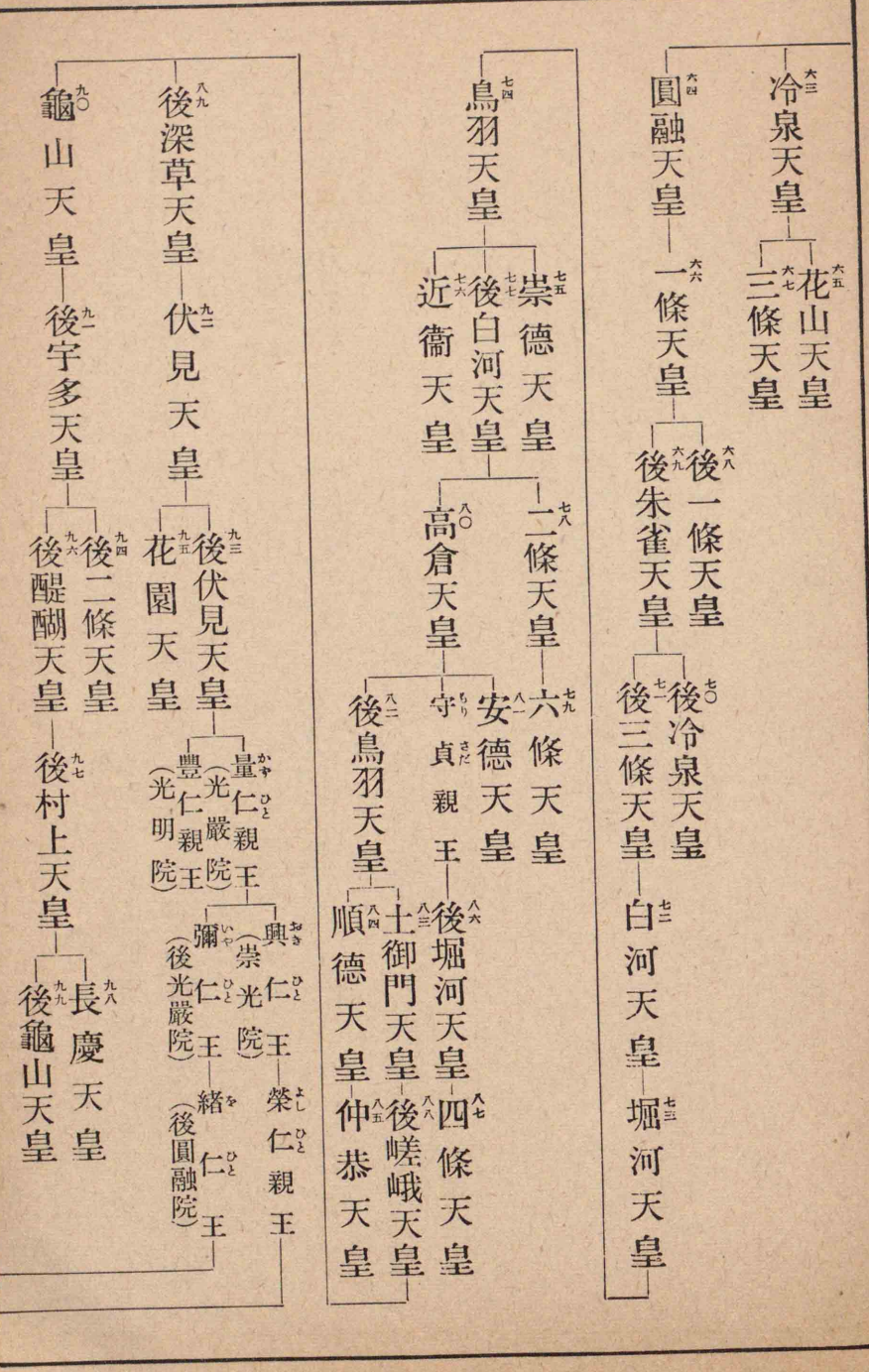
御略系

一



高國史上

高國史上



後小松天皇 稱光天皇

貞成親王 後花園天皇 後土御門天皇 後柏原天皇 後奈良天皇 正親町天皇

誠仁親王 後陽成天皇 後水尾天皇

明正天皇

後西天皇

靈元天皇 東山天皇

中御門天皇 直仁親王

櫻町天皇

後櫻町天皇

桃園天皇 後桃園天皇

典仁親王 光格天皇 仁孝天皇 孝明天皇 明治天皇 大正天皇

今上天皇 明仁親王

高國史上

高國史上

高等小學國史 上卷

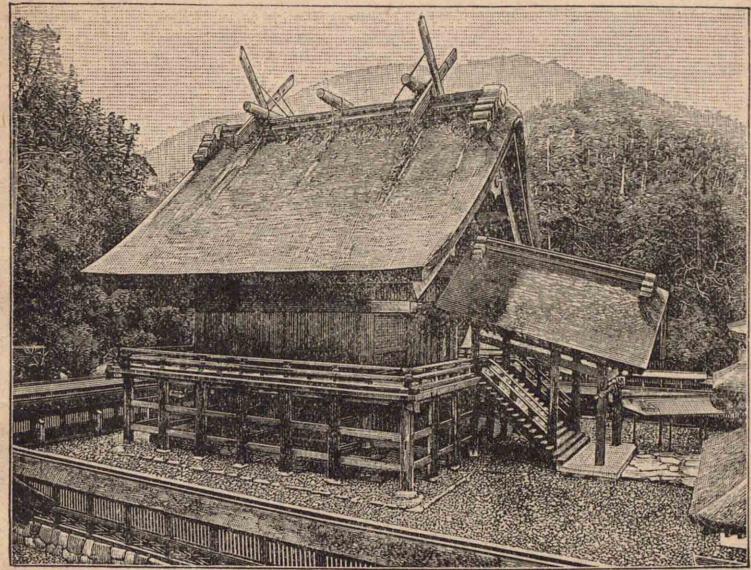
第一 神代

天照大神の御恵

素戔嗚尊が
出雲地方を
平げられた

わが大日本帝國の基は、皇祖天照大神のお定めになつたところである。大神は、御徳の極めて高い御方で、農業や機織の道をお授け下さるなど、その御恵の廣大なことは、ちやうど太陽が萬物を照らすやうであつた。それ故、萬民は、ひとしく大神を日の神と仰ぎたてまつるのである。大神の御弟素戔嗚尊は、とかくあら／＼しい御行が多かつたので、神々に追はれて出雲にお降りになつたが、やがてその地方を平げ、またたび／＼朝鮮にも往來せられたといふことである。ついで、尊の御子大國主命は、ます／＼領地をひ

大國主命が
領土をさし
上げられたし



出雲大社

ろめ、また醫藥の法などを教へて人民をなづけられ、その勢は非常に盛であつた。大神は、御子孫をして安らかにこの國を治めさせようと、思し召され、御使を出雲の杵築にお遣はしになつて、その御旨を諭させた。まうた。大國主命は、長子に相談した上でお答へ申しあげようとて、折から美保崎に釣してゐた事代主命のもとに早舟をやつて、大

高國史上

高國史上

(出雲大社)

瓊杵尊が
日向にお降
りになつた

わが國體

神の御旨を傳へて意見をお問はせになると、命は、つゝ、しんで仰をお受け申すべきであるとお勧めになつた。そこで、大國主命は、自分の領土を残らずさし上げて、みづから杵築宮にお退きになつた。後、この宮に命をおまつり申して、出雲大社といつてゐる。

大國主命が、すでに國土をさゝげたてまつつたので、大神の御孫瓊杵尊は、大神の神勅を受けて、三種の神器を奉じ、天兒屋根命、太玉命をはじめ、大勢の神々を従へて、日向にお降りになつた。これから御三代の間は、この地で、わが國をお治めになつた。世にこれまでを神代と申しあげる。

かやうに、神勅のまゝに、萬世一系の天皇は、御代々神器をお傳へになつて、國民をおかはいがりになり、國民も、世々忠實

に朝廷におつかへ申しあげて、國運は日に月に榮え、皇位の盛なことは、天地と共にいつの世までもきはまりがない。これが、實にわが國體の萬國にすぐれ、世界に類のないところである。

天照大神 天忍穗耳尊 瓊瓊杵尊 彦火火出見尊 鸕鷀草葺不合尊 神武天皇
素戔嗚尊 大國主命 事代主命

第二 神武天皇の創業

瓊瓊杵尊から御代々は、日向でわが國をお治めになつたので、遠方にはまだ御惠の行届かぬところがあつて、それらの地方は、なかく騒がしかつた。そこで、尊の御曾孫にあらせられる神武天皇は、國の中央に遷つてこれを治め、あまねく

高國史上

神勅の御旨をまつたうししようと思召さる

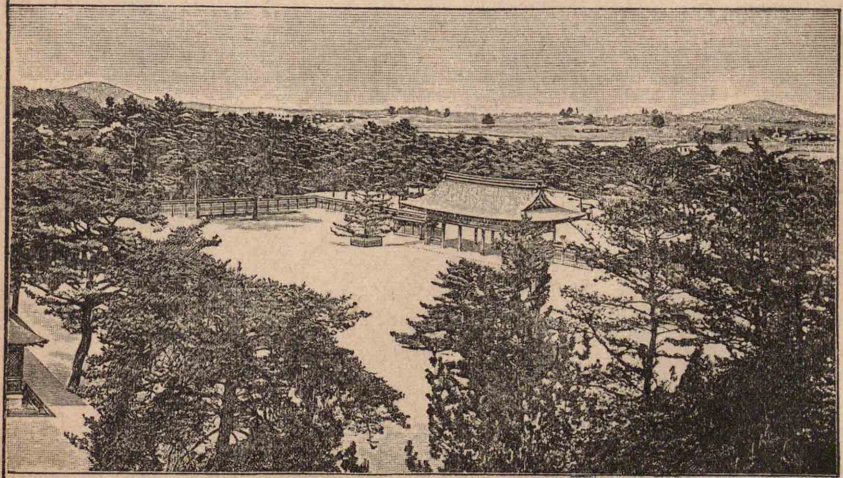
高國史上

大和地方をお平げになつた

萬民を安心させて、皇祖の神勅の御旨をまつたうしようと思し召され、御みづから軍を率ゐて日向を御出發になり、海路、大和へ向かはせられた。天皇は、行くく軍備を整へて、瀬戸内海を東へお進みになつた。この頃は、航路も明らかでなく、舟あしもおそくて、交通がたいへん不便であつたから、途中の御難儀はひととほりでなく、長い年月をへて、やつと難波にお着きになつた。それから、ちきに大和へおはいりにならうとしたが、長髓彦が、饒速日命を奉じて、皇軍をふせぎたてまつつた。そこで、天皇は、道をかへて紀伊へおまはりになり、道臣命らの御案内で、深く山谷にわけ入りたまうた。さうして、時には軍歌を歌つて、大いに士氣を勵まし、従はないものをばだんく平げて、遂

御即位の禮を擧げ皇后

に長髓彦のところへおし寄せられた。饒速日命は、大義を辨へて、まへへから天皇に従ひたてまつらうと思つてゐたので、長髓彦を諭したが聽かないから、いたしかたなくこれを殺し、歸順したてまつつた。天皇は、その忠義をお褒めになり、重くお用ひになつた。この他にも、降参したものは、皆、お許しになつて、大和地方はまつたく平いだ。これから、天皇は、都を畝傍山の



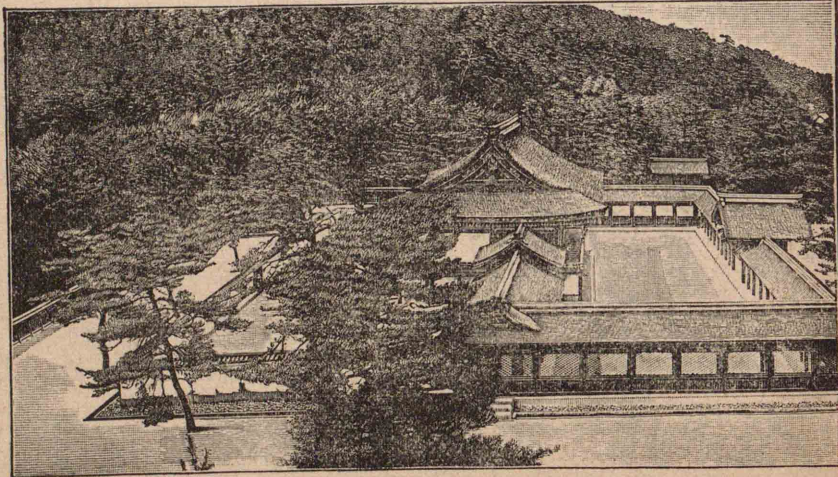
原 榎

高國史上

をお立てになつた (橿原宮)

(わが帝國の紀元)

東南榿原にさだめて宮をお造りになり、神器を宮中に奉安して、はじめて御即位の禮を擧げさせられ、宮門を開いて、その有様を廣く四方の民に拜觀させ、皇位の尊嚴を仰がせられた。またこの時、事代主命の御女五十鈴媛命を皇后にお立てになつた。この年は、わが帝國の紀元元年で、西洋の紀元に先だつこと六百六十年である。わが國の紀元が、かやうに古いばかりでな

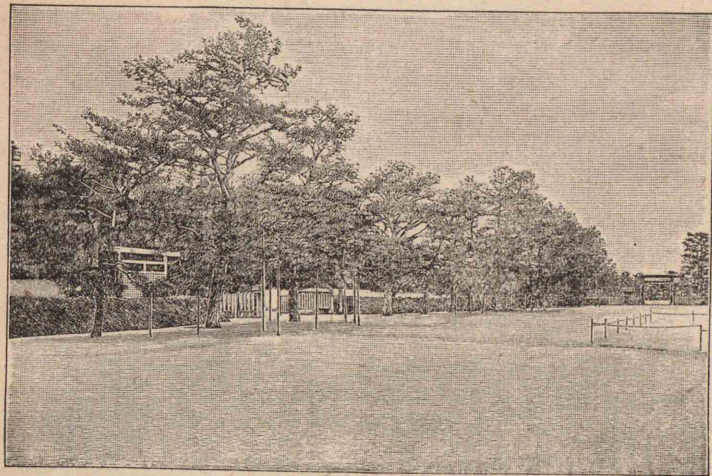


宮 神

高國史上

政治をお整へになつた

く、第一代の天皇が御位にお即きになつた年にはじまつて、いつの世までもかはりないのは、他國にその例がない。



神武天皇の御陵

天皇は、天兒屋根命の子孫である中臣氏、太玉命の子孫である齋部氏にお命じになつて、政治のうちでも、最も大切な祭の事をつかさどらせ、道臣命の子孫である大伴氏と、饒速日命の子孫である物部氏とは、兵を率ゐて朝廷を守らせられた。なほ功あるものをあげ用ひて、それぞれ地方を治めさせ、また産業

高國史上

高國史上

創業の御盛徳

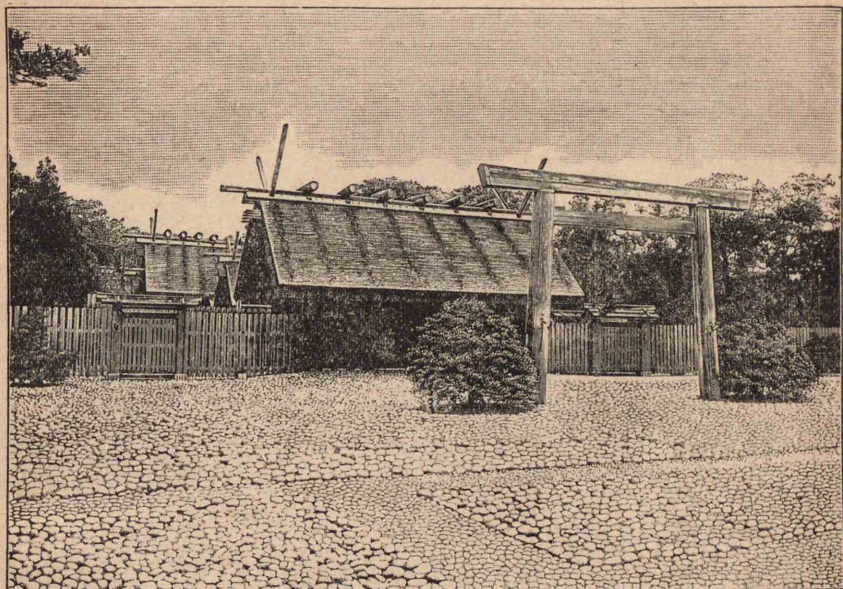
皇祖をあがめさせられる

を勧めたまうたので、國民は、皆、天皇の御威徳に従ひたてまつり、大神のお定め下さつた帝國の基は、いよ／＼固く、千代萬代に動かぬものとなつた。

第三 皇大神宮の創立

さきに、天照大神が、八咫鏡を御孫に授けたまうて、「この鏡を見ること、われを見るが如くせよ。」と仰せられてから、御代々、この御鏡を宮中に安置してあがめておいでになつた。また神武天皇は、大和に都をおさだめになると、まづ祭場を鳥見山に立て、おごそかに皇祖をお祭りして、御みづから大孝をお示しになつたので、これから、敬神の道はいよ／＼明らかになつた。

皇大神宮の御創立



熱田神宮

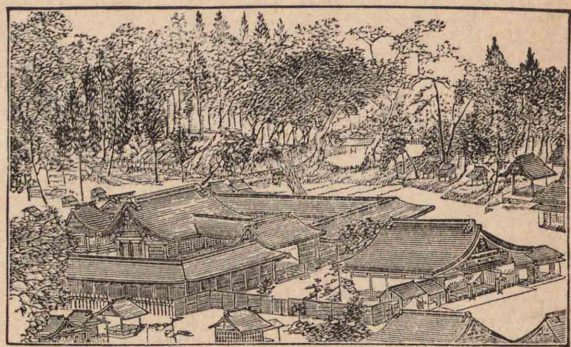
ところが、それから凡そ五百年、第十代崇神天皇の御代になると、もはや神代から長い間たつてゐるので、天皇は、いつまでも御鏡を宮殿のうちに安置したてまつることをおそれ多く思召され、これを天照大神の御神體として、天叢雲劔をそへて別宮にまつらせたまうた。ついで、第十代垂仁天皇の御時、皇女の倭姫命

高國史上

高國史上

皇大神宮を御尊敬あらせられる

(熱田神宮)

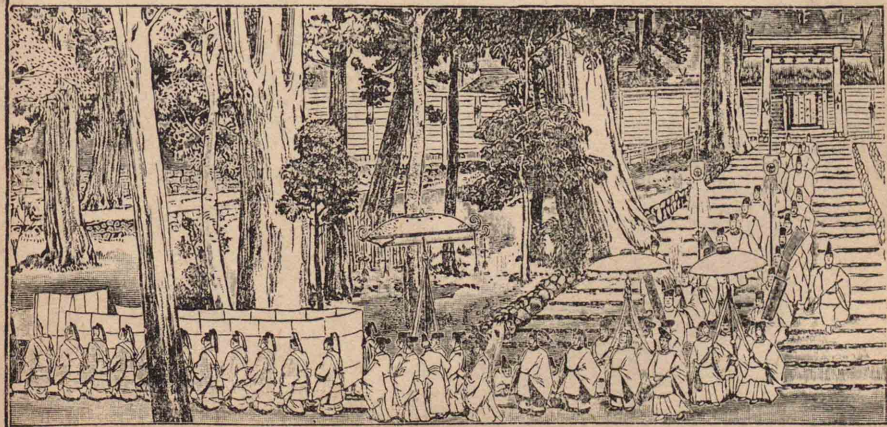


熱田神宮

は、勅を受けてこれを伊勢に遷したてまつり、五十鈴川の清い流のほとりに、お宮を建てておまつり申しあげた。これが、今の皇大神宮である。その後、日本武尊が蝦夷を御征伐なさつた折、神宮に参拜して、御叔母倭姫命から天叢雲劔を授り、その御威徳によつて賊の災難をはらひたまうたが、御歸途に、これを尾張にお置きになつた。その御劔は、この時から草薙劔と申しあげ、熱田神宮におまつり申してある。朝廷では、取分け皇大神宮をお敬ひになり、永く皇女を齋宮としてつかへたてまつらせ、今も皇族をその祭主に任じて、

おつかへ申させられてゐる。なほ二十年毎に、社殿を造りかへて、御遷宮の式を行はせられる定は、今に至るまでかはることがない。また崇神天皇は、御鏡・御劔を別宮におまつりになつた時、新にそのうつしを造つて、八坂瓊曲玉と共に宮中にお留めになつたが、これが皇位の御しるしとして永くお傳へになる三種の神器である。中でも御鏡は、宮中の賢所に奉安して、御代々の天皇は、大神の御膝下に

(賢所)



皇大神宮

高國史上

神を敬ひ先祖を尊ぶ美風

(氏神)

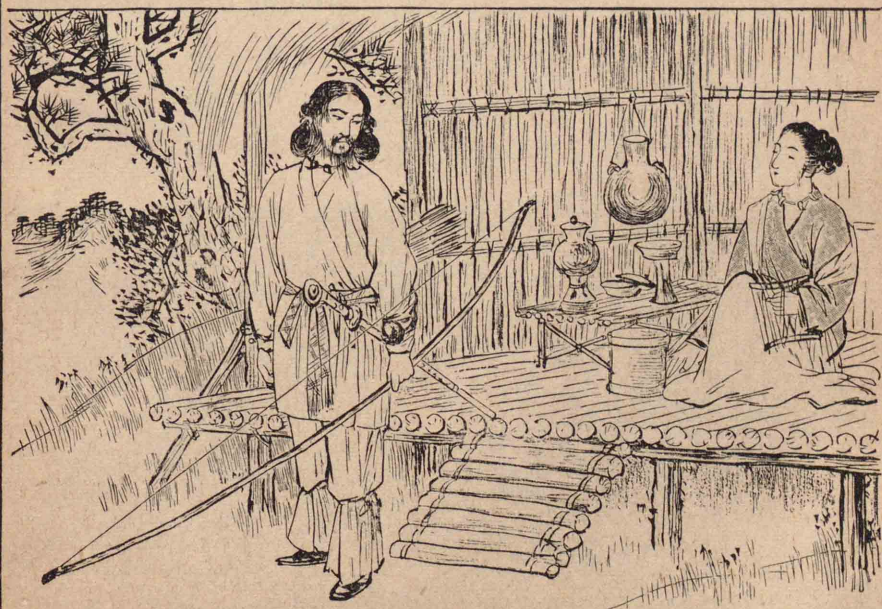
おはしますやうに、親しくおつかへあそばされる。國民もまた神を敬ひ、先祖を尊ぶ美風がある。一國の祖神として、あつく皇大神宮を敬ひたてまつるばかりでなく、まためい／＼氏神を祭つて、心からこれにつかへて來た。それ故、君親の葬儀は、非常にあつく行はれ、陵墓も、おほむね廣大で、しかもていちように造られてゐる。こゝに副葬つた種々の品物や埴輪の人形などは、今も時



(御遷宮の式)

上古國民の生活

時發見されて、上古の風俗を知るたすけとなつてゐる。この頃の衣服は、男女共たいてい麻や楮の糸で織つた布を用ひ、筒袖の上衣に、股引のやうなものをはき、美しい玉類で頸や腕などを飾り、男は髪を左右に分けて、みづらにむすび、女はまげにゆふか、または下髪にした。食器には、素焼



上古國民の生活

高國史上

四道將軍の派遣

の土器を用ひ、家は、丸木のまゝ、柱を深く地中にうめ立て、茅で屋根をふいた。職業としては、農業が早くから行はれたが、漁獵もまた營まれて、生活はいつたいに質素であつた。

第四 皇威の振興

崇神天皇の御代の頃は、大和地方は安らかに治つたが、遠く離れた國々には、なほ皇威に従はないものがあつた。そこで、朝廷では、皇族の御方々を選んで、北陸・東海・山陰・山陽の四道に、それ／＼お遣はしになつた。これを四道將軍といつた。將軍は、各地を廻つて、天皇が萬民をお導き下さる御仁慈の程を説聞かし、それでもなほ従はないものはうち平げられた。さうして、この後も、將軍の御子孫がそれ／＼その地を治め

みつぎものを納めさせる

農業をお勧めになつた

て、人民をいつくしまれたので、皇威はますます遠方まで行渡つた。

四道將軍の派遣があつてから、四方の國々がおひく開けてゆくにつれて、國費がだんく増してきた。それで、朝廷では、はじめに人民の數を調べて、みつぎものを納めさせ、男からは獵の獲物を、女からは織物を奉らせることとせられた。天皇は、また船を造らせて、交通の便利をおはかりになり、殊に、農は國の大本であると仰せられて、諸國に池を掘らせた。溝を開かせたりして、大いに農業をお勧めになつた。垂仁天皇もまた、八百箇所餘りの池や溝を開いて、ますます水利の便をおはかりになり、農業を盛にして下さつた。これから、人民の生活は豊かになり、皆、太平を楽しみ合つた。

高國史上

高國史上

熊襲蝦夷の鎮定

政治がよく整つた

ところが、九州の南部に住んでゐる熊襲と、東北地方にはびこつてゐる蝦夷とは、なほたびく反いて世の中を騒がした。そこで、第十代景行天皇は、すゝんで御みづから熊襲を御征伐になり、更に御子日本武尊をお遣はしになつて、これを平げさせた。また、武内宿禰に東北地方の様子を調べさせ、ついで、日本武尊に蝦夷の地を鎮めさせた。この時、尊が連歸られた數多の蝦夷人を、諸國に配つて住まはせ、あつくおいたはりになつたので、これらのあらくしいものも、いつとなくなつて、忠良な國民となつた。

かうして、皇威があまねく國內に行渡つたので、第十代成務天皇は、専ら政治を整へることに御力をおそゝぎになつた。すなはち、武内宿禰を大臣として、朝廷の政治にあづからせ、地

方は、山川の位置によつて國縣の境を定め、多くの國造縣主などを置いて、それ／＼その地方を治めさせることとせられた。これが爲に、全國はよく治つて、國運はいよ／＼進んだ。

孝靈天皇

孝元天皇

開化天皇

崇神天皇

大彥命(北陸) 武渟川別命(東海)

吉備津彥命(山陽)

彦坐王

丹波道主命(山陰)

第五 朝鮮半島の服屬と文物の傳來

我が國と朝鮮半島とは、早くから交通が開けてゐたが、天皇の御威徳がひろまるにつれて、ますます深い關係を生ずるやうになつた。この頃半島の北部には高麗の國があり、南部には新羅百濟任那などの諸國が並んでゐた。任那は、新羅と

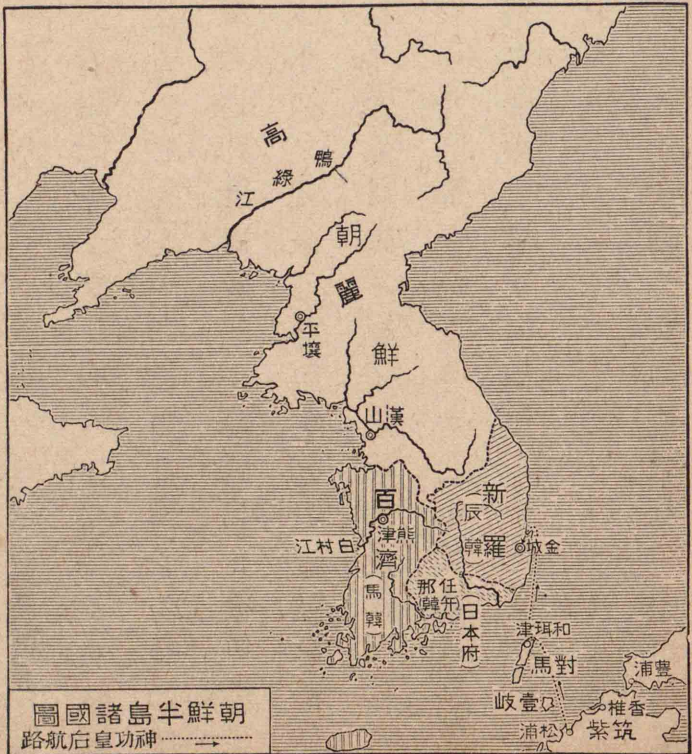
高國史上

高國史上

朝鮮半島との關係

(任那の日本府)

百濟にはさまれた小國で、常に新羅におびやかされてゐたので、崇神天皇の御代の末に、我が國に救を求めて來た。朝廷では、その願をいれ、將軍を遣はして鎮めさせられた。これが任那の日本府の起である。ついで、紀元八百六十年に、神功皇后が新羅王を降參させられると、百濟高麗の諸國もまた、つぎ／＼に従



朝鮮半島諸國圖
神功皇后航海路

學問が傳はつた

つたので、これから我が國は、任那の日本府を中心として、これらの國々を治めた。さうして、彼の國の貢船は、つゞいて難波の津に來航した。
これらの國々は、支那の學問や工藝を取入れて、早くから開けてゐたので、我が國との往來がしげくなるにつれて、しだいにこれを傳へて來た。第十代應神天皇の御代に、百濟の博士王仁がお召しにあづかつて渡來し、論語などの書籍を奉つた。これが漢學の傳はつた始である。皇子の稚郎子は、王仁について漢學を學び、たいそう御上達なされたので、後に、高麗から朝廷に奉つた書に、無禮な辭があつたのを見つけたまうて、非常にその使をおしかりになつたといふことである。また阿知使主も、多くの人々を率ゐて歸化し、その子孫は、王

高國史上

高國史上

工藝が傳はつた

仁の子孫と共に文氏といつて、代々朝廷につかへて、記録のことをつかさどつた。この後も、多くの學者が半島から渡つて來て、我が國の學問は、おひひに開けていつた。

産業が發達した

學問と共に、いろいろの工藝もまた傳はつて來た。同じく應神天皇の御代に、弓月君が、大勢の人々を連れて百濟から渡つて來て、専ら機織を業とした。それ故、弓月君の子孫を秦氏といつた。天皇は、更に使を支那に遣はして、機織や裁縫などにすぐれてゐる女工を求めさせられ、ついで、第十代仁徳天皇は、また秦氏を諸國に配つて、ますくこの業の發達をおはかりになつたから、第二十一代雄略天皇の御代になつて、絹布の産出が大いに殖え、その貢物にはかに増した。殊に、天皇は、御心を産業の發達におそ、ぎになり、農業や養蠶の神である

(豐受大神宮)

豐受大神を伊勢にまつらせたまひ、また皇后にも、桑をつみ蠶をかはせられ、支那からは、織縫の女工を、百濟からは、錦織の職工や陶工、畫工なども招いて、その技術を傳へさせた。まうたので、これから、我が國の工藝は、目ざましく進歩した。

第六 佛教の傳來と美術・工藝の發達

文化の發達

漢學が傳はつて以來、その仁義忠孝の教は、しぜん我が國の風俗にかなひ、また彼の工藝も、我が古來の技術と調和して、大いに文化の發達を助けた。ところが、また佛教が傳來して、更に社會にさまざまの影響を與へることとなつた。

佛教が傳はつた

佛教は、もと印度の釋迦牟尼のはじめた宗教で、支那をへて朝鮮に傳はつたが、紀元一千二百十二年、第二十代欽明天皇の御

高國史上

高國史上

(大臣と大連)

代に、百濟王が使を遣はして佛像や經文などを朝廷に奉り、盛に佛の功德を説きたてた。天皇は、民意を重んじたまうて、佛を祭るべきかどうかと、群臣におはかりになつた。時に、朝廷の政治にあづかるものに大臣と大連とがあつて、物部尾輿は大連に、武内宿禰の子孫である蘇我稻目は大臣に任せられてゐた。稻目は、我が國も他國と同じく、これを祭るべきである、と唱へ、尾輿は、これに反對して、我が國の神をさしおいて外國の神を拜すべきでない、と主張した。そこで、天皇は、試みに佛像を稻目に賜はつてこれを祭らせられた。稻目は、自分の家を寺として禮拜したが、たま／＼疫病が流行して、死ぬものが多かつたので、尾輿は、これは國神がお怒りになつた爲であると申しあげて、佛像をすて、寺を焼きはらつて

佛教が盛になつた

佛教の影響

美術工藝が進歩した

しまつた。

稻目の子の大臣馬子も、またあつく佛を尊び、尾輿の子の大連守屋は、これに反對し、争はますくはげしくなつて、守屋はとうく馬子に攻滅された。かうして第三十代推古天皇の御代になると、聖徳太子は、深く佛教を御研究になり、これをひろめることに御力を盡くされたので、佛教はいよく盛になつて、寺の数は四十餘り、僧尼も千人餘りの多數になつたといふことである。

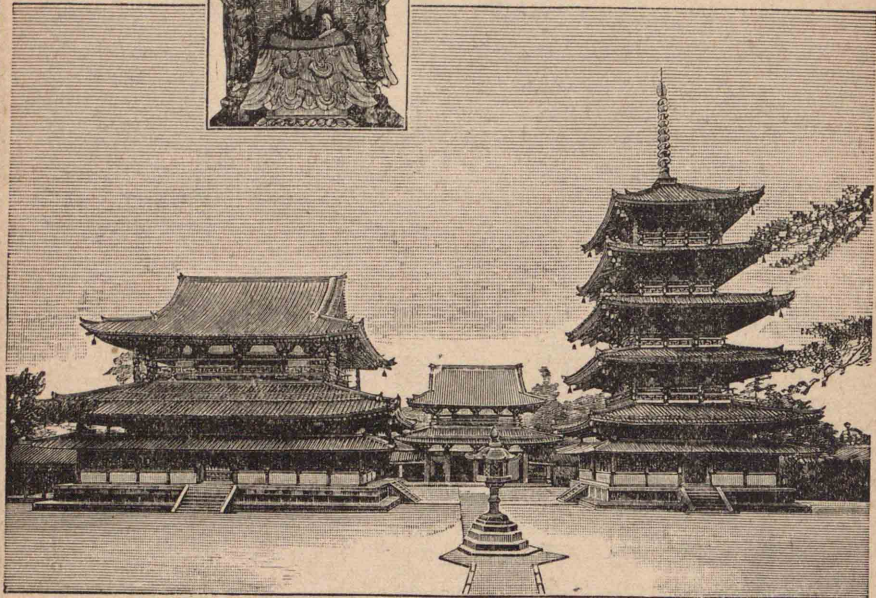
佛教は、過去、現在、未來の三世にわたつて、善惡のむくい絶えず廻つて來るものであると教へて、人々に深い感動を與へた。また寺を建て、佛像を造ることを何よりの功德として、しきりにこれを勧め、一方、朝鮮半島からは、建築彫刻、繪畫な

高國史上

高國史上



(法隆寺)



法隆寺と釋迦三尊

どの技師が大勢渡つて來たので、これらの技術は目ざましい進歩をした。この頃建てられた寺のうちで、聖徳太子の建立せられた攝津の四天王寺、大和の法隆寺は、最も名高く、取分け、法隆寺は、壯麗な堂塔が並び建つて、その本堂には、鳥佛師の鑄造した釋迦三尊の銅像など、貴重な佛像

が安置された。鳥佛師は、佛像を造ることが上手で、わが國に於ける佛工の元祖と仰がれてゐる。鳥佛師が、かつて推古天皇の仰を受けて、一丈六尺の佛像を造つたことがあるが、丈が高く、堂に納めることが出来なかつた。ところが、佛師は、工夫をめぐらして、戸をこはさないでこれを入れたので、天皇からたいそうお褒めにあづかつて、高い位を賜はつたといふことである。また高麗の僧曇徴は、紙墨繪具の製法を傳へ、繪畫も大いに發達して、壁に佛畫を畫がくことなどが行はれた。聖德太子の妃が大勢の女官と共に、下繪の上に五色の糸で美しい刺繡を施されたこともあつた。これらの作品は、今に傳はつてゐるものが多く、これによつて、當時の美術工藝が、如何に發達してゐたかをうかゞひ知ることが出来る。

高國史上

高國史上

第七 支那との交通

支那の文物は、たいてい朝鮮半島をへて我が國に傳はつたが、推古天皇の御代、聖德太子は、支那と隣國の好を修めて、直接にその文物を取入れようと考へになり、小野妹子を彼の地にお遣はしになつた。この頃、支那は、南北に分れて長い間、亂れてゐたのを、隋が統一して、たいそう威勢があり、まるで他國を屬國のやうにあつかつてゐた。けれども、太子は少しも恐れず、どこまでも對等の禮で、國書をお送りになつた。隋主はこれを無禮であるとして、大いに怒つたが、我が意氣のさかんなのを見て、翌年、使を妹子に伴なはせて、我が國に

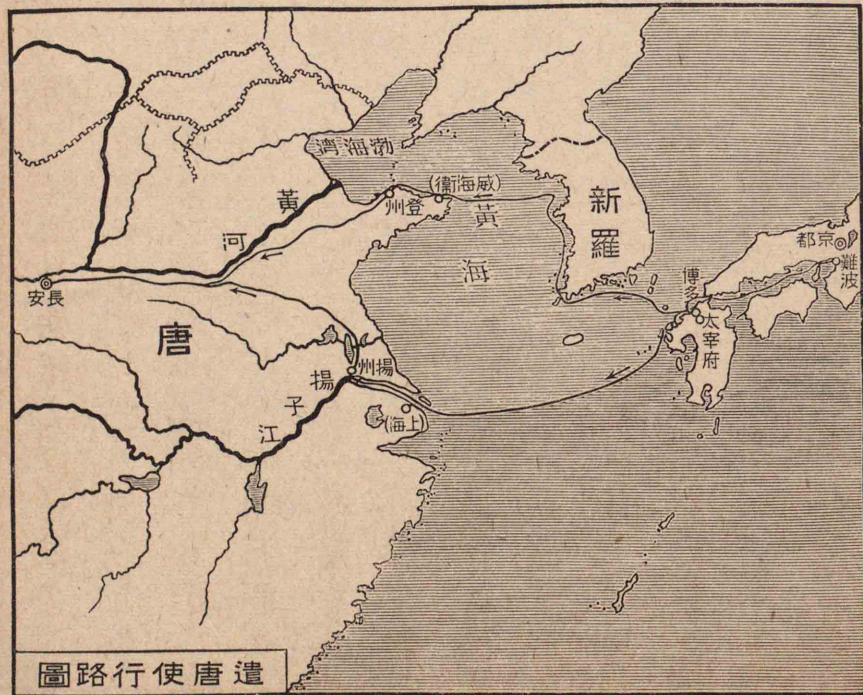


遣唐使が唐の都に向かふ

送つて来た。朝廷では、難波の津に新館を設けて、その使をてあつくもてなされ、ついで宮廷にお召しになつた。その時、天皇は、百官が金の華を飾つた冠をかむり、綾錦の禮服を着けて、威儀を正したうちに、拜謁を賜はつて、國書をお受けになつた。やがて、その使者が歸る時、太子は、再び妹子を隋に遣はし、「東の天皇、敬みて西の皇帝に白す」との國書を送つて、あくまで對等の國

留學生が隋におもむいた

交を結び、この後も、常にこの意氣で、彼との交際をつづけられた。妹子が再び隋におもむいた折、歸化人の子孫である高向玄理、南淵請安、僧旻などが、朝廷の御命令を受けて、留學生としてこれに従つて行つた。程なく隋は亡びたが、玄理らはなほ留つて、彼の地



遣唐使行路圖

遣唐使

の文物・制度を學び、歸朝の後、これを利用して、大いにわが國利民福を進めた。

唐が隋に代つて起ると、第三十代舒明天皇は、前例にならつて、使を唐にお遣はしになつた。これから、遣唐使の往復はだんだんしげくなつて、その制度もおひ／＼に整つた。大使、副使以下の職員は、それ／＼四艘の船に分乘し、萬里の風波をおかしてはる／＼、彼の地に渡り、おほむねその使命を果した。さうして、中には特にその儀禮がすぐれてゐた爲に、我が國をして君子國の譽を揚げさせたものもあつた。また學生、僧侶の留學するものも、ますます多くなり、時には數百人にのぼつたことさへあつた。いづれも、皆熱心に彼の宗教、學藝を傳へたので、ほとんど二百年餘りの間、大陸の文物はつき／＼

高國史上

に輸入せられて、我が政治風俗などは、その影響を受けて大いに改つた。

第八 大化の改新

社會組織の弊害

支那大陸の制度、文物が盛に輸入せられた頃は、一方わが古來の社會組織に、だん／＼弊害が起つてきた時であつた。もと、わが國では、天皇には氏はあらせられないが、國民は氏を以て血筋を區別し、氏毎にそれ／＼定まつた職業があつて、政治をつかさどる人々をはじめ、いづれも、その職を子孫に傳へる習はしであつた。それ故、たとひ才能があつても、その家柄でないと用ひられず、地位が高く、勢力のある家は、いつのまにか多くの土地や人民を私有し、年を重ねるに

聖徳太子の
新政

つれて、ますくわがまゝな振舞がつつた。中でも、蘇我物部兩氏は、大臣大連として、代々朝廷の大政にあづかつて、その勢が最も強く、互に權力を争つてゐたが、たまく佛教が傳はつて来て、その争がいよゝはげしくなつた。

聖徳太子は、これらの弊害をお改めにならうとし、我が國の美風に外國のよいところを取入れて、種々の新しい政治をなさつた。まづ冠位の制を定めて、冠によつて位の高下を示し、今までの家柄にかゝはることなく、功あるものにこれをお授けになつた。また十七條の憲法を作つて、官吏も、一般の人民も、共に心得ておくべきことをねんごろに教へたまひ、殊に、天下の土地人民は、すべて天皇の下に統一せらるべきことを諭して、わが國體を明らかにせられた。

(十七條憲法)

高國史上
高國史上

中大兄皇子
蘇我氏を
滅された

中大兄皇子
の御志を
つたせら
れた

その後、蘇我馬子の子蝦夷は、ひとり政治上の權力を握つて、わがまゝな振舞が多かつたが、その子入鹿の悪逆は父にもまさり、聖徳太子の御子山背大兄王の人望の高いのを憚つて、にはかに兵をさし向けたので、おそれ多くも王は、御一族と共に自害したまうた。舒明天皇の御子中大兄皇子は、かくも無道な蘇我氏の振舞を見て、非常にお憤りになり、どうかしてこれを除いて、皇威を回復なさらうと思し召し、藤原鎌足とはかつて、紀元一千三百五年、皇極天皇の御代に、とうとう蝦夷入鹿の父子を誅して、蘇我氏を滅された。

この年、まもなく、孝徳天皇が皇極天皇の御譲りを受け、御位にお即きになり、はじめて年號を立てて大化といひ、中大兄皇子を皇太子となさつた。皇太子は、鎌足といつしよ

に、かつて南淵請安について儒學を學びたまうたが、今また彼の制度や文物にくはしい高向玄理や僧旻などをお用ひになり、おもに隋唐の制度をとつて政治を新にし、いよく聖德太子の御志をまつたうせられることとなつた。

大化の改新

官制を改められる

まづ、これまでの大臣・大連や國造・縣主などが、官職を世襲してゐた習はしをやめて、新に朝廷に内臣・左大臣・右大臣を置き、地方に國司・郡司を置いて、いづれも人々の才能によつてこれに任ずることとせられた。また、豪族が土地・人民を私有した弊害を改めて、天下の土地・人民を残らず朝廷にお收めになつた。この時、皇太子は、天には二つの日なく、國には二人の王はない。それ故、天下をたもち、萬民をお使ひになるのは、たゞ天皇ばかりである。」と申しあげて、まつさきに、御自分の

土地人民を收められる

高國史上

田地をわからせ授けられる

税法を定められる

土地・人民を天皇にお還しして、てほんをお示しになつた。かうして、朝廷に收めた全國の土地を、男女を問はず、人毎にあまねくわからせ授けられ、その人が死ぬと、これを收める法を立て、また租庸調の税法を定めて、國家の經濟をさへることとせられた。租は田地のとりいれの一部を出させ、庸は人民を公役に使ふ代りに米・布などを納めさせ、調は織物その他各地の産物を奉らせるものである。かやうなことは、まことに建國以來の大改革であつて、これから、天下の大權は皇室にかへつて、社會の面目がまつたく一新した。これを大化の改新といつてゐる。

第九 東北地方の開拓と朝鮮半島の離反

蝦夷をおな
たつけになつ

阿倍比羅夫
が越の蝦夷
を伐つた

大化改新の後まもなく、孝徳天皇は崩御あらせられ、皇極天皇が再び御位にお即きになつた。第七十代齊明天皇と申しあげる。中大兄皇子は、引きつゞいて皇太子として政をおたすけになつた。

これより前、東國の蝦夷は、日本武尊の御征伐の後も、なほ時反いたので、朝廷では、たび／＼兵を出してこれを鎮めさせ、歸服するものには、或は酒食を賜ひ、或は位を授けて、つとめてこれをなづけられた。けれども、日本海の沿岸に住んでゐる越の蝦夷は、まだ朝廷の御徳に従つてゐなかつたので、齊明天皇は、阿倍比羅夫にこれを伐たせられた。比羅夫は、兵船百八十艘を率ゐて、三度も勇壯な遠征を行ひ、出羽の海岸から、はるかに北海道に至るまで、これを平定して、各地に郡

高國史上

新羅が任那
の日本府を
滅した



阿倍比羅夫が蝦夷を伐つ

司を置き、蝦夷人をこれに任じた。これから、東北地方はおひ／＼に開けて、皇恩にうるほふこととなつた。また朝鮮半島では、まへまへから諸國が互に勢を争つて、とかく騒が絶えなかつた。中でも、新羅は、國力の強いのをたのみとして、常に貢

高國史上

を怠り、無禮の振舞が多く、欽明天皇の御代になると、任那を攻めて日本府を滅してしまつた。天皇は、將軍を遣はして、日本府を回復させようとなさつたが、御軍は、かへつて新羅の爲に破られた。この時、調伊企難が敵に捕らはれて、我が將を罵れと強ひられた。けれども、勇武な伊企難は、かへつて新羅王を大いに罵つたので、忽ち斬り殺された。その妻の大葉子もまた虜となつたが、

韓國の城の邊に立ちて、大葉子は

領布振らすも日本へ向きて。

といふ歌をよんで、故國をふしをがんだ。將士は、これを聞いて、一人として惜しみ悲しまないものはなかつた。伊企難は、歸化人の子孫であつたが、かくまで忠烈の志が厚かつたの

高國史上

高國史上

百濟高麗が
亡んだ

である。その行は、その妻の眞心と共に、美談として永く後世に傳はつてゐる。

欽明天皇は、任那の亡びたのを殘念に思し召し、必ず新羅を伐つて任那の再興をはかると、御遺詔あらせられたので、御歴代の天皇は、絶えずそれに御苦心なさつたが、遂に成功しなかつた。その後、新羅の勢はますます強くなり、齊明天皇の御代には、唐の兵の助をかりて百濟を攻め、その王を降参させた。百濟の遺臣は、助を朝廷に願ひ出たので、天皇は、これをお許しになつて、皇太子といつしよに筑前にお下りになり、黒木の御所を朝倉に建てて軍事をお統べになつた。ところが、まもなく天皇が行宮で崩御あらせられたので、皇太子が御位にお即きになつた。第三十八代天智天皇と申しあげる。天皇は、

朝鮮半島が
離れ去つた

阿曇比羅夫らは遣はして、百濟を助けさせられたが、比羅夫らは、唐の海軍と戦つて敗れたので、百濟はとうとう亡び、ついで高麗もまた唐に滅された。それから、新羅がひとり勢を振るふやうになり、やがて百濟・高麗の地を合はせて、半島を統一することとなつた。百濟が亡びると、その遺民で我が國に歸化するものが少くなかつた。天皇は、これらにそれ／＼位を授け、田を賜はつて、あつくおいたはりになつた。また天皇は、時勢をお考へになつて、これから半島との關係を絶ちたもうたので、神功皇后以來四百年餘りて、半島の地は、まつたく我が國から離れることとなつた。

高國史上
高國史上

天智天皇が
内治をお整
へになつた

第十 律令の制定

朝鮮半島との關係は、もはや絶えてしまひ、唐も使を送つて來て、再び親密な交際をすることとなつて、外交の心配がなくなつたので、天智天皇は、御心を専ら内治におそゝぎになつた。天皇は、まづ都を近江の大津にお遷しになり、藤原鎌足に種々の法令を定めさせ、大化以來の新政を整へた。またはじめに學校をお起しになつたり、御みづから水時計を作つて、役人が朝廷に參る時刻をたゞさせたりなさつて、改新の大業はいよいよかゞやいたので、後の世に至るまで、永く天皇を中興の英主と尊びたてまつつてゐる。ついで、第四代天武天皇は、つとめてわが國情にあはせて政治を行はせられ、天智天皇のお定めになつた法令を補ひたま

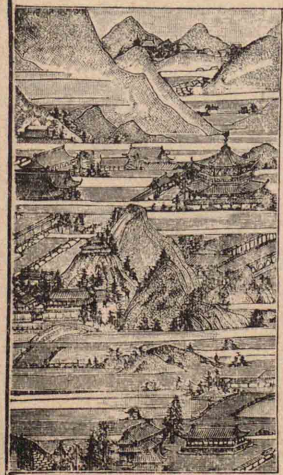
大寶律令を
定められた

律令の制度

うたが、第四十代文武天皇は、鎌足の子不比等らに、更にこれを改正させられて、紀元一千三百六十一年(大寶元年)に出来上つた。これを大寶律令といつてゐる。律は、今の刑法にあたるものであり、令は、行政に必要な種々の定である。

この律令は、おもに唐の制度にならひ、それに我が國の習はしを加へて定めたもので、もろくの制度がこゝによく備つた。すなはち、中央政府に、神祇太政の二官を設け、神祇官には、神を祭る事をつかさどらせ、これを諸官省の外に獨立させて、わが國古來の敬神の義をあらはし、太政官には、太政大臣、左大臣、右大臣、大納言などの官を置いて、政務を統べさせた。中

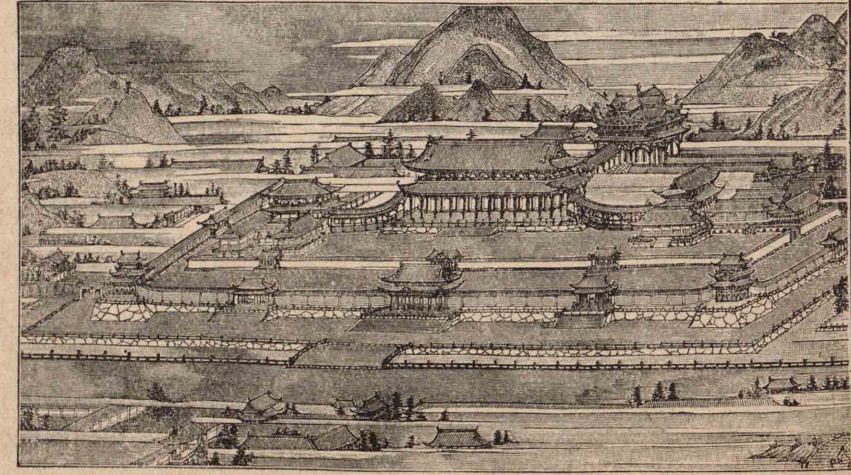
官制



高國史上

兵制
(太宰府)

でも、太政大臣は、最も尊い官職で、皇族が任ぜられるのが通例であつた。地方には、國司郡司を置いて、それ／＼その部内を治めさせたが、西海道は、支那朝鮮に近く、國防にも、外交にも、最も大切な所であるから、特に筑前に太宰府を置いて、全道を支配させた。また、徴兵の制をしいて、兵士を全國の男子二十歳以上のものから選び、都の衛府や諸國の軍團に配つて、警備の任務



太宰府

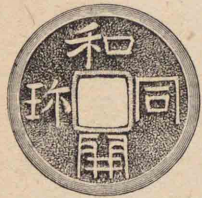
教育
刑罰

律令の存續

にあたらせられた。教育は、都に大學、諸國に國學を設け、歴史・儒學・法律・數學などを授けて、官吏を養成させた。なほ刑罰の法も整つて、君父に對して犯した罪を最も重くした。大寶の律令は、この後、社會の變遷に伴なつて、多少の修正を施されたが、その大體は改められることなく、長い間政治の本となつた。

第十一 奈良時代の學藝・風俗

錢を鑄させ
たもうた

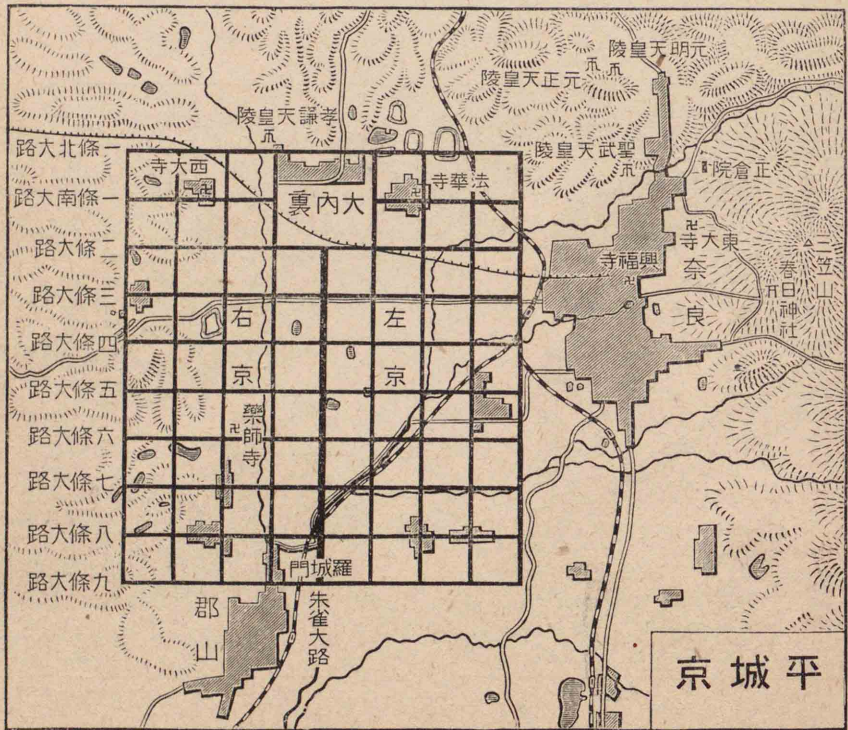


文武天皇が崩御あらせられると、第四十代元明天皇が御位にお和即きになつた。この御代の初に、武藏の國から銅銅を奉つたので、天皇は、年號を和銅とお改め錢になり、錢を鑄させて、しだいに民間に通用さ

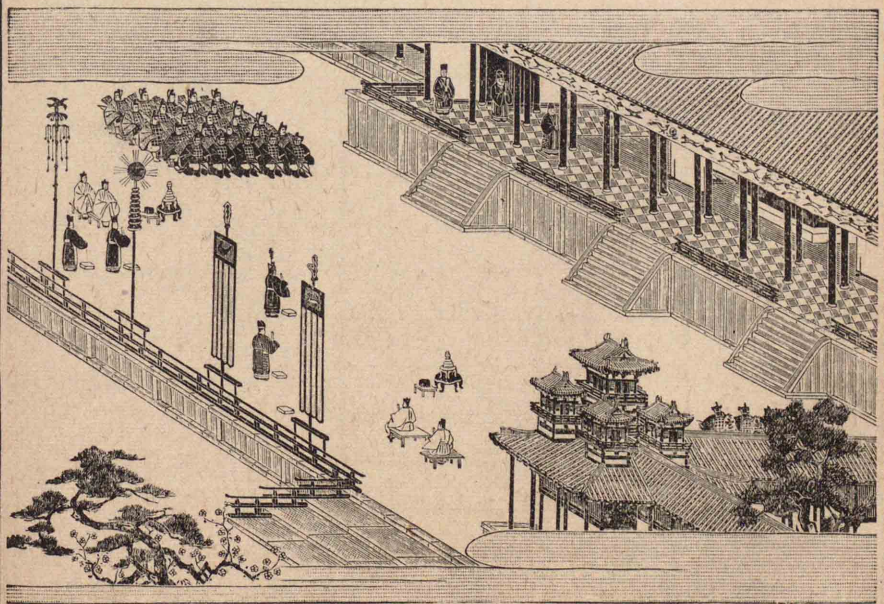
高國史上

平城京

せ、これまで物と物とを交換してゐた不便をお除きになつた。天皇は、紀元一千三百七十年(和銅三年)都を奈良におさだめになつた。その地は、奈良市の西にあり、今はすっかり荒果あはつて、田畑とかはつてゐるが、當時



は、平城京と呼ばれ、唐の都城の制にならつて、四方に羅城を廻らしたもので、中につゝまれた市街は、碁盤の目のやうに正しくくぎられ、宮殿をはじめ、諸官省の建物などがよく整つて、實に壯大なかまへであつた。これから、御七代七十年餘りの間、こゝが都であつたから、世にこの間を奈良時代といふ。



百官の朝賀

(奈良時代)

學問が進んだ

良時代といふ。

この頃は、大學・國學の教育もますます進み、また唐との交通もしげくなつて、大勢の留學生は、熱心に彼の地の文物を輸入したので、我が國の學問は大いに發達した。阿倍仲麻呂は、少年の頃唐に渡り、久しく留學してゐる間に、彼の國の大家と詩文を取りかはして、たいそう文名を揚げた。その後、歸朝することになつて、船に乗らうとする時、折から東の空にすみわたつた月をながめて、今更のやうに奈良の故郷を思ひ出し、慕はしさのあまり、

天の原ふりさけ見れば、春日なる

三笠の山に出でし月かも。

と一首の歌をよんで、日頃の思をのべた。ところが、難風にあ

高國史上

つて、船が吹きもどされたので、再び唐の都に入り、高い官について、とう／＼その地でなくなつた。仲麻呂といつしよに留學した吉備眞備は、ひろく學問を修めて歸朝すると、朝廷につかへて、大學の教育を興し、大いに文化の開發に盡くした。眞備は、その功によつて、官位がだん／＼進み、後には右大臣にのぼつた。吉備大臣の名は、永く後の世まで殘



阿倍仲麻呂が故郷の空を望む

高國史上

書籍が編修された

(古事記)



舍人親王が日本書紀を撰しまたふ

つてある。學問が進むにつれて、種々の書籍が出来た。元明天皇は、太安麻呂に、神代から推古天皇までの歴史をしるして奉らせた。また、今に傳はつてある國史のうちで、最も古い書物である。天皇は、また諸國に仰せつけて、國々の産物や地名などにつ

(日本書紀)

に於ける地理書の始であるが、今に傳はつてゐるのは、僅かに數國のものだけである。また第四十代元正天皇は、舍人親王らに、日本書紀を作らせたまうたが、これから後も、朝廷では、たびたび國史を御編修になつた。

和歌が發達した

これらの書物は、たいてい漢文で綴られた。その爲、漢字の使用がだん／＼盛になり、その音と訓とで國語をしるす方法もまた行はれたので、それにつれて、和歌もたいそう發達した。この頃、柿本人麻呂、山部赤人といふ名高い歌人があつて、共に歌聖と呼ばれ、諸國に遊んで、到るところで名歌をよんだ。大伴家持も、當時のすぐれた歌人で、その撰集と傳へられる萬葉集は、今に残つてゐる。わが國最古の歌集である。この書は、上は天皇から下は一般の人民に至るまで、あらゆる人

(萬葉集)

高國史上

高國史上

風俗

人の和歌を集めたものである。かつて、赤人が東國に遊んだ折、富士山をながめてよんだ、

田兒の浦ゆうちいでてみれば、眞白にぞ

不盡の高嶺に雪はふりける。

の歌も、この中に收められて、廣く世に知られてゐる。かうして、奈良の都は、非常に繁昌して、風俗も昔の質素なものとちがひ、すべて唐の風にならつて華やかになつた。衣服は、袖が廣く、裾が長い優美なものを用ひ、家屋も、瓦ぶきで、赤い繪具を塗り、實に美觀を極めるものとなつた。これにひきかへて、地方には、貧しい人民が多く、交通もたいそう不便であつた。旅人は、自分で食糧を運んだり、飯を木の葉にもつて食事する程で、開化の程度は至つて低かつた。

第十一 奈良時代の佛教

奈良時代で、文化の最もよく開けたのは、第四十代聖武天皇の御代である。この時、鎌足以来代々朝廷につかへて功を立てた藤原氏から、皇后がお出になる例が開かれ、不比等の女光明子しが皇后にお立ちになった。

佛教がひろ
まつた

(國分寺)

(東大寺)

(興福寺)

天皇は、皇后と共に、深く佛教を御信仰ごしんかうあらせられて、國土の安穩あんゑんを祈いのらせ、また萬民の教化をつかさどらせようとの大御心から、勅して、國毎に僧と尼との兩國分寺こくぶんじをお造らせになつた。大和の國分僧寺は、すなはち東大寺とうだいじで、こゝに大佛だいはつを安置して、あがめさせられた。なほ藤原氏の氏寺うぢでらとして建てられた奈良の興福寺こうふくじは、この頃から同家の隆盛りゆうせいにつれて、ますます勢を得て來た。かうして、聖德太子以來しだいにひろ

高國史上

高國史上

慈善事業が
起つた

まつた佛教は、いつそう盛になつた。

佛教は慈悲じひを専らとするから、その信仰が盛になるにつれて、慈善の事業が大いに起つた。光明皇后は、施藥院せやくいんをお開きになり、諸國から藥草やくそうを買取つて、貧しい病人に施療せりやうさせ、また悲田院ひでんいんをお設けになつて、孤兒こじや病人を養育させられた。また和氣清麻呂わききよまろの姉廣虫ひろむしは、出家しゅつげして法均尼ほふきんにといつたが、慈悲の心が深く、數多の棄兒すてごを拾ひろひ集めて育てあげるなど、いろいろうるはしい行が多かつた。

美術工藝が
進歩した

佛教の盛になるに従つて、美術工藝も大いに進歩した。すなはち、しきりに堂塔を建てたり、佛像を刻きんだりするやうになつて、諸國の國分寺には、七重しちぢゆうの塔がそびえ立ち、東大寺には、壯大な大佛殿をはじめ諸堂があつて、大佛の外にたくさ

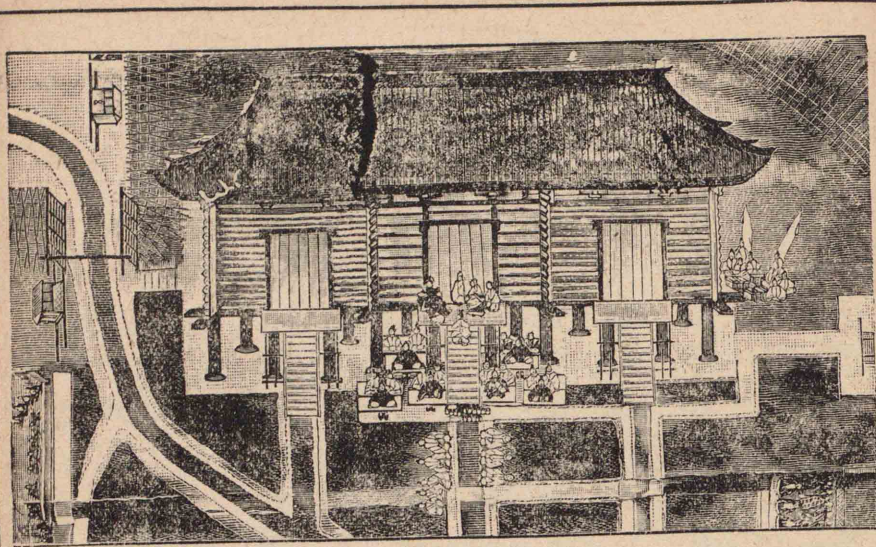
(正倉院)

(天平時代)

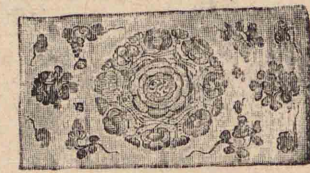
名僧が多く
出た

んの佛像が安置された。また繪畫・織物・染物・漆器などの技術もたいそう進み、がらすの製造法もはや開けてゐて、目を驚かす程の美麗な品物も少くなかつた。これらは、多く、東大寺の境内にある正倉院に、帝室の御物となつて今に傳はつてゐるが、そのすぐれた技術は、廣く世界にほこるに足るものである。この時代を、當時の年號によつて、天平時代といふ。この頃、遠く印度や支那から渡つて來た名僧があつた。中でも、唐の僧鑑眞は、たび／＼我が國に來ようとして、いつも風波に妨げられてゐたが、とう／＼目的を達して來朝し、深く上下の尊信を受けた。またわが國の僧にも、學徳のすぐれたものが多かつた。特に、行基は、あまねく諸國を廻り歩いて、教をひろめると共に、大いに公益をはかつた。それ故、行基が來

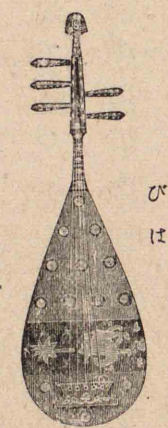
高國史上



正倉院の開封



花まうぜん



びは



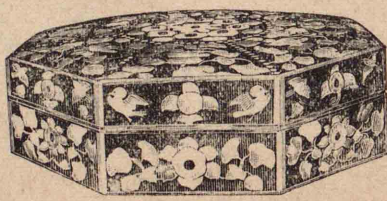
八角の鏡



染ふら



がらすの杯



手箱

悪い僧もあつた

たと傳へ聞くと、村民はわれ先にと集つて來て禮拜し、行基菩薩といつて尊んだといふことである。けれども、一方には、たいへん悪い僧もあつて、たびく事變をひき起して、世の中を騒がした。取分け、道鏡は、第四十代稱徳天皇の御代に、勢にまかせて、わがまゝな振舞が多く、遂に無道の心を起したが、和氣清麻呂の忠烈によつて、忽ちくじかれてしまつた。程なく、天皇が崩御あらせられて、第四十代光仁天皇がお立ちになると、すぐ道鏡を下野に追ひやり、清麻呂らを重ねくお用ひになつた。天皇は、佛事の爲に國費が不足した後をお受けつぎになつて、深く政治に大御心をお用ひになり、御みづから勤儉をお守りになつて、人民をお導きになつた。また天下の税を免じ、各地の飢饉をお救ひになつて、大いに

光仁天皇が弊政を改めたまうた

高國史上

民力を養ひたまうた。

第十三 平安時代初期の發展

都を京都にさだめられた

光仁天皇について、御子第五桓武天皇が御位にお即きになつた。天皇は、かねてから都を遷さうとしていらつしやつたが、今の京都の地が、山川も麗しく、その上、四方の國々から上つて來るにも便利なので、紀元一千四百五十四年(延暦十三年)都をこゝにさだめさせられ、平安京とお名づけになつた。平安京は、奈良の都のかまへをいつそう大きくしたもので、市街や宮殿が、實によく整つて壯麗を極め、皇威のいよく盛なさまを仰ぐことが出來た。これから凡そ四百年の間は、この地が常に政治の中心となつたので、世にこの間を平安

(平安時代)

坂上田村麻呂が蝦夷を平げた

(征夷大將軍)

時代といふのである。
この時代の初に當つて、皇威ははるかに東北地方にまで及んだ。さきに阿倍比羅夫の征伐によつて、日本海の海岸地方はいつたん治つたが、太平洋に臨んでゐる地方の蝦夷はたびたび反いたので、聖武天皇の御代に、陸奥に多賀城を築いてこれを鎮めさせた。けれども、その地方は都から遠く離れてゐて、兵糧の運送が困難なばかりでなく、道路がけはしくて、進軍もなか／＼はかどらなかつたので、容易にこれを平げることが出来なかつた。そこで、桓武天皇は、阿知使主の子孫である坂上田村麻呂を征夷大將軍とし、蝦夷を伐たせた。田村麻呂は、智勇兼備の名將で、蝦夷地の事情に明かるかつたので、進んでこれを破り、膽澤城を築いて鎮

高國史上

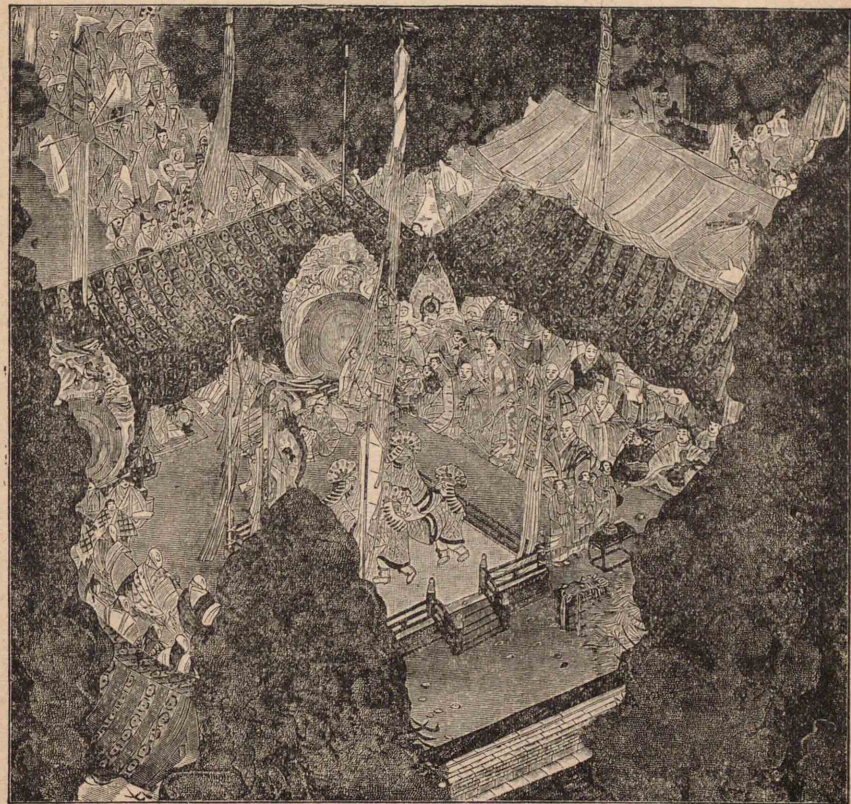
(鎮守府)

新しい佛教が起つた

天台宗

眞言宗

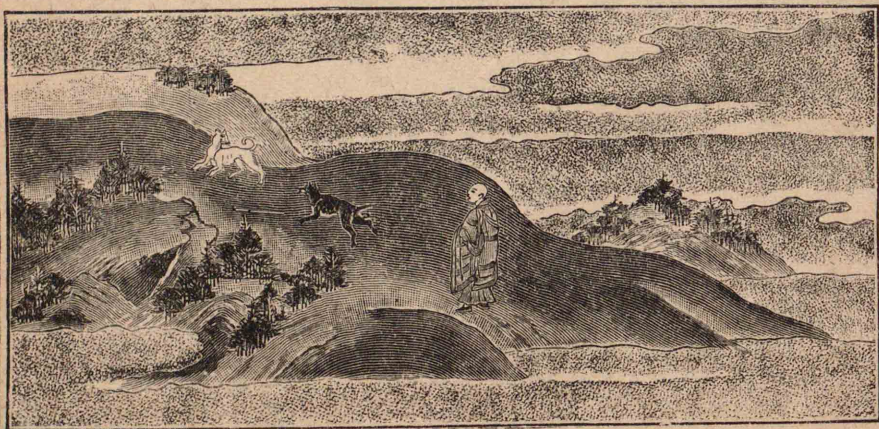
所とした。後にこの城を鎮守府といひ、鎮守府將軍が、こゝにゐる。蝦夷を治めたので、これから、東北地方はまつたく定まり、人々のわづらひがはじめてなくなつた。
佛教も、この頃から大いに改つた。奈良時代には、都の大寺が互に勢力を争ひ、わがまゝな僧もあつて、弊害が少くなかつたので、桓武天皇は、これを革新なさらうとの思召から、最澄、空海の二名僧を選んで、支那にお遣はしになり、新しい佛教を研究させられた。最澄は、近江の人で、天皇の御爲に比叡山に延暦寺を建てたが、勅を受けて唐に入り、天台山で學び、歸朝して天台宗をひろめ、後に、朝廷から傳教大師の謚を賜はつた。空海は、讃岐の人で、最澄と共に唐に渡つて、眞言宗をきはめて歸朝した。さうして、第五十代嵯峨天皇の御時、紀伊の高野



延暦寺の供養

山に金剛峯寺を開いたが、また天皇から京都の東寺を賜はつた。後に、朝廷から弘法大師といふ諡をいたゞいた。この二僧は、いづれも國家の鎮護を専らとして、よくその主

義をひろめたばかりでなく、最澄は、數多の名僧を養成し、空海は、學校を設けて、貴賤僧俗の區別なくこれを教育した。また諸國を廻つて、布教する間に、最澄は、美濃と信濃の山中に宿舎を建てて、旅人の便利をはかり、空海は、讃岐に萬農池の堤を築いて、農民を救つたりなどして、いろ／＼社會の利益を起したことも多く、人々からあつく尊敬せられたので、これから、この兩宗が専ら世に行はれるやう



空海が高山野を開く

漢學が興つ

になつた。

佛教が盛になるにつれて、漢學もまた大いに興つた。嵯峨天皇以來數代の天皇は、文學をお好みになつたが、中でも、嵯峨

嵯峨天皇の御筆

天皇は書道にもす

ぐれさせられ、空海

和歌入夜琴

と並び稱せられた

(私立の學校)

まうた。また當時の貴族は、私立の學校を設けて、めい／＼その子弟を教育し、官立の大學と同様に、おもに漢文學を教へたので、漢文學はますます盛になり、小野篁都良香などの名高い學者がつぎ／＼に出た。篁は、小野妹子の子孫で、少年の頃は、武藝ばかり好んでゐたが、後に志を改めて學業に勵み、遂に一代の學者となつたのである。或時、嵯峨天皇が、唐の詩

高國史上

冬嗣が家を興した

人白樂天の詩句の一字を、わざとお改めになつて、これを篁に示し、その文才をお試しになつた。すると、篁は即座にこれをたゞしたが、その字が全く原作と一致して、天皇を驚かしたてまつつたといふ。良香はまた詩文にすぐれてゐて、或月夜に羅城門を過ぎて、氣霽れて風新柳の髪を梳り、氷消えて浪舊苔の鬚を洗ふの名吟をうたつて、後の世までもその文才をもてはやされてゐる。

第十四 藤原氏の專權

平安時代の初は、政治がよく整つたが、程なく藤原氏が權力

を振るふやうになると、しだいに亂れてきて、皇威もまたやうやく衰へはじめた。藤原氏は、不比等以來、皇室の外戚となつて、その家はますます榮え、冬嗣ふゆつぐになつて大いにあらはれた。冬嗣は、嵯峨天皇の御信任ごしんじんを受け、藏人頭くらうどのとなつて朝廷の機密きみつにあづかり、後、左大臣に進んだが、日頃から同族の保護ほごに力を盡くし、勸學院くわんがくいんを建ててその子弟を教育した。冬嗣の女は、第五十代ごじゅうだい仁明天皇にんみんの宮に入り、その御腹おんはらの皇子ごうし第五十代ごじゅうだい文徳天皇ぶんとくが御位にお即きになつたので、これから、冬嗣の子孫がひとり勢力を得るやうになつた。

良房が攝政となつた

冬嗣の子良房よしふさは、文徳天皇の御代に太政大臣に任ぜられた。また良房の女は、天皇の宮に入り、その御腹ごんはらの皇子ごうし第五十代ごじゅうだい清和天皇せいわが御年僅かに九歳でお立ちになつたので、外祖父ぐわいそふ良房

高國史上

高國史上

基經が關白となつた

を攝政せつしやうとして、政治を行はせたまうた。人臣の身分みぶんで、太政大臣となり、攝政となつたのは、實に良房が始である。

ついで、良房の養子基經もとつねが政治を執るやうになると、藤原氏は、ますます勢力を得た。第五十代ごじゅうだい宇多天皇うたは、御位にお即きになつた時、すでに御成年ごせいねんであらせられたので、攝政を置かず、特に詔して、政治は大小となく基經に白まうさせたまうた。これが關白くわんぱくの始で、これから、藤原氏が天皇の御幼少ごせうせうにあらせられる間は、攝政となり、御成長の後には、關白となつて、政治を行ふことの例が開かれた。

菅原道眞がしりぞけられた

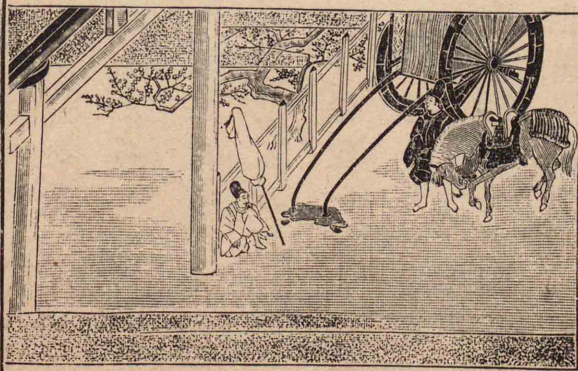
かうして、藤原氏は、朝廷の政治を自分の思ふまゝにしたので、宇多天皇は、たいそう御心配になり、基經が薨こうじた後は、菅原道眞はらのみちざねをお用ひになつて、藤原氏の權力をおさへようと

はかりになつた。そこで、御位を御子^{第十代}醍醐天皇にお譲りになると、やがて道眞を引上げられて、基經の子の時平と並んで政治を行はせたまうた。ところが、まもなく道眞は、時平らの讒言にあつて、太宰府に遷され、とうとうその地で薨じた。道眞は、配所にあつても、日夜^{日夜}文筆を友として、常に君恩の深きをしのびたてまつつて、少しも他を怨むことがなかつた。かつて月明の夜、自分の潔白をば、

海ならずたゝへる水の底までも、

清き心は月ぞ照らさん。

との歌によみあらはして、みづから慰



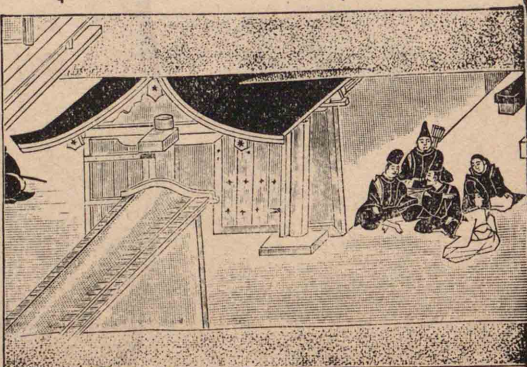
神野北が々人

高國史上

道長の榮華

めたのであつた。

道眞がしりぞけられてから、藤原氏の權勢はいよゝ盛になつて、道長の時、その極に達した。道長は、^{第六十一}一條天皇の御代から長い間政治にあづかり、三人の女を、相ついで三代の^{きさき}后に進めてまつつて、外戚の權を振るひ、その上、數多の莊園を所有して、榮華を極めた。莊園といふのは、もと別莊、園地の義であるが、後には、新に開墾した土地などをも呼ぶやうになつた。莊園は、朝廷から私有を許されたので、藤原氏をはじめ有力者は、この名義の下に、多くの土地を取りこんで、國司の支配を受けず、租税をも納めず、思ふまゝに天



社に參拜す

高國史上

(莊園)

道長の威勢

下の富を私して、少しも憚るところがなかつたのである。中にも、藤原氏一門の莊園は、天下にみち／＼と、その富は、皇室をさへしのぎ、たうていこれに並ぶものがない威勢であつた。第六十三條天皇は、道長の勧めによつて、御心ならずも御位を去らうとせられたが、その折、宮中の月は、もはやこれが御見をさめであるから、後々まで御思出の種となるであらうと思し召して、おそれ多くも、

心にもあらでうき世にながらへば、

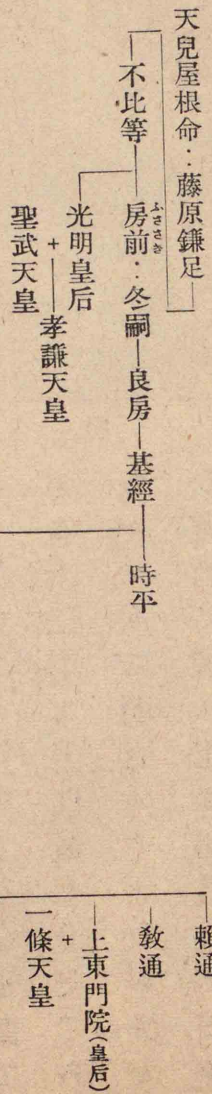
こひしかるべき夜はの月かな。

とよみたまうた。これにひきかへ、道長は、同じ雲井の月をながめて、望月のやうにかけたことのない榮華をほこつた。道長が、皇室をしのいで、いかにわがまゝな振舞をしたかは、こ

高國史上

高國史上

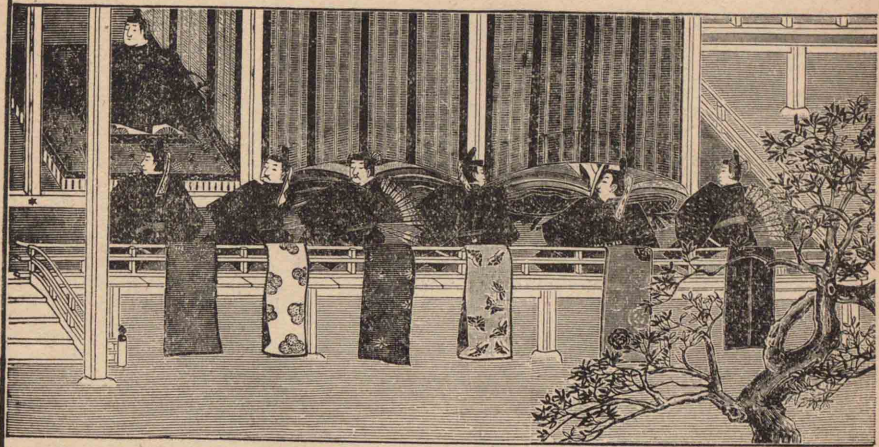
れでも知ることが出来る。



貴族の生活

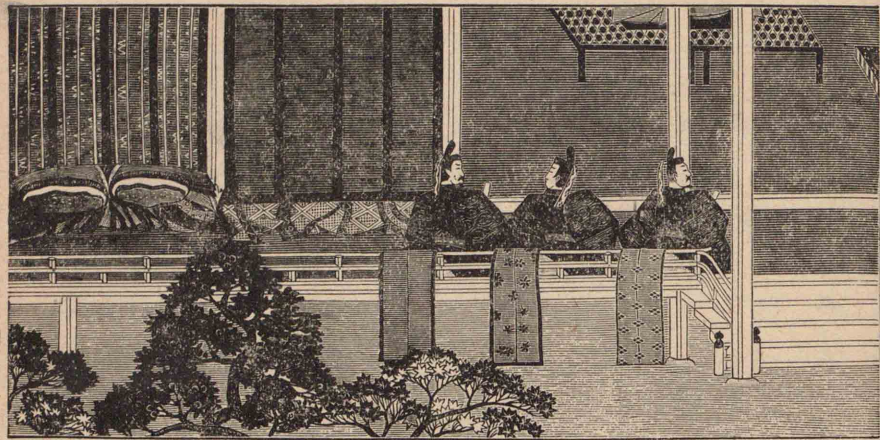
第十五 朝臣の榮華と文化

藤原氏が權力を振るひ、榮華に耽つてから、京都の貴族は、い



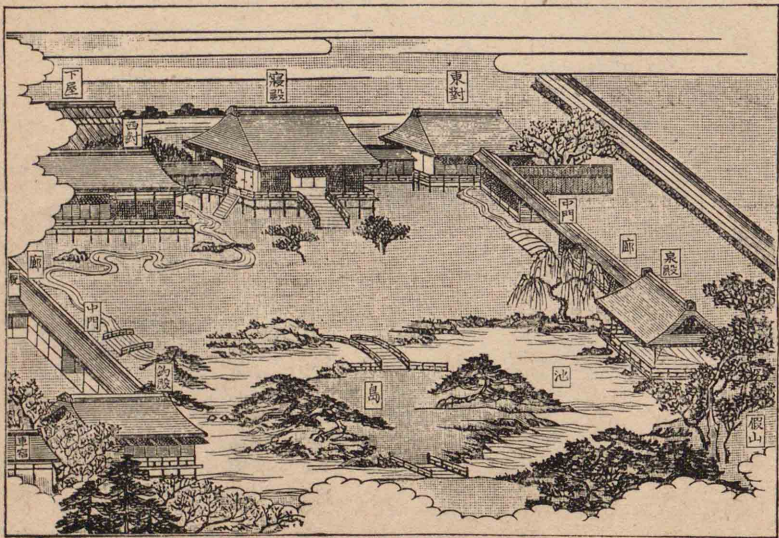
朝臣

づれも奢を極めた邸宅は寢殿造といつて殿舎のかまへはもちろん庭園の造も至つて麗しく中にははるく海水を運んで来て藻塩たく塩竈の風景をうつしたのもさへあつた。衣服も華やかで四季をりくゝの意匠をこらし男子の正装である束帯女子の正装である十二単などは最も優美である。かやうに朝臣の生活はおひおひ遊惰に流れ、花の朝月の夕に、詩歌管絃の宴を開いて、風流の遊に



の風俗

のみ耽る有様であつた。



寢殿造

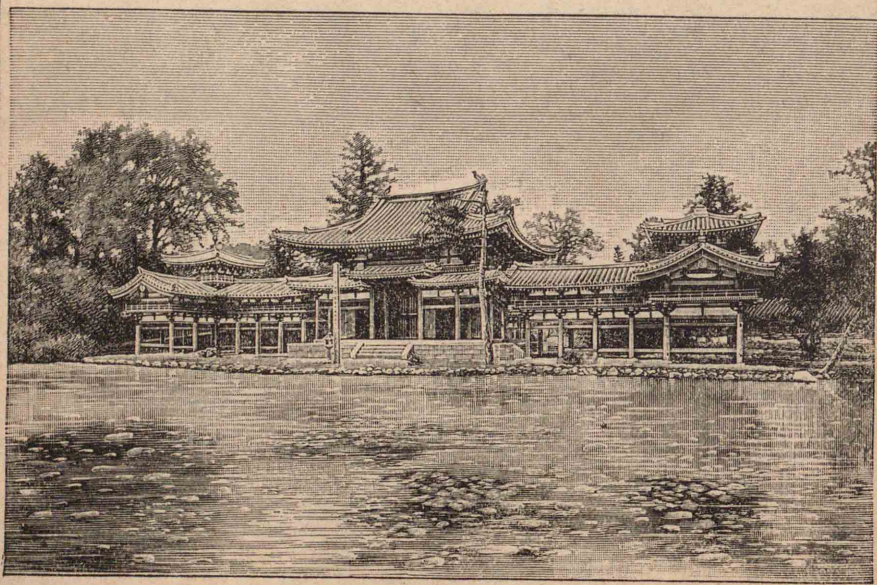
美術工藝が
進んだ

(平等院)

當時の貴族は、大いに佛教を尊んで阿彌陀佛の信仰が盛であつたから、その御堂を建てることが行はれた。藤原道長は、富にまかせて法成寺を京都に建て、一代の名工定朝の刻んだ佛像を安置し、道長の子頼通は、宇治川の清流に臨んだ別荘を寺として平等院と名づけた。法成寺の結構は、善美を極めて、人目を驚かしたが、後、すたれて、今はあとかたさへ残してゐない。しかし、平等院は、今もなほその一部が保存されて、藤原氏の榮華の名残を留めてゐる。平等院の佛殿を鳳凰堂といひ、全體の形を、ちやうど鳥が兩翼を張つて、尾を引いてゐるやうにしくみ、棟の兩端に立てた金銅造の鳳凰は、風のままに、舞ふしかけて、堂の名もこれから起つたのである。堂内にまつた本尊は、定朝の作つた丈六の阿彌陀佛で、壁

高國史上
高國史上

に畫がいた極樂の繪は、丹青の妙を極めたものである。名高い畫家には、巨勢金岡がある。この人は、宇多天皇の御代に、紫宸殿の障子に支那の名臣の肖像を畫がいて、名を揚げた。子孫も代々その業をつぎ、中には、非常に佛畫に巧なものもあつた。かやうに、當代の美術が、すでに唐風をはなれて、新し



鳳 凰 堂

漢文學が衰へた

い様式やうしきとなると共に、文藝もまたたいそう進歩して、國風の優美な特色とくしきをあらはした。平安時代の初には、唐との交通はなほ行はれたが、宇多天皇の御代の頃は、唐國はまつたく衰へて、内亂がつゞき、學藝を求めること、もはや無益な有様となつてゐたので、天皇は、菅原道眞の意見をお用ひになつて、遣唐使をおやめになつた。これから、使節の派遣が永く絶えた爲、今まで盛であつた漢文學はだん／＼衰へ、これに代つて國文學が發達するやうになつた。

國文學が興つた

(平假名)
(片假名)

これより前、漢字の草體さうたいから作られた平假名ひらがな、漢字の扁へんまたは旁つくりから工夫された片假名かたかななどが、しだいに行はれて、國語をうつすことがたやすくなつたので、國文學は目立つて進んだ。紀貫之きのつらゆきは、かつて土佐守とさのかみとなり、任期が満ちて歸京する

高國史上

(古今集)

時、假名文で日記を綴つた。これを土佐日記とさの日記といつて、今に残つてゐる最も古い假名文の紀行きかうである。貫之はまた歌道にすぐれ、醍醐天皇の勅をいたゞいて、萬葉集以後のすぐれた歌を撰して、古今集こきんしふと名づけた。この中には、天皇の思召によつて、貫之の作が最も多く收められ、

人はいさこゝろもしらず、故郷ふるさとは

花ぞ昔むかしの香かににほひける。

をはじめ、その數が一百首に及んだ。實に、この集は勅撰和歌ちよくせんわか集しふの始で、和歌の勅撰は、これから後たび／＼行はれた。

國文學の進むにつれて、書風もだん／＼優美となり、小野篁の子孫である道風みちかぜは、藤原佐理すけまさと共にこの書風をよくして、無比の能筆のうひつといはれた。藤原行成ゆきなりは、才藝の譽が高かつたが、

書風が優美となる

藤原行成の筆

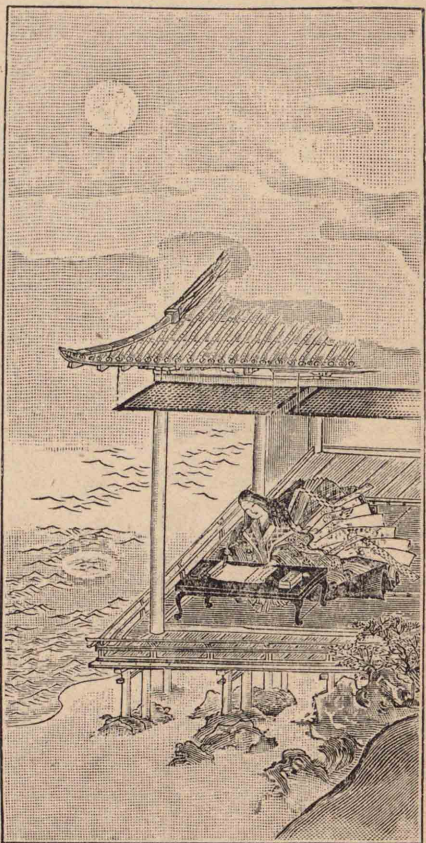
わが子みはちるよやちるよをいし
のほろとくありて、くさむすま

殊に假名がきが上手で、紀貫之と並んで、その流が後の世まで傳はつた。

假名文字は、いつたいに平易であるから、女文字といはれ、おもに女子の間に行はれて、女流の文學を發達させる助となつた。その頃、藤原氏の人々は、競つて自分の女を宮中に入れ、その際に、文才ある女子を選んで、これが侍女としたので、しぜんと女子の學問を勵まし、才學のすぐれた宮女が多くあらはれた。取分け、紫式部は、生まれつき至つてさしく、いづれの文藝にも通じてゐたが、少しも自分の才學をほこつたこ

名高い才女
たがあらはれ

高國史上
高國史上



紫式部が源氏物語をあらす

とはなかつた。早く夫に先立たれ、ひとりその女を教養して、貞節を守り、

(源氏物語)

後に、一條天皇の皇后上東門院に召されて、その師となつた。式部のあらはした源氏物語は、當時の上流社會の人情風俗を寫した麗しい假名文で、古今の名作として、永く世に重んぜられてゐる。また同じく一條天皇の宮におつかへした清少納言は、一代の才女として名高く、そのあらはした枕草子も、世にまれな名文として、源氏物語と並び稱せられてゐる。

この外に、いにしへの奈良の都の八重櫻をよんで、道長を感心させた伊勢大輔や、まだふみも見ぬ天の橋立を歌つて、公卿を驚かした小式部内侍など、歌文にすぐれた才女が、一時に世に出たことは、實に前後にためしのないことである。

第十六 武士の興起

地方の政治が亂れた

京都では、藤原氏をはじめ朝臣は、皆、太平の夢をむさぼり、日夜奢に耽つて、少しも政治を顧みなかつたので、その間に、地方は日に月に亂れていった。すなはち、勢力ある人々が、私有してゐる莊園は、ますます増して、政府の収入が減り、これを補ふ爲に、租税はおひく／＼重くなつた。その上に、國司が私利をはかつて、人民を苦しめることが少くなかつたから、生活

高國史上

武士の起

に困るものが多くなり、盜賊が所々に起つた。けれども、政府の武備がゆるんでゐて、これを鎮めることが出来なかつた。その頃、才氣はあつても、藤原氏におさへられて、立身出世の出来ないものは、たいてい國司となつて地方に下つた。さうして、しまひには、その土地に永住して豪族となり、地方の亂れるのにつれて、常に武事を練習し、多くの私兵をたくはへて、みづから衛るやうになつた。これが武士の起である。これから、全國皆兵の制度はまつたく破れて、兵農がしぜんと分れることとなつた。

(兵農の別)

東西に亂が起つた

武士の中で最もあらはれたのは、源平の兩氏である。平氏は、桓武天皇の曾孫、平高望から出、源氏は、清和天皇の孫、源經基から出てゐる。高望は上總の國司となり、一族は、その地方に

土着して、しだいに東國にはびこつた。第六十代朱雀天皇の御時、高望の孫將門は、同族と争つて、伯父國香を攻め殺し、勢にまかせてしきりに近國を侵し、とう／＼謀叛をはかるやうになつた。弟の將平が、順逆の理を説いて、おだやかに諫めたけれども聞入れず、後には偽宮を下總に建てて、私に文武の百官を任命したりした。朝廷では、將を遣はしてこれを伐たせられたが、まだ到着しないうちに、國香の子貞盛が、下野の豪族藤原秀郷と力を合はせて、將門を誅してしまつた。時に天慶三年である。この頃また、藤原純友といふものがあつた。さきに伊豫の國司となり、海賊の追捕を命ぜられたが、かへつてみづから海賊を従へて、瀬戸内海の地方をかすめ、またひそかに兵を京都に遣はして、火を放つて、都下を騒がした。そ

高國史上

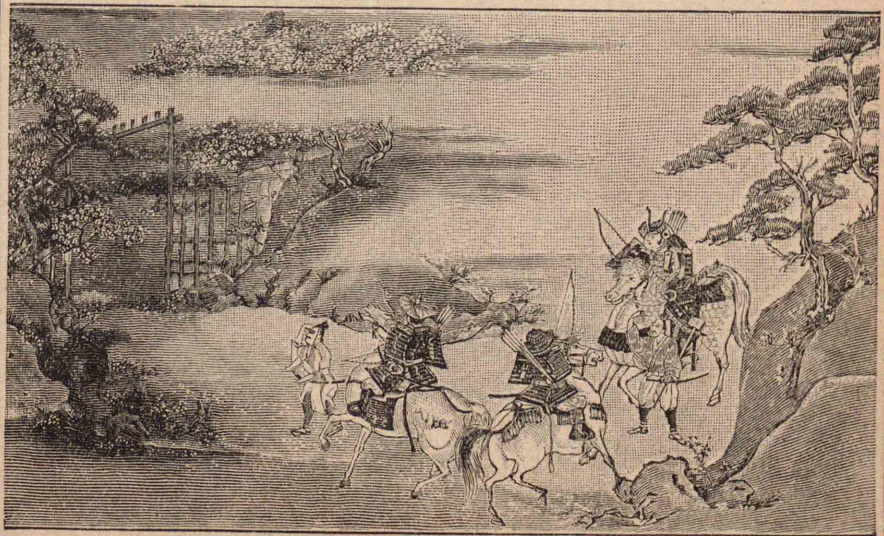
(天慶の亂)
源氏は東國
で功を立て

こで、天慶四年に、經基らが朝廷の御命令を受けて、これをうち滅した。この東西の亂を天慶の亂といふのである。この戦功で、貞盛秀郷、經基らは、それ／＼鎮守府將軍に任せられ、これから、武士が非常に重んぜられるやうになつた。取分け、源氏は、經基の子滿仲、滿仲の二子賴光、賴信などが深く藤原氏に信賴せられ、その家の爲に功を立て、またたび／＼盜賊を平げて、勇名をとゞろかした。第六十代後一條天皇の御代に、平忠常が上總下總に據つて反き、しきりに官軍を破つて、勢が非常に盛であつたが、賴信が勅を受けると、たゞちにこれを平げた。それから二十年ばかりたつて、第七代後冷泉天皇の御時、賴信の子賴義は、義家と共に、陸奥の安倍氏を滅し、後、義家は、藤原秀郷の子孫である清衡と共に、出羽の清原氏の

東國の武士
が源氏の恩
威に服した

亂を鎮めた。

かうして、源氏は、父子三代相
ついで功を東國に立て、たい
そう武名を揚げたのであつ
た。その上、頼義は、慈悲の心が
深く、常に部下をかはいがり、
みづから陣中を廻つて士卒
をいたはつたばかりか、戦後
には、ねんごろに社寺や民家
の損害をつぐなつたので、士
民は、心からよくなつた。義
家は、文雅の道にもすぐれ、陸



源義家が勿來關で歌をよむ

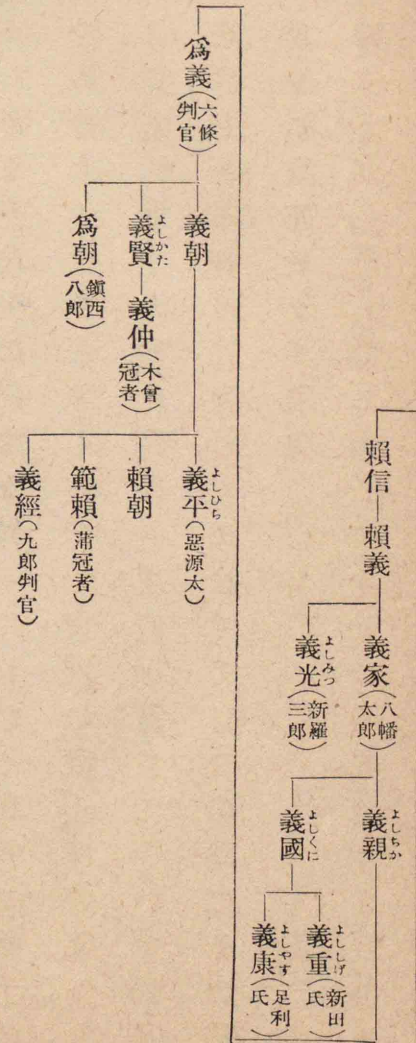
奥におもむいた折、勿來關を過ぎて、花が盛に散つてゐるの
を見て、

吹く風をなこそその關と思へども、

道もせに散る山櫻かな。

とよんで、今に至るまで雅名を残してゐる。また部下に對し
てたいそうなさけ深く、陣中寒さに凍えたものを、みづから
抱盪めたり、また自分の財産を惜しげもなく與へて、將士の
戦功をねぎらつたりなどしたので、東國の武士は、いよく
源氏の恩威に服した。後に、源氏が幕府を鎌倉に開いて、武家
政治をはじめめるやうになつたのは、すでにこの時に、その基
礎が築かれてゐたのである。

清和天皇—貞純親王—源經基—滿仲—頼光……………頼政(源三位)



第十七 院政 武士の勢威

後三條天皇
が藤原氏を
おさへたま
うた

後冷泉天皇について、第七十代後三條天皇が御位にお即きになつた。御母は、三條天皇の皇女であらせられた爲、天皇は、少しも藤原氏に憚りたまふことがなかつた。なほ、天皇は、剛健な御氣象で、すでに、東宮の御時から、關白頼通らのわがまゝな

高國史上

記録所を設
けられた

院政の御志
をお果しに
たならなかつ

振舞をお憤りになつてゐたので、御位にお即きになると、大いにこれをおさへようとなさつた。

この頃、藤原氏をはじめ、貴族や社寺の莊園はいよゝゝ多くなつて、弊害がひどかつたので、天皇は、はじめて記録所を設けて、莊園を取調べ、そのうち、新に置いたもの、または證書の明らかでないものを、ことゝくおとゞめになつた。また御みづから御衣食を御節約になつて、世の奢を戒めたまうた。そこで、皇威は再び振るつて、藤原氏はしだいに實權を失ふやうになつた。

けれども、頼通の弟關白教通らは、なほ父祖の餘威によつてわがまゝな振舞を改めず、天皇の御心にそむきたてまつることが多かつた。それ故、天皇は、御位をお退きになり、院にあ

らせられて政を聽きたまひ、あくまで、政權が攝關家に移る弊害を除かうとおはかりになつた。それで、天皇は、御在位僅かに五年で、御位を御子の^{第七十代}白河天皇にお譲りになつたが、まもなく崩御あらせられて、せつかくの御志をお果しになることが出来なかつた。世の人々は、皆、このことをお惜しみ申しあげ、痛みたてまつらぬものはなかつた。

白河天皇は、また御父の御志をついで、政を御みづからなさつたが、ついで、御位を^{第七十代}堀河天皇にお譲りになり、上皇となつても、なほ政を院中でお聴きになつた。これから、院政の例がはじまり、専ら院宣で天下に御命令あらせられたので、政治の實權は院中に移り、今まで政權を思ふまゝにした攝政關白は、たゞ名のみとなつて、藤原氏はまつたく勢を失つ

院政がはじまつた

高國史上

高國史上

てしまつた。

僧兵が起つた

白河上皇は、深く佛教を御信仰になり、御髪をそつて法皇と申したまうた。法皇は、御みづからけはしい山路をしのいで、高野や熊野などに、十度餘りも御參詣になり、しきりに寺や塔を建てさせ、佛像をお造らせになつた。この頃、心がけのよくない人民が、租税をのがれる爲に、僧となつて諸大寺に集り、佛法の保護を名目として、武藝を練るものが多く、遂には僧兵といふものが起つた。中でも、叡山の延暦寺や、奈良の興福寺のやうな大寺では、いづれも多くの莊園を所有して富んでゐた上に、數千の僧兵をたくはへて、その勢力はいよいよ強く、今や法皇のあつい御信仰を受けて、大いに増長し、横暴を極めた。當時、山法師といへば延暦寺の僧兵を指し、奈良



法師といへば興福寺の僧兵に限られたやうな有様で、これらの僧兵は、互に相争ひ、また不平の事があると、たゞちに大舉して京都に

僧兵が大に強訴した。それで、法皇は、天下に朕の意のまにならぬものは、たゞ賀茂川

武士が勢を京都にしき

平氏は西國に勢力を占めた

(伊勢平氏)

の水と、雙六の采と、山法師とだけである。と仰せられて、お歎きあらせられた。

かやうな時に當つて、朝臣が柔弱で、僧兵の暴行をおさへることが出来なかつたので、朝廷では、源平の二氏にお命じになつてこれを鎮め、京都を守らせられた。これから、武士が、藤原氏に代つてだん／＼勢を京都にしき、後に、天下の政權を得るやうになる基を開いた。

この頃、京都に召された勇士に、平忠盛がある。平氏は、さきに、貞盛が、將門を滅して武名を揚げ、その一族は、伊勢の國にひろがつて、世に伊勢平氏といはれたのであるが、その後しばらく勢が衰へ、源氏にくらべて、やゝ劣るところがあつた。しかるに、忠盛が出てから、白河鳥羽の兩上皇につかへて御信

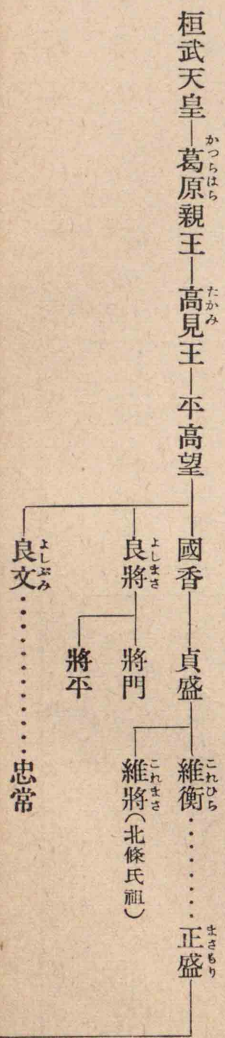
武士の實力が重んぜられた

任をかうむり、また勅を受けて、山陽・南海兩道の海賊を伐つて功を立て、たび／＼西國の國守に任ぜられ、しまひには朝官にのぼつて、大いに家名をあらはした。これから、平氏は、西國に勢力を占め、源氏と對立して勢を競ふこととなつた。その頃、政府は、佛教を尊び、慈悲を専らとしたから、天下に命令して殺生を禁じ、刑法も非常にゆるんだが、武士はかへつて賞罰を明らかにして、嚴重に部下を取締つた。或時、忠盛の家臣が、禁制を犯して鳥を捕らへたので、その罪を責められたところ、「私は、主人の命令によつて鳥を捕らへた。主命を怠ると、死刑に處せられるが、政府の罰は輕くて恐れる程でもない。禁制を犯したのです。」と、平氣で答へたといふ話がある。かやうに、政府の威令は、おひ／＼に輕くなり、武士の實

高國史上

源氏が衰へて平氏が勢を得た

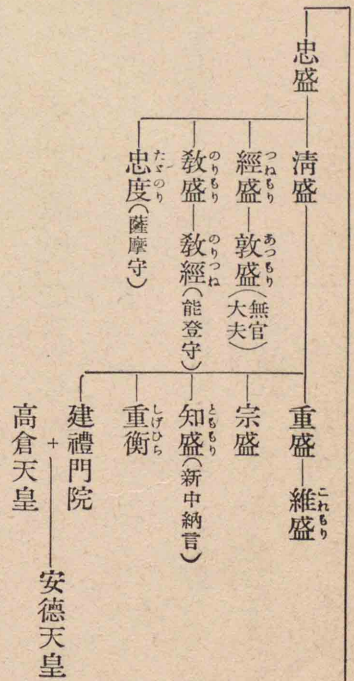
力が、世に重んぜられるやうになつた。たま／＼、保元の亂に源平の兩氏が召された際、義家の孫爲義は、子の爲朝らと共に敗北して、源氏の人々は多く殺された。これに反して、忠盛の子清盛らは、この亂ををさめて功が多かつたので、平氏は、ます／＼勢を得た。爲義の長子義朝は、この形勢を見て、平氏を除かうとはかり、平治の亂を起した。清盛は、子の重盛らと共に、これを鎮めて大功を立て、義朝は遂に殺され、その子頼朝は伊豆に流されて、源氏は忽ち衰へ、平氏の勢は、朝日の昇るやうに盛になつた。



平氏の全盛

第十八 平氏の驕奢

平清盛は、平治の戦功によつて、官位がしきりに進み、とうとう従一位太政大臣となり、はじめて武人で政權を握ることとなつた。それで、子の重盛をはじめ、一族、皆、高官にのぼつて、公卿に列するものが十人餘り、その他の朝官となるものが三十人餘り、一門の莊園は、全國五百餘箇所にわたつて、非常



高國史上

清盛が宋と貿易を營んだ

清盛のわが

な富強となつた。その上、清盛は、藤原氏の例にならつて、その女の建禮門院を、第八代高倉天皇の皇后とし、後に、その御腹の御子、第八代安徳天皇がお立ちになると、皇室の外戚として、藤原氏にも劣らぬ榮華を極めた。

平氏の子弟は、文弱に流れて、しだいに武人の特色を失つたが、清盛が當時の文化に盡くした功は少くなく、今にその名残をとぐめてゐる。清盛は、安藝の嚴島に壯麗な社殿を建て、攝津の兵庫港を修築して、海運の便をはかり、こゝで宋國と貿易を營んだことなどがあつた。宋とは、さきに唐に代つて、支那を統一した國である。

清盛は、勢にまかせてわがまゝな行が多かつたので、後白河法皇の近臣らは、ひそかに平氏を滅さうとはかつた。ところ

が事あらはれて、或は斬られ、或は流された。清盛は、なほ法皇をも疑つて幽いづしたてまつらうとしたが、忠孝の志の厚い重盛の諫によつて、いつたんは思ひとゞまつた。けれども、重盛が薨じた後は、清盛はもはや憚るものとしてなく、とうく、おそれ多くも、法皇を幽いづしたてまつつて、關白以下三十人餘りの官職を奪つたので、いよく上下の人望を失つた。

源頼政が平氏を滅くさうとした

諸國の源氏が起つた

時に、源頼政よりのまさは、法皇の御子もちひと以仁王を奉じ、令旨れいしを諸國の源氏に傳へて、平氏を滅くさうとした。たまく謀はかりごとがもれて、敵兵に襲おそはれ、宇治に戦つて敗れ、頼政は平等院に入つて自殺し、王もまた流矢ながれやにあたつて薨じたまうた。かやうに、頼政の企しつぱいは、失敗に終つたけれども、久しく諸國にひそんで機會きくわいを待つてゐた源氏は、王の令旨をいたゞくと、

高國史上

清盛が薨じた

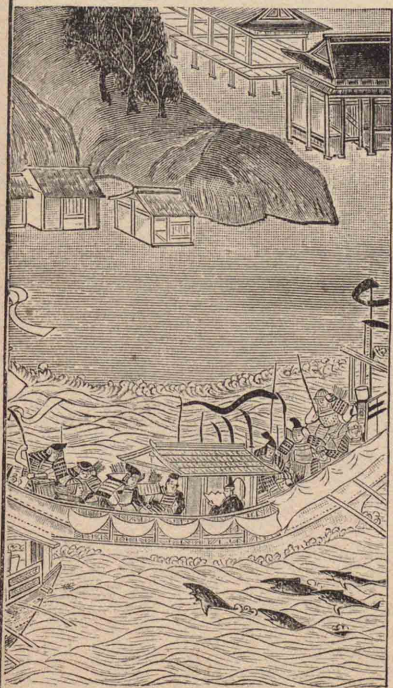
平氏の西海落

所々に起つた。中でも、頼朝は、北條時政ほうちうときまさの助をかりて、伊豆に兵を擧げたが、かねてから源氏に心を寄せてゐた東國の武士は、先を争つてこれに應おこじたので、勢は非常に振るひ、源義仲よしかもまた兵を信濃に起して、北國を従へた。

清盛は、大いに驚き、兵をやつてこれを伐たせたが、すでに都の遊惰の風にしみ込んでゐる平氏は、もろくも敗北して、皆逃歸つた。清盛は、かやうな不安のうち、病にかゝつて薨じたが、その時、頼朝の首を見ないで死ぬのは、何より殘念である。きつと彼の首をとつて、我が墓そなに供へよ。」と遺言ゆいごんした。けれども、子の宗盛むねもりは、臆病おくびやうであつたから、義仲が京都に迫ると、これを迎へ戦はうともせず、一族と共に、安徳天皇を奉じて、住みなれた都を後に、あわたゞしく西國に落ちて行つた。

平氏が亡んだ

義仲は、京都に入ると、やがて功にほこつて、法皇の仰にそむきたてまつり、部下の兵士も、民家をかすめたり、社寺をあらしたりして、亂暴をしたので、頼朝は、弟の範頼、義経をやつて、これを伐たせた。二人は、義仲をうち滅し、その勢で、平氏を一谷に破り、ついで、義経は、これを屋島に襲ひ、更に八百艘餘りの兵船を率ゐて、壇浦に追ひうつた。平氏は、五百艘餘りを以て迎へ戦つたが、とう／＼大敗して、一門すべて討死し、もつたいなくも、安徳天皇は、清盛の妻二位尼にいだかれたまうて、海におはいらになつた。この時、三種の神器の



壇

高國史上

(御劔)

うち、御劔は、海に沈んで再び出なかつたので、後、伊勢神宮の御劔を以て、これに代へたてまつつた。

かうして、驕る平家は、久しからず、とうとう西海の波に消えうせてしまつた。時は、壽永四年の花散る頃で、さきに清盛が太政大臣となつてから、僅かに十九年、そのはかなさは、春の夜の夢にも似て、まことにあはれな末路であつた。



浦の戦

頼朝が鎌倉に據つた

鎌倉幕府の基が定まつた

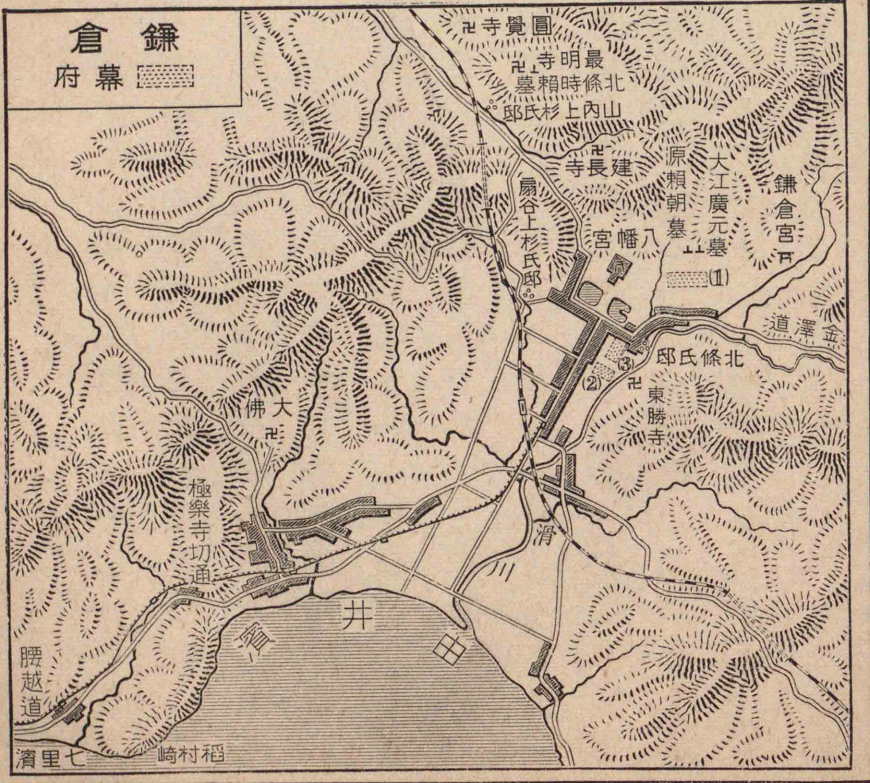
第十九 鎌倉幕府の創設

はじめ、頼朝は、以仁王の令旨を奉じて兵を擧げると、平氏の將大庭景親と相模の石橋山に戦つて、いつたん敗れたが、やがて勢を盛返して、鎌倉に據つた。鎌倉は、三方山に圍まれ、一方海に臨んだ天然の要害である上にかつて、頼義が八幡宮を建てたことなどがあつて、早くから源氏と縁故の深い地であつた。それ故、頼朝は平氏を富士川に破つた後も、なほ西上を見あはせ、鎌倉に引返して、東國の根據を固めた。さうして、まづ侍所を置き、和田義盛を長官として、武士を取締らせ、ついで政治法律にくはしい大江廣元・三善康信らを京都から招いて、政所を開き、廣元を長官として、もろくの政を統べさせ、問注所を設けて、康信らに訴を聽かせた。そこで、鎌倉

高國史上

守護地頭を置いた

幕府の基がはじめに定まつた。そのうち、義経は平氏を滅して、武名が大いにあらはれた。頼朝は、これをそねみ、義経が平氏の捕虜を連れて、鎌倉に入らうとするのを追ひかへし、更に人を京都へやつて、その邸を襲はせた。義



經は所々に逃げかくれたが、これをかくまふものもあつて、行方が知れなかつたので、兵亂のうはさがとりくに起り、世の中がたいへん騒々しくなつた。そこで、頼朝は廣元の勸めにより、北條時政をやつて、朝廷に、今、義經が行方をくらまして、いつ戦亂が起るかも知れませぬから、守護地頭を置いて、あらかじめ謀叛人の出るのを防ぎたいと思ひます。」と、請ひたてまつらせた。朝廷では、いたしかたなく、これをお許しになつた。守護は國毎にあつて、軍事と警察の事をつかさどり、地頭はすべての公領・莊園に置かれて、おもに年貢の取りたてをつかさどる役目である。頼朝は、自分の部下をそれぞれ守護地頭に任じて、みづからこれを統べたので、天下の實權は、しぜんとその手に移ることとなつた。

高國史上

高國史上

奥州を平げ

(平泉の藤原氏)

これから、頼朝の威勢は、ほとんど全國に行渡つたが、たゞ奥羽は、邊鄙で、威令がまだ届かず、さきに清原氏の亂に功を立てた藤原清衡の子孫が、代々平泉にをり、大いに勢を振るつてゐた。義經は、かつて清衡の孫秀衡に身を寄せたことがあつたから、鎌倉の搜索がいよゝきびしく、今や身を隠す所もなくなつたので、はるく逃げるびて、再びこの家にたよつて來た。ところが、秀衡が死ぬと、子の泰衡は、頼朝に迫られて、とうとう衣川の館を襲つて、義經を殺した。けれども、頼朝は、泰衡がいひつけを斷行することの遅かつた罪を責め、みづから大軍を率ゐて奥州に向かつた。軍馬を進めて、白河關を越える折は、ちやうど初秋の頃であつたので、部下の勇士梶原景季は、馬をひかへて、

秋風あきかぜに

草木くさきの露つゆを

はらはせて、

君きみが越こゆれば

關守せきもりもなし。

とよんだ。まことに

この歌のとほり、頼

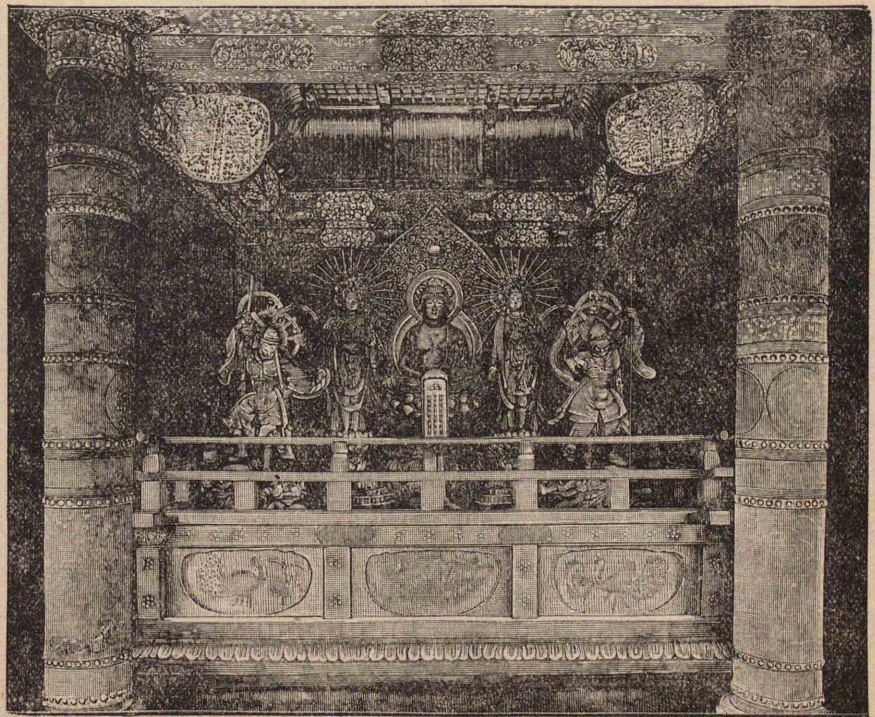
朝あその盛はたな旗風かぜは、忽

ちにして敵軍をな

びかせ、僅かの間に

泰衡を滅した。この

時、平泉の館は兵火



堂 色 金

(中尊寺)

にかゝつて、清衡せいこう以来の榮華のあとは、むざんにも一片いっぺんの煙と消えうせてしまつたが、莫大ばくだいな富をかけて營たくらんだ中尊寺ちゆうそんじは、幸にも類焼るいせうを免まぬかれ、その金色堂こんじきだうは今に残つて、華麗な裝飾さうじやくが、なほ昔の榮華を物語つてゐる。

頼朝らいちょうが征夷大將軍せいゐだいしゆんに任たせられた



源 頼 朝
なく紀元一千八百五十二年にんじゅうはちごととせに、後鳥羽天皇ごととてんの建久三年けんきゅうさんに、頼朝は、征夷大將軍に任ぜられた。これから幕府は名實共に備り、政治の中心は、しぜんと京都を離

武士道を養成した

れて鎌倉に移り、わが國の政治上に、一大變動を來たすこととなつた。

頼朝は、八年間將軍職にゐたが、その政令が簡易であつて、よく行届いたので、士民は皆喜び服した。頼朝は、平氏が柔弱に流れて、早く亡びたのにかんがみて、部下の奢を戒め、武藝を勵まし、殊に孝義を重んじて、武士道の養成につとめた。かの曾我兄弟が、幼い頃から艱難をしのいで、とう／＼富士の裾野の卷狩の折に、父の讐を討つた行に感激して、ねんごろに兄弟のなきあとを弔はせ、奥州征伐の時、平泉の家臣が、泰衡を殺して降参すると、長い間の主恩を忘れた不義を責めて、これを斬らせたのも、皆、武士道を勵ます爲である。そこで、武士は、常に儉約を守つて武を尙び、また互に恩義を重んじ、名

高國史上

を惜しんで、死を恐れぬ美風をつくりあげた。この氣風は永くつゞいて、鎌倉武士の譽は、後の世までも名高くなつてゐるのである。

藤原秀郷……清衡——基衡——秀衡——泰衡
(平泉三代)

第二十 北條氏の民政

頼朝は武家政治をはじめて、よく天下を治めたけれども、生まれつき至つて疑深く、さきには義経を滅し、ついで範頼をも殺し、またとかく功臣を遠ざけたので、自分の助となるものがだん／＼なくなり、源氏の家運は、しだいに衰へていつた。ところが、頼朝の妻政子の父である北條時政は、はじめか

北條氏が幕府の實權を握つた

政子が政治を聞いた

ら、源氏を助けて功があり、勢がなか／＼盛で、頼朝が薨じた後は、將軍頼家を廢して、その弟實朝を立て、みづから執權となつて威勢を振るつた。やがて、實朝が害せられると、時政の子義時は、姉の政子と相談して、京都から藤原頼經を將軍に迎へ、自分は執權となつて、政治を思ふまゝにした。この後も、藤原氏または皇族から幼い方を迎へて將軍と仰ぎ、北條氏がひとり幕府の實權を握つたのであつた。源氏は、僅かに三代で亡び、新に鎌倉の主となつた頼經は、まだやつと二歳の幼年であつたので、政子が専ら政治を聽いた。政子は雄々しい生まれつきで、男まさりといはれた。かつて、富士野の卷狩に、頼家が幼少の身で一匹の鹿を射とめた時、頼朝は喜のあまり、特に使をやつて政子に知らせた。する

高國史上

(尼將軍)

泰時の民政

と、政子は、武將の嫡子が鹿を射たとして、別に珍しいことでない。といつて、かへつてその仰々しさを笑つたといふことである。かやうな氣象であつたから、頼朝の創業にあづかつて大いに内助の功を立て、夫に先立たれて、尼となつた後も、久しく幕府の政治にたづさはり、よく將士をなつて、權勢があつた。それ故、世に政子を尼將軍と呼んだ。かうして、鎌倉の勢力はますます強く、執權北條氏は、よく頼朝の遺法を守つて、心を民政に用ひた。義時の子の泰時は、無慾な人で、父の遺産を分つ場合にも、執權の身には、領地の望はないとして、自分の取分は少くし、弟妹に多く分け與へた。さうして、政治を行ふには、公平を第一として、必ず他の人々の意見を聞いてこれを決し、また

第八十代後堀河天皇の貞永元年

(貞永式目)

に、貞永式目五十一箇條を定めて、武家政治の本とするところを示した。或年、飢饉で、諸國の人民が飢に苦しみ、四方に流浪するものが多かつたので、泰時は、美濃の國で、それらの人を取調べ、他國に行くものには、一々旅費を與へ、こゝに留つて住みたいと望むものには、ことごとく家業につかさせた。それ故、人々は、その善政に喜び服し、泰時がなくなつた時は、皆、父母を失つたやうに歎き悲しんだ。

時頼の民政

泰時の孫時頼は、幼い時に父を失ひ、母に育てられた。母は、松下禪尼といつて、みづから障子を切張して、儉約を教へた程の賢夫人であつた。時頼は、よくその戒を守つて、質素な生活をして部下を導いた。さうして、執權をやめて最明寺に入つた後も、諸國を廻り歩いて、したしく民の困苦をたづねたの

高國史上

善政の結果

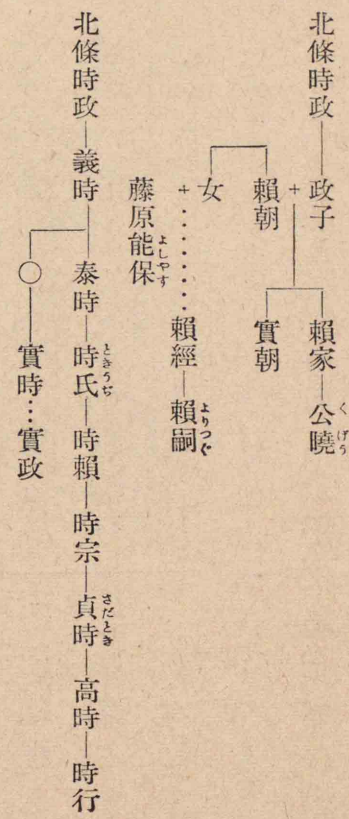


北條時頼が諸國を廻る

で、地方の役人は、互に戒め合つて政務に勵み、風俗も大いに改つた。そこで士民は、皆、時頼になつき、時頼がなくなつた時には、悲しみのあまり、出家するものが非常に多かつたといふことである。

かやうに、北條氏の政治は、公平・仁慈を専らとしたので、人々は、皆、心から北條氏に服し、永く幕府に反くものがなかつた。また常に節儉をすゝめて、民力を養はせたので、國は富み榮

えて、幕府の財政も豊かになり、元寇のやうな國難に當つても、よく莫大な費用をさへへることが出来たのである。



第二十一 元寇

泰時・時賴の頃は、國內が太平であつたが、時賴の子時宗の代になつて、思ひがけなく蒙古と交渉がはじまり、遂には未曾有の國難となつた。蒙古は、鎌倉時代の初、支那の北方に興つ

た蒙古が興つ

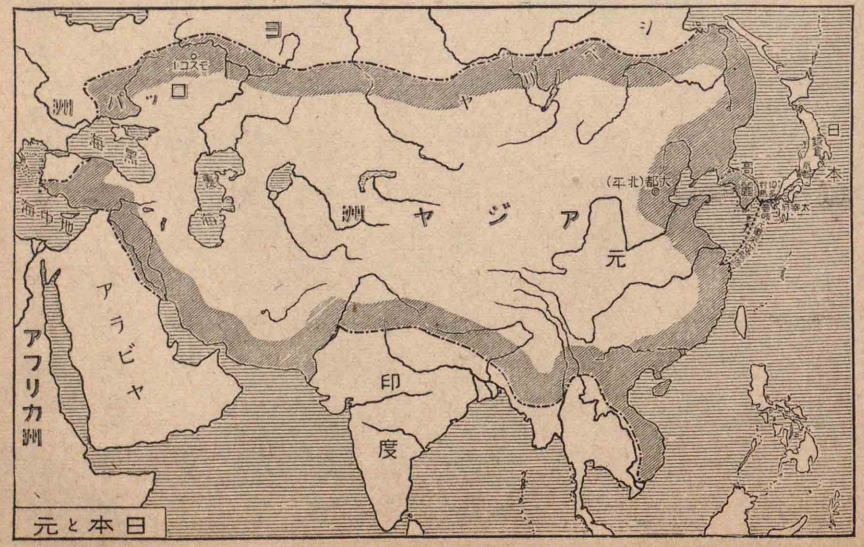
高麗史上

蒙古の使をしりぞけた

(高麗)

て、しだいに勢力を増し、アジアの西北地方を従へ、遠く西の方ヨーロッパに侵入した。さうして、その主忽必烈の代になると、南は宋をおさへて、都を今の北平にさだめ、東は朝鮮半島に迫つて高麗を屬國とした。高麗は、さきに新羅に代つて半島を統一した國である。

忽必烈は、高麗を征服した勢で、我が國をも従へようとはかり、第九代龜山天皇の文永五年に、高



麗王を通じて好を我に求めて来た。けれども、その國書には、我が天皇を、單に日本國王と申しあげ、忽必烈みづからは大蒙古國皇帝と稱へて、しきりに自分の威徳を述べたて、もし通好をこばめば、兵力を用ひようとの意をさへ示した。朝廷では、その文辭の無禮なるを憤つて、回答を與へられなかつた。翌年、彼の使者がまた来たが、執權時宗は、きつぱりこれをしりぞけ、一方西國の將士にいひつけて、嚴重に兵備を修めさせた。

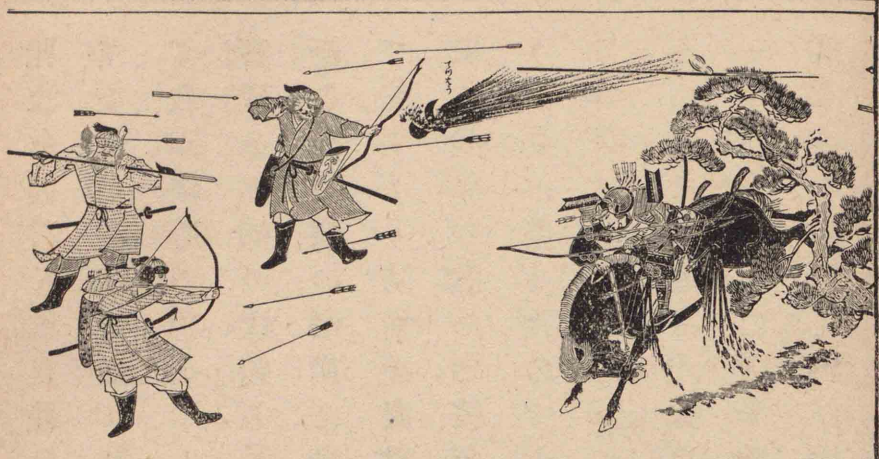


元寇をうち破つた

時に、蒙古は、國號を元と改め、更に使を以て我が服従をうながして来たが、いつも追ひかへされたので、大いに怒つて、第九十代後宇多天皇

高麗史上
高麗史上

(文永の役)



の文永十一年に、大舉して攻寄せて来た。元軍は、筑前を侵し、博多海岸に上陸すると、隊を組み、鼓をう永つて、巧みに進退かけひきをし、しかも盛に毒矢を飛ばし、鐵砲をも放つて、我が軍に迫つた。これまで、一騎打の戦にしかなれてゐなかつた。我が將士は、非常な苦戦におちいつたが、勇氣を振るつてやうやくこれを退けることが出来た。これから、我が軍は、團體教練の必要を感じるやうになつた。

時宗の決心

(九州探題)

元は、その後も、また使を送つて来たが、時宗はこれを斬つて、我が決心の程を示し、北條實政を九州の探題として、防壘を博多灣の海岸に築かせて、ますく、防備を嚴重にし、更に我から進んで、彼を伐たうとさへ企てたのであつた。この間に、元は、新に宋を滅し、その勢で、紀元一千九百四十年(弘安四年)に、數千艘の軍艦をさし向けて、再び押寄せ



我が將士が防壘に據つて防ぐ

高國史上

再び元寇をうち破つた(弘安の役)

大いに國威を揚げた

て来た。

この度は、さすがの敵軍も、我が防壘にさへへられて、上陸することが出来なかつた。我が勇士は、たびく、小船に乗つて、見上げるやうな敵の大艦を襲ひ、大いにこれをなやました。たまく、七月晦の夜中から、にはかに吹起つた神風に、さしもの敵艦も、秋の木の葉のやうに吹きみだされて、沈没するものが數知れず、我が軍はこの時ぞと攻寄せて、とうく、殘兵を滅してしまつた。なほこの後も、元は、しばく、再舉をはかつたが、我が威勢を恐れて果さず、遂に我が國をうかぶふことを斷念した。

當時、大陸の諸國は、たいいてい元に侵されたが、ひとり我が國はこれを免れたばかりか、かへつて大敵をうち破つて、大い

我が國が西
洋に紹介さ
れた

に國威を揚げる事が出来たのは、かしくも龜山上皇をはじめたてまつり、上下心を一にして、國を護つた爲である。その頃、元につかへてゐたイタリヤ人マルコ・ポーロが、我が國のことを傳へ聞き、歸國の後に、これを西洋に紹介したので、日本の名は、世界に知られるやうになつた。

第二十二 鎌倉時代の文化

鎌倉武士の
生活

頼朝が武士道を勵ましてから、北條氏もこれにならつて、勤儉尙武の風をすゝめた。そこで、武士は、一般に勇武で、笠懸・流鏑馬・犬追物・相撲などの勇ましい遊戯を喜び、朝臣の華やかなのちがつて、出来るだけ簡易な生活をした。家屋は、板塀または築地でかこひ、茅または板で屋根をふくといふやう

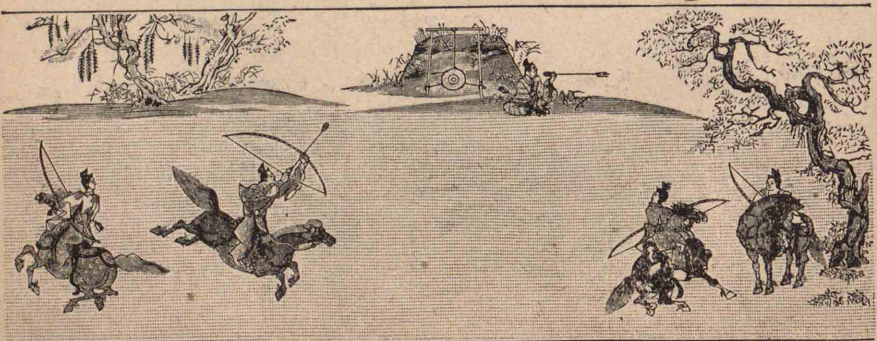
高國史上

高國史上

この時代の
學問

(金澤文庫)

に、すべて飾をさけて、實用を主とした。武家造となり、服装は、もと貴人が寢衣に用ひてゐた直垂を着、烏帽子をかぶるのを常とした。食物も極めて粗末であつたのは、時頼が或夜小皿に残つた味噌を肴に、親しい人と酒をくみかしたことも、知ることが出来る。かやうに、この時代には、専ら武を重んじて、書物に親しむものが少く、學問は一般に振るはなかつた。たゞ北條義時の孫實時が、武藏の金澤に文庫を設けて、和漢の書籍を集め、子弟をも教育し



笠懸

(假名交り文)

たのは、珍しいことである。けれども、さすがに尙武の時勢につれて、假名交り文で綴った平家物語や源平盛衰記などの軍記ものがあらはれて、廣く人々に愛讀せられたが、中でも、平家物語は、琵琶にあはせて歌はれて、永く世にもてはやされた。和歌は、京都で盛に行はれ、名高い歌人に藤原定家や西行法師などがあつた。定家は、後鳥羽上皇の仰を受けて、上古からのすぐれた和歌を撰して奉つた。これを新古今集といつて、この時代の歌風を代表する集である。また定家が、天智天皇からこの頃までの百人の作者について、秀歌一首づつをえらび、これを書いて、自分の別荘の壁に張つたと傳へられてゐるものは、世にいふ百人一首で、今に至るまで珍重せられてゐる。西行は、もと院につかへた武人であつたが、或日、

(百人一首)

高國史上

高國史上

同族の頓死にあつて、しみじみと世の無常を感じ、とうとう出家して四方に遊び、心のまゝに歌をよんで一生を終つた。かつて、相模を過ぎる時よんだ、

心なき身にもあはれは知られけり、

鳴立つ澤の秋の夕暮。

の一首は、新古今集にも收められて、世にすぐれた作として知られてゐる。

平易な新佛教が起つた

浄土宗

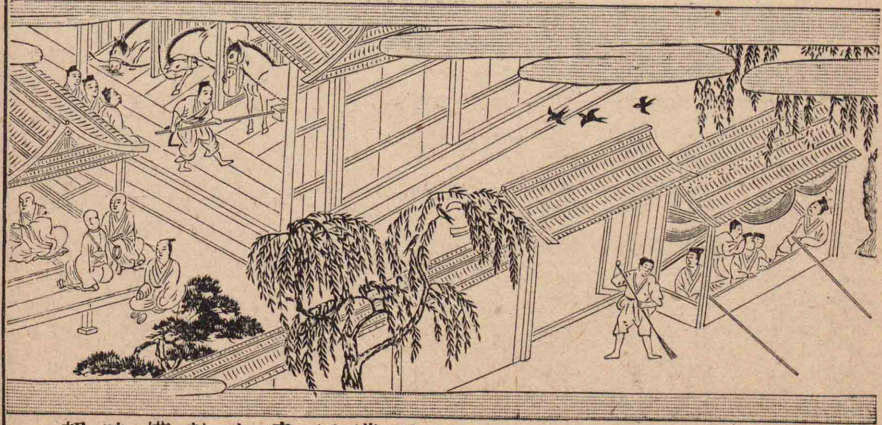
眞宗

時に、源平の争以來、戦亂がしばしば起つて、さだめない世の様となつたので、生前の幸福よりも、死後の安樂を祈る風がさかんとなり、これにつれて佛教は、前代とは、たいそう様子がかはつて來た。これより前、法然は、浄土宗をはじめたが、その弟子親鸞は、更に眞宗を開き、いづれも熱心に未來の信仰

法華宗

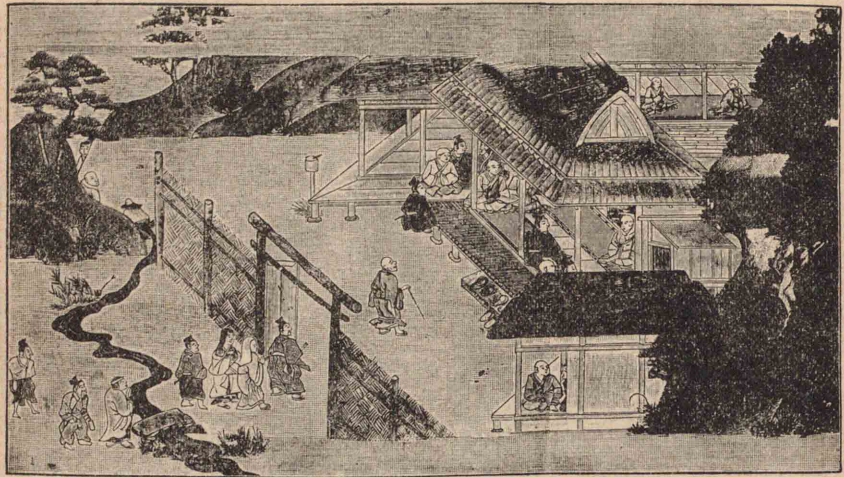
を説いて、専ら阿彌陀佛を念じさせた。ついで、日蓮は、法華宗を起し、大いに法華經の功德を述べて、その題目を唱へさせた。これらの宗旨は、いづれも平易で、當時の人情にかなひ、おもに民間に多くの信者を得た。これに對して、上流の間には、主として禪宗が行はれた。禪宗には、臨濟曹洞の二派があり、それ／＼榮西道元の師弟が、宋に渡つて傳へて來たもので、數多の名僧が、宋から來朝するやうになつて、ますます世にひろまつた。

禪宗



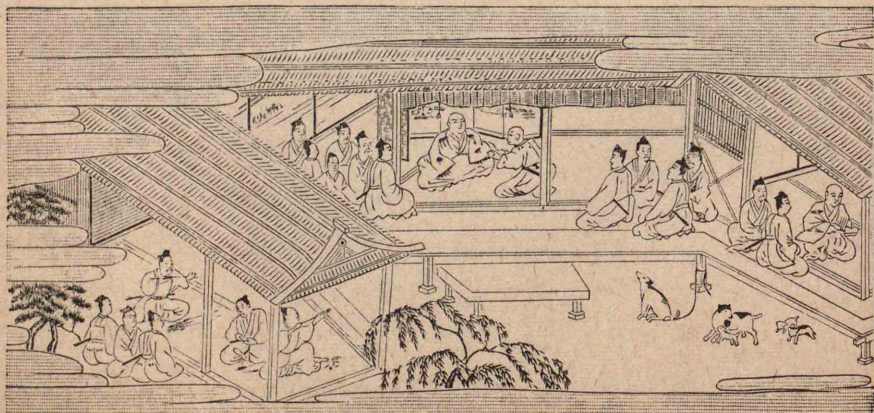
日蓮が書を執權時頼

高國史上



親鸞の説法

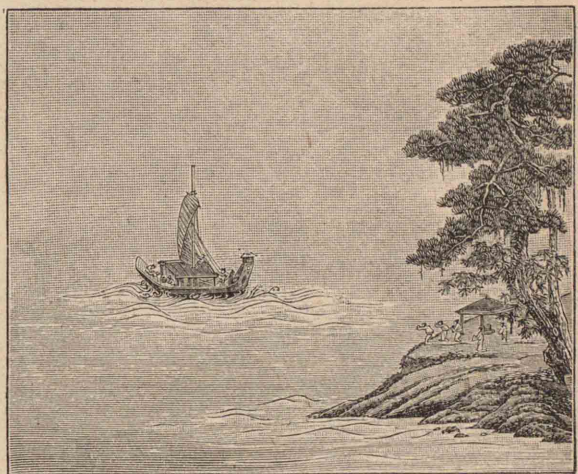
その教は特に武人の氣風に合つたので、これを信仰して坐禪をくみ、精神を練る武士



鎌倉武士の生活

美術工藝が
改る

(鎌倉五山)



榮西が宋を發す

が少くなかつた。榮西はまた、茶の種子を宋から持歸つて植ゑた。これから、茶がしだいに諸國に栽培せられるやうになつたといはれてゐる。

はじめ、名高い禪寺が五箇寺も建てられた。これを鎌倉の五山といつてゐる。彫刻には、運慶の作などがある。運慶は、定朝の子孫で、勇壯な佛像を刻んで名をとどろかしたが、中でも、東大寺南大門の仁王の像などは、當時の剛健な氣象をよくあらわしてゐる。

高國史上

らはした名作である。畫家には、肖像畫に巧な藤原信實といふやうな人が出た。また戦争をうつした繪卷物類が、勇ましいものを喜ぶ人心に迎へられて、盛んに世にあらはれた。



南大門の仁王

武器は、時代の要求に伴なつて大いに發達し、岡崎正宗のやうな名工があらはれて、精巧を極めた刀劔が製作され、日本の名は、宋にまでひびきわたつた。また加藤景正は、道元に

従つて宋におもむいて、陶器の製法を習ひ、歸國の後、尾張の瀬戸焼をはじめたので、これから製陶の術がたいそう進歩した。

第二十三 北條氏の滅亡

財政が困難となつた

北條氏は、元寇の爲に莫大な軍費を使ひ、その後も、ながく西海の防備をゆるめなかつたので、財政はしだいに困難となり、その上、戦功の恩賞も、將士の期待にそはなないことが多かつたので、その勢望は、おひ／＼に衰へていつた。

京都の實權が北條氏に移つた

かうした間にも、北條氏が京都をおさへようとする政策は、いよ／＼進んだ。さきに、後鳥羽上皇が、政權を朝廷に取りもどさうとしたまうて、承久の變が起ると、北條氏は、おそれ多

高國史上

(六波羅探題)

くも、三上皇を遠い島々にお遷し申し、また一族のものを六波羅探題に任じて、畿内西國を鎮めさせると共に、ひそかに朝廷に備へたてまつらせた。これから、京都の實權は、北條氏の手に移り、しまひには、皇位繼承の御事にまで干渉したてまつるやうになつた。

皇位繼承の御事に干渉したてまつた

朝廷では、第八十代後嵯峨天皇の御子、第九十代後深草天皇が、御兄弟で御位をお傳へになつた。後嵯峨上皇は、龜山天皇の御賢明を愛したまうて、その御子孫に、永く皇位を受けつがせようとの思召であらせられたが、北條氏は、後深草天皇の御子をお立て申しあげた。後にまた、北條氏のはからひで、後深草龜山兩天皇の御子孫が、かはる／＼御位にお即きになることとなり、數代をへて、龜山天皇の御孫、第六十代後醍

後醍醐天皇
が御みづか
り政をお執
りになつた

醍醐天皇の御代となつた。

天皇は、御英明にあらせられたので、御父後宇多上皇は、院政をおかへしになつた。白河上皇以來つゞいた院政は、その爲、いつたんやんだ。これから、天皇が御みづから御政をお執りになり、北畠親房らの人材を用ひて、大いに政治をお改めになつた。すなはち、諸國の關所を廢して、往來の便をはからせたり、富めるものの買占めた米穀を、價を定めて賣らせたりなさつたばかりでなく、もつたいなくも、日々の御膳部を御節約になつて、貧民を救はせられたりして、深く萬民を御あはれみ下さつた。時に、鎌倉では、執權北條高時が愚で、元寇後の財政を立てなほさうともせず、かへつて奢に耽り、田樂といふ歌舞を喜び、または鬪犬の遊を樂しみなどして、少しも

北條高時が
奢に耽つた

高國史上

天皇が政權
を御回復な
さうとし
たまうた

政治を顧みなかつた。爲に、天下の民心は、だん／＼幕府を離れて、武士のうちにも、反くものがあらはれるやうになつた。天皇は、ま／＼から、北條氏の無道をお憤りになり、後鳥羽上皇の御志をついで、政權を御回復なさらうと思し召してゐたが、今や幕府の人心を失つたのを機會に、鎌倉を伐たうと御決心なさつて、まづ皇子護良親王らに僧徒と結ばせ、ひそかに謀をお進めになつた。高時は、いちはやくこれを知ると、承久の例にならつて、天皇を遠國に遷したてまつらうとした。その時、二階堂貞藤が、武家が政權を執つてから、すでに百數十年になるが、今日まで武威があまねく海内にかゞやいたのは、まつたく、お上を敬ひたてまつり下に仁政を施した爲である。しかるに、今、主上を遠國に遷したてまつり、朝臣

隱岐にお遷
たされになつ

たちを罪しようとするのは、臣下の道でない。武家は、この上とも勅命に従ひたてまつつて、つゝしんで居るならば、君もきつと思召をおなほし下さることであらう。これこそ、國家太平、武運長久の途である。といつて、その不忠の企を諫めた。けれども、高時は、これを聞入れず、大兵を動かして京都へさし向けたので、天皇は、神器を奉じて笠置に御避難あらせられ、勤王の兵をお募りになつた。楠木正成は、さつそく河内から馳參じ、勅命を拜すると、急ぎ歸つて城を赤坂に築いた。まもなく笠置がおちいつて、天皇は、藤原藤房らに従へて、赤坂へお出でにならうとしたが、途中で賊の手に捕らはれて、遂に隱岐にお遷されになつた。この時、備前の兒島高德は、一族と共に天皇を迎へたてまつつて、義兵を擧げようとはかり、

高國史上

勤王の軍が
所々に起つ

六波羅が
ちいつた

御道筋にお待ち申しあげたが、不幸にも、その志を果すことが出来なかつた。

この間に、正成は、金剛山に移り、千早の天險にたてこもつて、謀をめぐらして、賊の大軍をなやまし、護良親王は、兵を吉野に擧げ、令旨を四方に下して、勤王の士をお募りになつた。これから、諸國の武士は、感奮して、義兵を擧げるものが多く、赤松則村は、播磨に、土居得能氏は、伊豫に、それゝ勤王の旗をひるがへして、勢が大いに振るつた。

天皇は、隱岐で、はるかにかにこの有様を聞き召され、六條忠顯を従へて、ひそかに伯耆にお渡りになり、その地の豪族名和長年を召して、行在所を船上山にお定めになつた。時に、肥後の菊池武時は、勅を奉じて博多の探題を襲ひ、はなゝしく戦

北條氏が亡んだ



名和長年が天皇をお迎へ申し

つて討死した。忠顯は、則村と共に山陰・山陽の兵を率ゐて、六波羅の探題を攻めた。たまく、高時の命によつて西上して來た足利尊氏は、にはかに勤王の軍に味方し、忠顯らと兵を合はせて六波羅をおとし、遂に京都を回復した。新田義貞も、護良親王の令旨を奉じて、義兵を上

高國史上

野に起し、軍を進めて鎌倉にうち入つた。高時はこれを防いだが、かなはず、遂に父祖の菩提所である東勝寺に退いて、一族將士八百餘人と共に、いさぎよく自殺した。その後、まもなく博多の探題も、九州の官軍に攻滅された。時に、紀元一千九百九十三年(元弘三年)で、鎌倉幕府はいよく亡



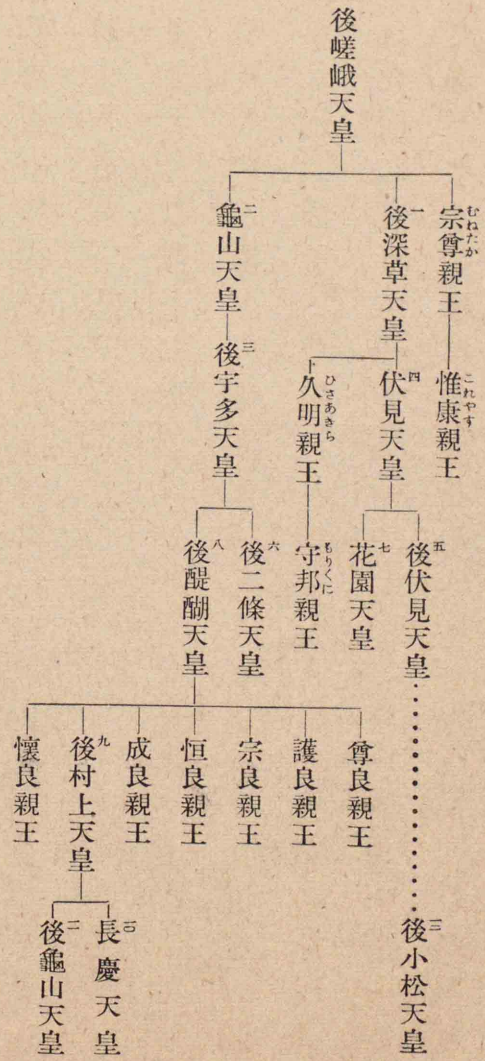
新田義貞が鎌倉に迫る

びてしまった。

後醍醐天皇
が還幸あら
せられた

第二十四 建武の中興

後醍醐天皇は、船上山で、京都の回復を聞き召されると、すぐこゝを御出発になり、京都へ向かはせられた。楠木正成は、兵



高國史上

中央の政治
を改新した
まうた

を率ゐて兵庫にお迎へ申しあげたが、折しも、鎌倉の勝報がとゞいたので、上下の喜はひとかたでなく、勇み勇んで京都に入り、天皇は、還幸の儀式を整へたまうて、正成以下多くの武士を従へられ、威儀おごそかに皇宮に還幸あらせられた。拜觀の人々は、大路に満ちあふれて、ひとしく御徳をたたてまつつた。

天皇は、まづ關白を廢し、御みづから記録所にお出ましになつて、政治をお聽きになり、舊規にかゝはらず、新例をお開きになることが少くなかつた。また當時は、兵亂の後をうけて、土地などに關する訴が多かつたので、新に雜訴決斷所を設け、公卿らをもその職員に任じて、これをさばかせられた。なほ護良親王を征夷大將軍として、兵馬の權を統べさせ、武者所

地方の政治
をお整へに
なつた

建武の中興

天下が再び
亂れようとし

を置いて、武士を監督させたまうた。
 天皇は、また、尊氏・義貞・正成長年らの功臣を諸國の國司に任
 じて、それ／＼領地を賜はつた。殊に、東國は重要な地である
 から、北畠親房の子顯家を陸奥守とし、皇子義良親王を奉じ
 て奥羽を鎮めさせ、尊氏の弟直義を相模守に任じて、皇子成
 良親王を奉じて、鎌倉に居て關東諸國を治めさせたまうた。
 これから、中央及び地方の制度は共に備つて、政權は再び朝
 廷にかへつたが、この時、年號を建武と改められたので、世に
 これを建武の中興といつてゐる。
 天皇は、かくまで御熱心に、中興の政治に勵ませられたが、政
 務にあづかる朝臣は、久しく政治に遠ざかつてゐたので、容
 易にこれを決することが出来なかつた。それで、戦後の訴は

高國史上

日ましに積り、賞罰もまた不公平なことが多かつたので、不
 平の聲がやうやく起つてきた。これから、武人のうちでも、大
 義にくらいものは、中興の政治を喜ばず、かへつて武家政治
 の昔を慕ふやうになつたのに、一方、朝臣は、さほどの功勞の
 ないものでも、朝恩にはこつて、にはかに奢を極め、武人を輕
 んじたので、公武が互にくみあつて、天下は、再び亂れよう
 とする形勢となつた。

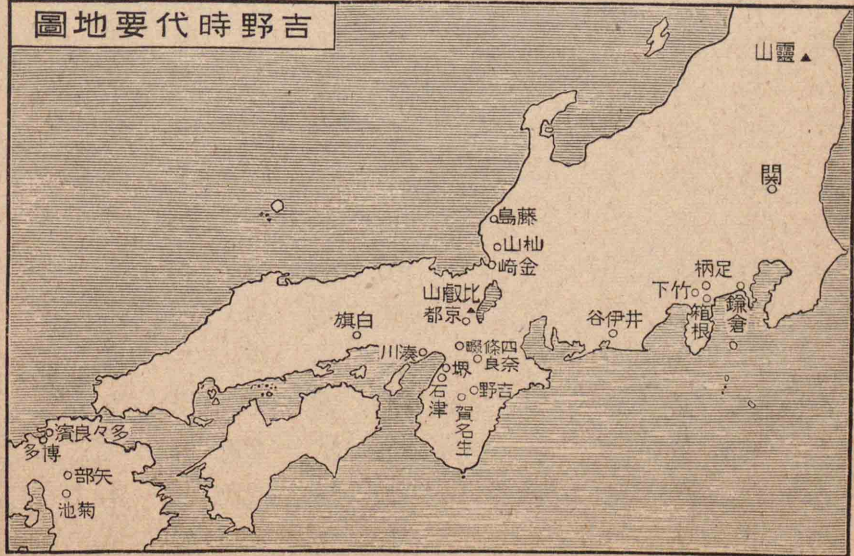
第二十五 吉野の朝廷

足利尊氏は、新田義貞と同じく、源義家の子義國の子孫であ
 る。まへ／＼から、家臣の家筋である北條氏の下に立つこと
 を快く思はず、源氏の幕府を再興しようといふ志があつた。

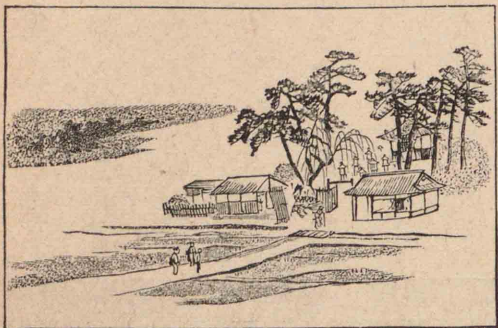
尊氏が反い

そこで、ひそかに、新政を喜ばない武士の心を取入れて、まづ威望の高い護良親王と、大功ある義貞とをしりぞけて、その野心を遂げようとした。護良親王は、早くも尊氏の野心を見ぬかれ、尊氏を除かうとおはかりになつたが、かへつてその讒言にあつて、鎌倉に幽せられたまうた。たまたま、北條高時の子時行が兵を起して、鎌倉を攻めると、直義

吉野時代要地圖



高國史上



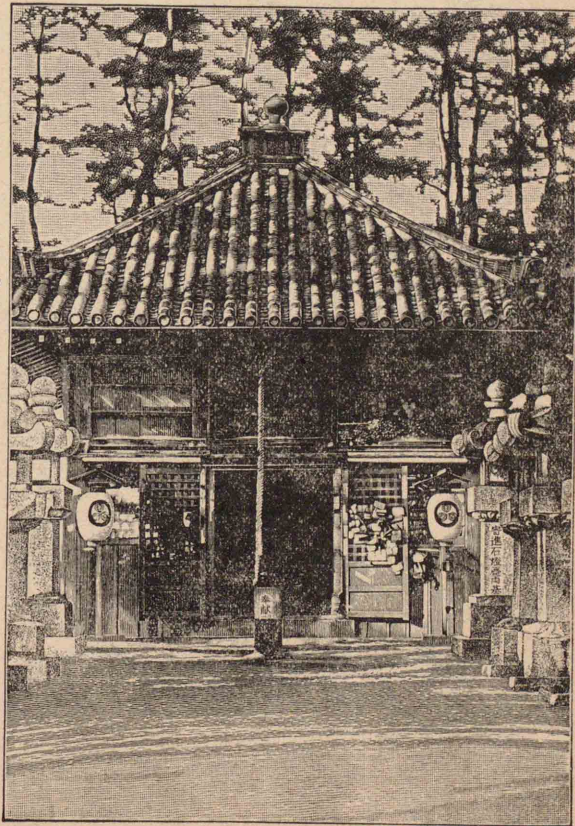
楠木正成の廟

は、これを防ぎかねて、おそれ多くも、親王を害したてまつつて西に走つた。尊氏は、みづから時行を伐たうと願ひして、まだ勅許がないうちに、勝手に東國に下り、時行をうち破つた上、鎌倉に據つてとう／＼反旗をひるがへし、義貞を伐つ名義で、兵を募つた。そこで、天皇は、義貞に仰せつけてこれを伐たせたまうたが、その軍は敗れて引きかへしたので、尊氏兄弟は、あとを追つて、京都に攻めのぼつて來た。けれども、北畠顯家が、まもなく奥州からのぼつて來て、義貞・正成らと力を合はせて、大いに尊氏らを破つたので、尊氏は、やむなく九州に走つた。

正成忠顯長
年らの戦死

後醍醐天皇
が吉野にお

尊氏は西國で勢を盛返し、直義と共に大軍を率ゐて東上したので、義貞は正成とこれを兵庫に迎へうつて奮戦したが、とう／＼敗れ、正成は湊川で忠死し、義貞もまた京都に退いた。これから、天皇は比叡山に行幸になり、尊氏兄弟は再び京都に侵入した。忠顯長年らはこれと戦つて討死した。それから、尊氏は、賊名を避ける爲、後深草天皇の御曾孫豊仁



(二) 廟の成正木楠

遷りになつ

義貞の戦死

親王を立てて天皇と申しあげたが、ついで、いつはり降つて、後醍醐天皇の還幸をお願い申しあげた。天皇は、かりにこれを許して、京都に還幸あらせられた。ところが、尊氏はおそれ多くも、すぐさま花山院に幽したてまつた。天皇は、やがて、神器を奉じて、ひそかに吉野に行幸になり、行宮をこゝに定めたまうて、天下の勤王の士をお勵ましになつた。時は、紀元一千九百九十六年(延元元年)の末である。

義貞は、さきに叡山の行宮で勅を受け、皇太子恒良親王と皇子尊良親王とを奉じて、北國におもむき、越前の金崎城にたてこもつた。ところが、賊軍に攻められて城がおちいり、尊良親王は御自害になり、皇太子は捕らはれて、後に、害せられたまうた。義貞は、なほ少しも屈せず、ますます勤王の兵を集め

顯家の戦死

て、勢を北陸に振るつたが、とう／＼力盡きて藤島で戦死した。

この頃、顯家もまた、義良親王を奉じて西上し、京都の回復をはかつて賊軍と戦ひ、和泉の石津で討死した。そこで、親房は、東國の官軍を統べようとして、義良親王を奉じて、海路、陸奥に向かつたが、暴風にあつて船がちり／＼になり、親房は常陸に着き、親王は吉野へお歸りになつた。

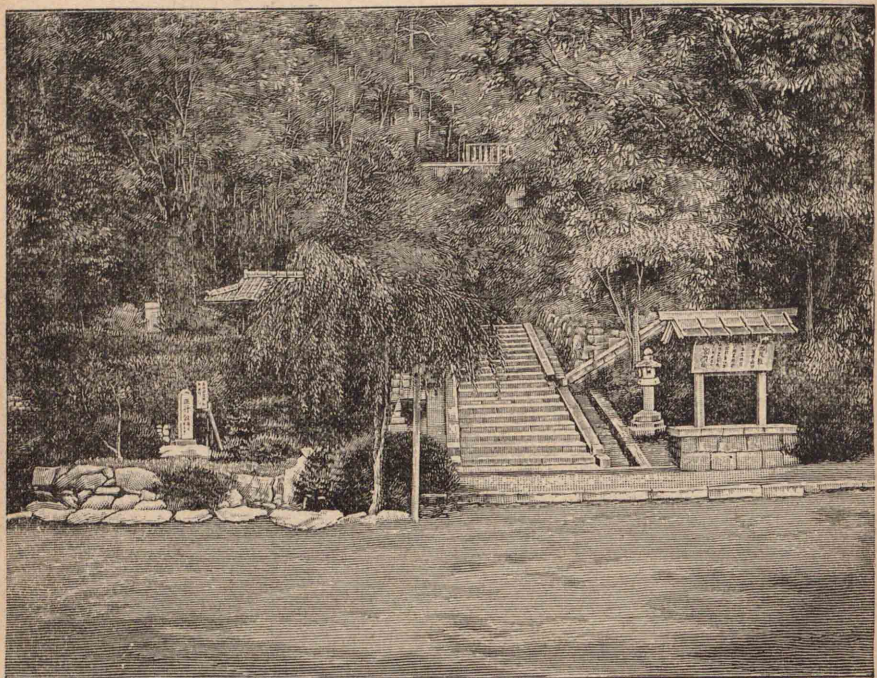
天皇の崩御

たま／＼、天皇は御病にかゝらせられた。天皇は、天下の事がとかく御心のまゝにならなかつたうちにも、一日として萬民の上をお忘れにならず、

世治り民安かれと祈るこそ、

わが身につきぬ思なりけれ。

高國史上
高國史上



後醍醐天皇の御陵

とおよみになつた。けれども、朝敵がまだはびこつて、せつかくの御志も空しくなつたことを深くおうらみになつた。さうして、御病がいよ／＼重らせられると、ねんごろに興復の事を御遺詔あらせられ、朕の身は、たとひ吉野山の苔に埋もつても、朕の魂は、常

宗良親王の御轉戦

に京都の天を望むであらう。もし朕の命にそむいて、義を輕んずるやうなことがあれば、君も繼體の君でなく、臣も忠烈の臣ではないぞ。」と仰せられて、とう／＼行宮で崩御あらせられた。そこで、義良親王が御位にお即きになつた。第九十七代後村上天皇と申しあげる。

時に、征東將軍宗良親王は、遠江を根據として、所々に轉戦して回復をはからせられ、

君のため世のためなにか惜しからん、

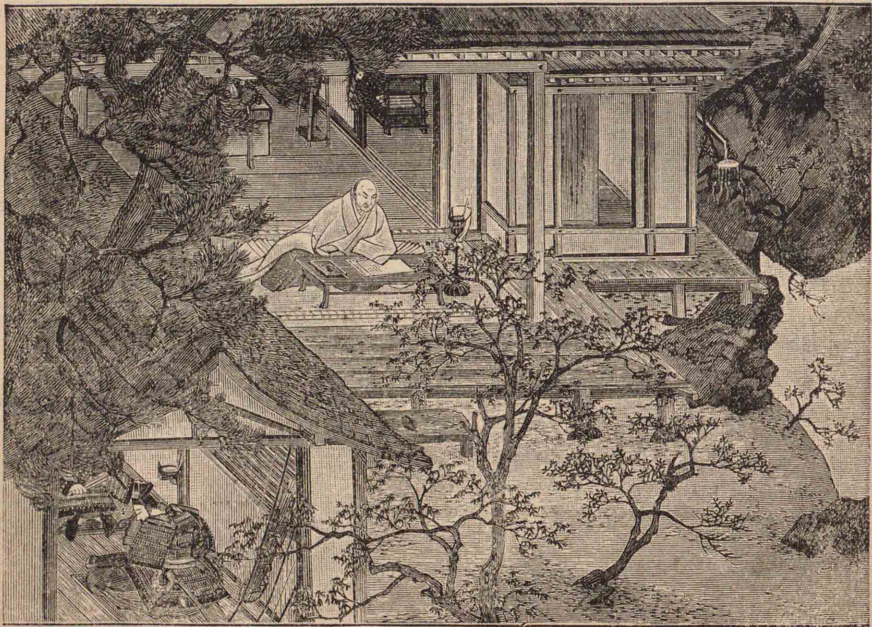
捨ててかひある命なりせば。

との御歌を作つて、士氣をお勵ましになつた。また親房は、常陸で、四方から賊兵に圍まれたが、いつかうくつたくした色もなく、陣中のひま／＼に、筆をとつて神皇正統記をあらは

親房の東國經營

(神皇正統記)

し、神代から後村上天皇に至るまで、御歴代の大要をしるし、皇祖の建國の精神を説いて、吉野の朝廷の正統であることが、東國の經營が思ふやうに運ばなかつたので、吉野に歸り、楠木正行らと力を合はせて、天皇をお助け申しあげた。これから、官軍の勢が、また振



北島親房が神皇正統記をあらはす

正行の戦死

るつたので、賊將高師直は、大軍を率ゐて攻寄せて來た。正行は、死を決して吉野を出發し、河内の四條畷に防いで大いに奮戦したが、力盡きて遂に戦死し、天皇は難をお避けになつて、賀名生にお遷りになつた。ついで、朝廷の柱石と頼まれてゐた親房も、病んで薨じた。

懷良親王の御奮戦

かやうに、官軍では、不幸がつゞいて、勢が非常に衰へたが、なほ九州では、菊池武時の子武光が、征西將軍懷良親王を奉じて、賊將少貳氏を筑後川に破り、子孫もまたよく忠節を守つて屈しなかつた。しかるに、その家も遂には衰へ、第九十代後龜山天皇の御代になつて、諸國の官軍はいよゝゝ振るはなくなつた。足利義滿は、大内義弘を遣はして、天皇の還幸をお願ひ申しあげたところ、天皇は、この上なほ戦亂がつゞいては、萬

後龜山天皇が還幸あらせられた

高國史上

民の苦しみはますます加ることをおあはれみになり、これを許したまうて、紀元二千五十二年(元中九年)に、京都に還幸あらせられ、神器を代第百後小松天皇にお傳へになつた。後醍醐天皇が、吉野に行幸せられてから、凡そ六十年、長い間つゞいた兵亂は、これで、やつと鎮まることとなつた。

第二十六 室町幕府の盛時

はじめ、尊氏は、朝廷に反いて官軍と戦つたので、部下の諸將に多くの領地を與へて、人望を得ることにつとめた。それ故、將士の中には、恩になれ、功にほこつて、とかくその命令に従はないものがあつた。その上、直義は、尊氏、義詮父子と仲が悪く、互に争つた爲、部將もまた、それゝゝ二派に分かれて、内輪

足利氏は内輪の争が絶えなかつた

義満が強族をおさへた

の争が絶えず、足利氏の威權は、しぜん輕んぜられた。しかるに、義詮の子義満が家をつぐと、細川頼之は、心をくだいてこれを助け、やうやく主家の威勢を高めることが出來た。この頃、強大な部將に、山名氏清があつた。その一門の領地は、畿内・中國にわたつて十一箇國に達し、實に全國の六分の一に當つたので、世に氏清を六分一殿といつた。氏清は勢にまかせて、わがまゝな振舞が多かつたので、義満は、頼之と共にこれをうち滅した。また周防の大内義弘は、かつて、後龜山天皇の還幸をおとりなし申した功と、その家の富強とを頼んで獨立をはかり、義満から夫役を割りあてられた時も、わが士卒は、弓矢を業とするものであるから、土木に使役することは出來ない。といつて、ひとりこれに應じなかつた。それか

高國史上

幕府の制度を整へた

ら、とう／＼反いて兵を擧げたので、義満は怒つてまたこれをうち平げた。そこで、諸將は、皆恐れて、足利氏の命令に服従するやうになつた。義満は、華美な花の御所を京都の室町に普請して、こゝに住み、後龜山天皇の還幸あらせられた後は、征夷大將軍として威勢を振るひ、大いに室町幕府の制度を整へた。その組織は、だいたい鎌倉幕府に似てゐるが、やゝ異なつたところもある。すなはち、諸政を統べるものを管領といつて、足利氏の一族斯波・細川・畠山の三氏の中から任ぜられた。この三氏を三管領と稱して、最も權威がある。その下に、政所・問注所・侍所がある。侍所の長官を所司といつて、山名・一色・赤松・京極の四氏の中から任ぜられた。この四氏を四職といつて、三管領につ

義満が奢に耽つた

いで勢力をもつものである。

(金閣)

名分が亂れた

(公方)

かうして、義満は、幕府の基を固めたけれども、勢が盛になるにつれて、だん／＼奢に耽るやうになつた。義満は、職を子義持に譲つた後、朝廷にお願ひして、太政大臣の高官にのぼつたが、やがて辭職して出家し、別莊を北山に構へて、林泉の美を極め、その内に三層の金閣を建てて、風流をつくし、こゝに移つて、みづから大小の政務を決した。義満は、心いよく驕り、遂には出入の行列を上皇になぞらへ、北山の別莊には、皇居にまねて紫宸殿、公卿の間などを設け、世に公方と呼ばれた。公方とは、もと朝廷を指したてまつることばであるのに、今これを將軍の尊稱に用ひるやうになつて、名分が大いに亂れたのは、歎かばしいことである。

高國史上

明と好を修めた

外交上の失體

義満はまた、使を支那にやつて、再び國交を開いた。支那との通商は、元寇の後もなほ絶えることなく、我が商船は、ひそかに彼の地に往來してゐたが、元が亡びて明が起ると、義満は、これと好を修めて、貿易の利益をはかつたのである。それ故、明との通商によつて、莫大な利益を収めることが出來たが、義満は、その利益を求め、専らなあまり、明主から日本國王の號を受けて、みづから臣と稱へるなど、はなはだしい失體を重ねた。ところが、義持は、これを恥ちて、きつぱり交通をこばみ、明が勢を頼んで、兵力を用ひようとおびやかして來たのに對しては、元寇の例を引いてこれに答へ、少しも恐れぬ態度を示した。

第二十七 關東管領

關東管領家の起

室町幕府は、地方を治めるのに、鎌倉時代の制度にならつて、諸國にそれ／＼守護地頭を置いた。中でも、東國は、長い間源氏が勢力をしいたところで、鎌倉は、頼朝以來幕府を設けた要地であつたから、尊氏も、はじめは鎌倉を根據として、四方に號令しようと思つてゐた。けれども、當時、自分が京都を離れることの出来ない形勢であつたから、義詮の弟基氏を關東管領とし、その執事上杉氏と共に鎌倉に居らせて、その子孫に、相ついで東國の政務を統べさせることとした。これが關東管領家の起である。

管領家が獨立を始めた

關東管領家は、はじめはよく東國を治めて、京都の本家を助けたが、威望が加るにつれて、だん／＼幕府を輕んじはじめ

高國史上

(鎌倉公方)

持氏が幕府に反對した

た。さうして、はては將軍にならつて管領を公方と稱へ、執事を管領と呼んで、獨立をはかり、かへつて幕府の妨となるやうになつた。基氏の孫滿兼は、とかく義滿の命令に従はず、大内義弘と通じて、兵を擧げようと企てたこともあつた。そのうち、將軍義持は、職を子の義量に譲つたが、義量は早く薨じて子がなかつたので、滿兼の子持氏は、みづから幕府に入つて將軍職に就かうと望んだ。しかるに、義持の弟の僧が還俗して將軍となり、義教といつたから、持氏は、たいそう不平で、「われは、還俗將軍などにつかへようとは思はぬぞ。」といつて、事毎に幕府に反對した。執事の上杉憲實は、これを心配して、しば／＼諫めたが、聽かれぬのみか、かへつて殺されようとしたので、いたしかたなく職を辭して、上野の自分の領

(足利學校)

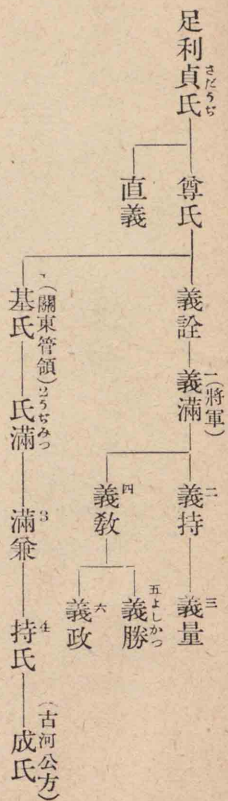
地に退いた。憲實は、武人でありながらよく學問を好み、國に歸つてゐる間に、數多の書籍を下野の足利學校に寄附して、その教育を興した。この學校は、戰國の時代に至るまで、わが國唯一の學問所であつたのである。

管領家が亡んだ

持氏は、憲實を滅さうとして、みづから兵を率ゐて上野に向かつた。憲實は、これを幕府に訴へると、義教は、朝廷に申しあげて、持氏追討の勅を受け、兵をさし向けて、憲實と共にこれを伐たせた。持氏は、進退きはまつて和睦を求めたので、憲實はその助命を將軍に願ひ出たが、許されず、持氏は、いたしかたなく自殺した。時に、二代後花園天皇の永享十一年で、世にこれを永享の亂といつてゐる。基氏以來凡そ九十年で、關東管領家はこゝに亡びた。

(永享の亂)

高國史上



第二十八 室町幕府の衰微

幕府の威勢がくじけた

室町幕府は、義満の時に全盛を極めたが、まもなく衰へはじめた。義教は、生まれつき剛毅で、幕府の威勢を張らうとつとめ、さきには、關東管領家を滅し、またしきりにわがまゝな豪族をおさへようとしたので、これを怨むものが少なくなかつた。赤松則村の曾孫滿祐は、領地を削られるのではないかと心配して、將軍を自分の邸に招いてもてなし、隙をうかづつてこれを害して、本國播磨に逃げかへつた。管領細川持之は、

山名宗全（さななむねぜん）らをさし向けて満祐をうち滅させ、その領地を宗全らに分ち與へたので、氏清以來衰へてゐた山名氏は、再び興つた。この事變によつて、幕府の威勢は忽ちくじけ、これからは、幼主が相ついて立ち、強臣が權力を頼んで、わがまゝをするやうになつた。

財政が苦し
く政治が亂
れた

（能樂）

かうした際に、義政（よしまさ）は、僅かに九歳で家をつぎ、十五歳で將軍に任ぜられた。義政は、榮華のうち（うち）に育つて、常に奢を極め、盛に室町の邸を普請したり、夫人富子（とみこ）と共に、しばしば能樂（のうがく）や花見の宴などを催したりして、少しも政治を顧みなかつた。そこで、幕府の財政がしだいに苦しくなつたから、しきりに遣明使（けんみんし）を出して、錢を求め、或は倉役（くらやく）といつて、質屋（しちや）に課する税をたびたび取りたてた。また古くから徳政の令（れい）といふこ

（徳政の令）

高國史上
高國史上



能樂

とがあり、これが一度發令（はつれい）されると、貸借（かじ）はすべて取消される定であつたが、幕府は、自分の借財（しやくざい）を取消す爲に、みだりにこの令を出したりなどして、實に

暴政の限りをつくした。諸國の大名（だいまやら）も、これにならつて、種々の名目を設けて重税（おもなうぜい）を課したので、萬民はいよゝゝ疲弊（ひへい）して、田畑は荒果て、盜賊は所々に起つて、海内が騒がしくなつた。

天下の勢が
兩分された

義政は、壯年になつても子がなかつたので、弟義視を養子と定め、細川持之の子勝元を、その後見人としたが、後に、實子の義尙よしひさが生まれると、母の富子は、わが子を立てたさに、ひそかにこれを山名宗全に託たくした。これから、細川・山名の兩氏が互に權力を争ひ、めい／＼他の諸將を味方に引入れたので、天下の勢は、しぜん兩分される有様となつた。

應仁の大亂

そこで、紀元二千百二十七年、第百三代後土御門天皇の應仁元年から、勝元・宗全の味方は、それ／＼全國から京都に馳集り、雲霞のやうな大軍が、京都の内外で相戦ふこと十一年の久しきに及んだ。これを應仁の亂といふのである。この亂は、社會の面目を一變させたもので、京都はおほかた兵火にかゝつて、花の都も一面の焼野やけのとかはり、また幕府の威信はまつた

高國史上

くなくなつて、諸大名を統べることが出来なくなり、おひおひに亂世に移つていつた。

第二十九 室町時代の文化

東山時代

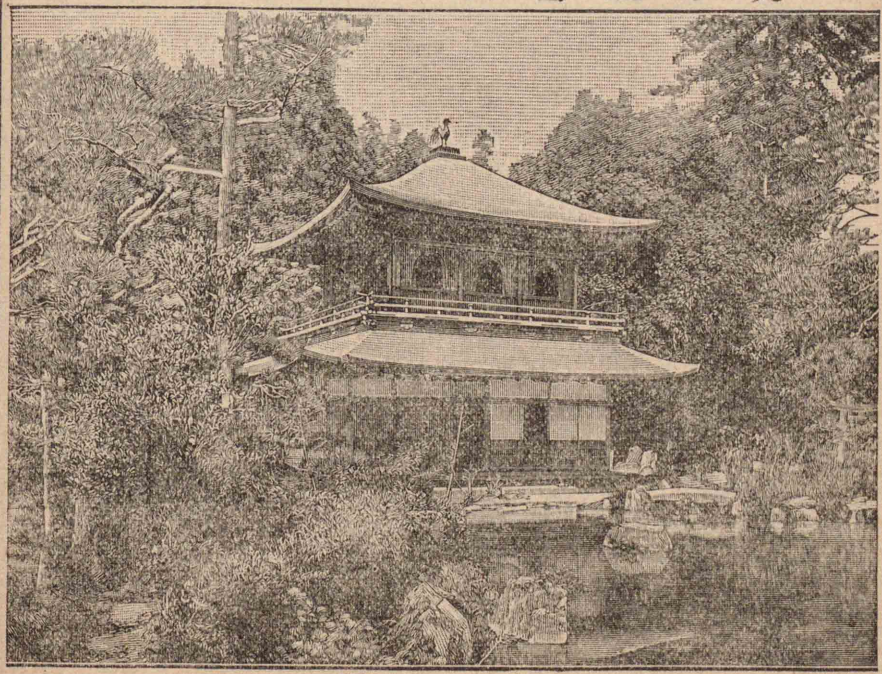
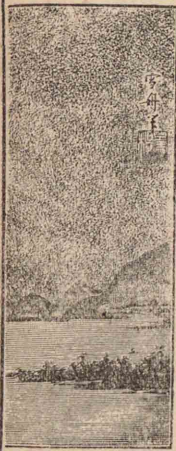
(銀閣)

將軍義政は、應仁の亂の最中に職を義尙に譲り、ついで東山に別莊を普請し、金閣にならつて銀閣を建てたが、その造りかたは風雅で、庭園の一木一石に至るまで、配置の妙を極めた。義政は、こゝに閑居かんきよして、常に風流の遊に耽つた。そこで、この影響を受けて、文學・技藝が大いに發達したので、世にこの時代を東山時代ひがしやまじだいといふのである。

義政は、東山の別莊の中に、四疊半の茶室を設けて、たび／＼茶の湯を催し、盛に茶器・書畫・骨董の類をもてあそんだので、

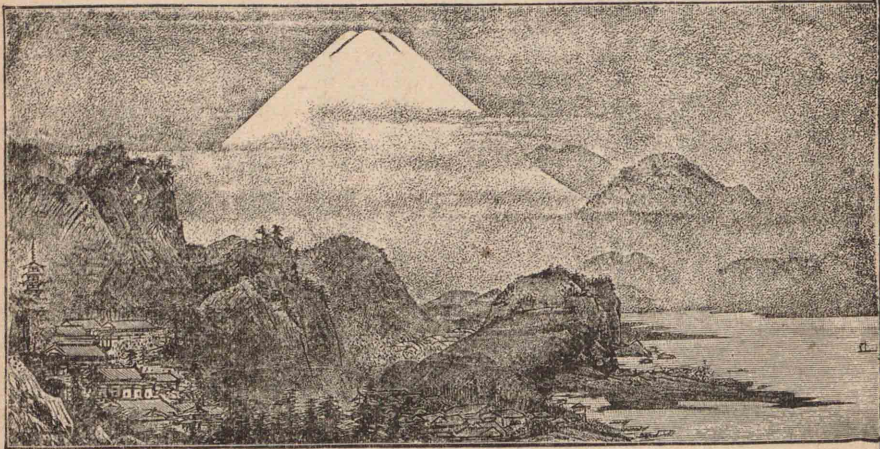
美術工藝が
興つた
(茶の湯)

その風は、一般に武人の間に流行した。それ故、美術・工藝は、亂れた世にもかゝはらず、かへつて進歩し、繪畫には、有名な雪舟や狩野元信などが出た。雪舟は、備中の生まれで、早くから天才の譽が高かつた。幼い時寺に入つて僧となつたが、畫に



銀 閣

高國史上
高國史上



熱心で、日夜畫筆をはなさなかつた。壯年になると、京に上つて畫法を學び、更に支那に遊んで、その地の山水を寫生し、大いに技を練つて歸朝します。妙筆を振るつたが、殊に山水の墨繪を得意とした。元信も、生まれながらに畫を好み、僅かに十歳で、すでに畫工として、將軍に近侍した程の天才である。元信は、早く父から支那の畫風を習つた上に、大和繪の大家土佐光信の婿となつて、その畫法をも

學び、和漢の長所を取つて、一派の畫風を開いた。これが狩野派の元祖であつて、子孫に多くの名人を出した。繪畫と伴なつて、漆塗の術も發達し、畫家の下繪によつて、精巧な蒔繪を施すやうになつた。陶器の製法もまた、茶の湯などの流行につれて、いよゝゝ進み、遂には唐津焼の名産を出すまでになつた。

佛教

佛教は、鎌倉時代の後をうけて、禪宗が上流社會に盛に行は



狩野元信の畫

高國史上

禪宗

(安國寺)

れ、取分け、足利氏は、深くこれを信仰した。尊氏、直義兄弟は、後醍醐天皇の御靈を慰め、たてまつると共に、なくなつた勤王の人々をも弔ふ爲に、京都に天龍寺を建て、なほ諸國に安國寺を設けさせた。ついで、義満も、京都に相國寺を開いた。天龍寺などと共に、名高い禪寺が五箇寺にも及んだ。これを京都の五山といつた。義満は、その順位を定め、龜山上皇のお建てになつた南禪寺を、更にその上位にすゑた。民間には、眞宗法華宗が廣く行はれたが、中でも、眞宗は、應仁の頃蓮如が出てから、非常に盛になつた。蓮如の幼い時は、本願寺の最も衰へた折で、或時は、三日も絶食し、或時は、月の光で書を読んだことさへあつた。くらゐで、その辛苦はひととほりでなかつた。それ故、成人して後も、どんなつらい目にあつても、少し

(京都五山)

眞宗

(本願寺)

もくつたくしなかつた。その上、生まれつき才辯がすぐれてゐたので、諸國を廻つて布教につとめ、極めて平易な説教で、大いに男女の信仰を得た。これから、本願寺の勢力は、にはかに興つた。

學問が僧侶の力で維持された

(寺子屋)

當時、五山の僧は、禪學にくはしいばかりでなく、儒學にも通じ、或は幕府の顧問となり、或は支那に使用して、外交にあづかつた。また詩文が上手で、長い間衰へてゐた漢文學を再興し、遂には教育の業にたづさはつたので、これから寺子屋も起りはじめた。この後、戦國の代となつても、なほよく學問が維持せられたのは、おもに僧侶の力によつたのである。

新しい文藝が起つた

(連歌)

文藝も僧侶によつて起されたものが多かつた。この頃、盛行はれた和歌の一體に連歌がある。或人が、上の句または下

高國史上

(謡曲)

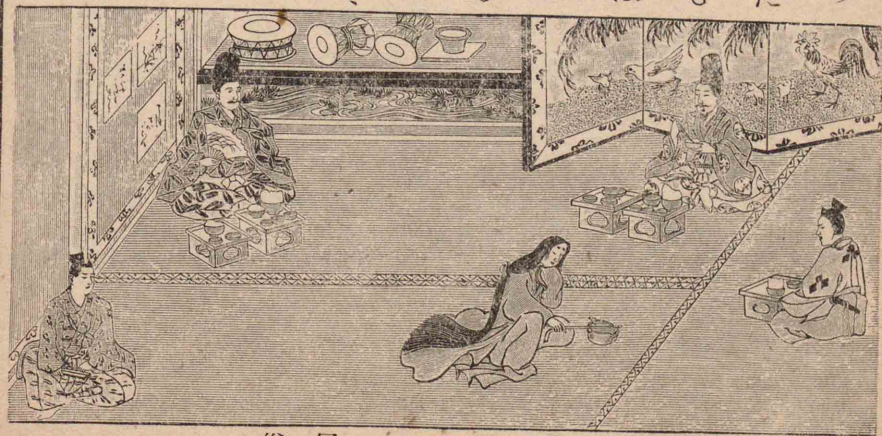
(太平記)

風俗がかはつた

の句をよむと、他の人が、殘の句を連ねて、はじめて一首の和歌の如くする法で、宗祇法師は最もこの道に達してゐた。宗祇は、若い時から出家し、あまねく四方に遊んで、吟詠を樂しみ、遂に旅行中病にかゝつたが、なくなるまで、なほ友人と連歌をよみかはしたといふことである。また義満、義政は、共に能樂を好んだので、これに用ひる謡曲もしきりに作られたが、その文は、僧侶の筆に成つたものが少くない。なほ小島法師のあらはした太平記は、おもに吉野時代の事をしるした軍記で、後に、大いに世人に愛讀せられるやうになつた。

この時代には、幕府が京都にあつた爲、鎌倉時代の剛健な氣風は、だん／＼なくなると共に、一方、禪宗などの影響を受け、いつたいに淡泊で、しかも氣品のあるのを好む傾となり、

したがって風俗もしぜんとかはつて来た。もと僧侶の學問所であつた書院の造りかたは、一般の家屋にも行はれ、入口に玄關げんくわんを設け、室内には畳たたみを敷きつめ、座敷ざしきに床の間とこまを作つて畫幅くわふくをかけ、それに香爐かうろや插花いけばななどを飾つて、風流ふうりゆうの趣おもむきをそへた。また武士の衣服は、素襖すあわ、長袴ながばかまから、後には、肩衣かたぎぬ、半袴はんばかまなどにうつつてゆき、女子は小袖こそでをうちかけとして着る風が流行し、食物の料理法れうりはふもますます進んで、種々の式を備へるやうになつ



室町時代の風俗

た。今の禮式作法れいしきさくさは、多くこの頃から起つたのである。

第三十 京都の疲弊

將軍義尙は、聰明で、學問を好み、當時博學の聞えが高い一條兼良いっせんりょうについて、國を治める道を聽き、文武の兩道に達してゐた。應仁の亂の後、わがまゝな大名をおさへて、幕府の威權を取返さうとはかり、まづ近江の佐々木氏ささきしを攻めたが、不幸にして病にかゝり、空しく陣中で薨じた。これから、幕府は、ますます衰へて、その威令が僅かに近畿きんきの一部に届くだけとなり、また富商から金を借りて、やつと財政の不足を補ふ有様となつた。それ故、歴代の將軍は、たゞ名ばかりで、臣下の爲に勝手に廢立せられ、その實權は、管領細川氏の手から、更に家

義尙が威權を取返さうとした

權力がおひつた

臣の三好氏、またその家臣の松永氏とおひく下に移つてゆき、遂に將軍義輝は、松永久秀らに害せられた。そこで、その弟の義昭は、難を避けて地方に走り、織田信長にたよることとなつた。

京都が衰微した

かやうに、幕府は、衰へ果てて、皇室の御費用を奉ることも出来なかつた。御所の築地が破れても、つくるはれず、市街も應仁の亂に兵火にかゝつたまゝであつたから、遠く三條の橋から、賢所の御あかしを望むことが出来たといふことである。それ故、朝廷の御儀式が行はれないばかりでなく、おそれ多くも、天皇の毎日の御用にさへ事かきたまふことがあつた。公卿は、京都に住むこともかなはず、めいゝ縁故を求めて地方に下るものが多く、市民も諸方に離散して、京都は、ひ

高國史上

御歴代が萬民をおおはたれみになつた

どいさびれかたであつた。

かうした際にも、御歴代の天皇は、かしこくも、御身の御不自由を、少しもおいとひなく、専ら萬民をおおはれみになつた。後土御門天皇は、應仁の亂を避けて、十年餘りも御所にあらせられなかつたが、この間にも、たびゝ世の安穩を社寺に祈らせられた。ついで、第百代後柏原天皇は、三條西實隆らの奔走で、やうやく御費用をとゝのへ、御踐祚の後二十年餘りもたつて、はじめて御即位の禮を行はせられたくらゐであつたから、まして、萬民はいかに難儀をしてゐることかと、お案じになつて、

治めしるわが代如何にと、波風の

八十島かけて行く心かな。

國民が心を皇室に寄せたてまつつところ
國體の尊いところ

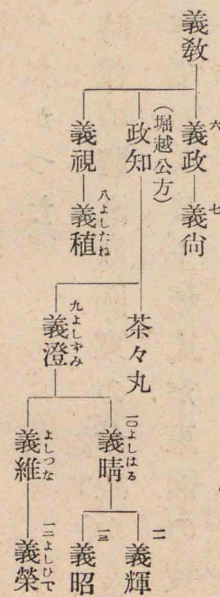
とおよみになつた。第五代後奈良天皇も、御身の御困難をおしのびになりながら、御みづから經文を寫し、これを諸國に下して、天災をはらひ、民の苦しみを除くことを祈らせた。また伊勢神宮の社殿が荒果てたのを、お歎きになり、たびたび御修繕なさらうとせられた。この時に、慶光院清順といふ尼が、勅許をいたゞいて、廣く全國に費用を募り、遂に神宮の御造營を果したが、織田氏らも、これに力を盡くした。また諸國の豪族は、心を皇室に寄せたてまつつて、忠勤を勵んだ。が、中でも、大内義隆や毛利元就は、それ〴〵後奈良天皇や、第六代正親町天皇の御即位の御費用をさし上げた。この他にも、朝廷の御費用を奉つたものが非常に多かつた。朝廷がかやうに御衰微になつたことは、國初以來かつてな

高國史上
高國史上

戰國時代

第三十一 戰國時代の 大勢

應仁の亂の後には、豪族が各地に據つて、幕府の命令に従はず、



かつたことであるが、天地と共にきはまりない皇基は、どうして動くことがあらうぞ。微動もしないのみか、かへつて、幕府が衰へてから、諸國の豪族は、たゞちに朝廷に近づきたてまつつて、忠勤を勵むこととなつた。これこそ、わが國體の尊いと、ところで、やがて織田信長が入京すると、なほいつそう皇室尊敬の實をあらはしたのである。

關東の分裂

互に實力を競つて、凡そ百年餘りも、騷亂を極めた。これを戰國時代といふのである。この間に、強者はしだいに弱者を合はせ、今までの舊家は、たいてい亡びて、家臣のこれに代つたものが多かつた。

(古河公方)

この時代の騷亂は、關東の分裂からはじまつた。さきに持氏が亡びてからは、上杉氏が東國の實權を握つたが、上杉氏は、やがて幕府に願ひ出て、持氏の子成氏を迎へて、鎌倉の主とした。ところが、成氏は上杉氏を父の讐と怨んで、これと争ひ、敗北して下總の古河に走つた。これを古河公方といふ。將士はその名望を慕つて、心を寄せるものが少くなかつた。そこで、上杉氏は、これに對抗する爲に、義政の弟政知を伊豆の堀越に迎へたので、これを堀越公方といふ。これから、兩公方が

高國史上

高國史上

兩上杉家の争

並び立ち、關東の諸將は、古河堀越の兩黨に分れて争つた。時に、上杉氏もまた兩家に分れ、山内上杉家は上野越後を領し、扇谷上杉家は武藏相模を領して、いづれも勢力があつた。世に名高い太田道灌は、扇谷家の部將で、文武の兩道に通じ、殊に和歌が上手であつた。かつて京都に上つた時、武藏野の景色について、勅問を賜はつたところ、とりあへず、

露置かぬかたもありけり、夕立の

空よりひろき武藏野の原。

(江戸城)

とよんで、大いに御感賞にあづかつた。道灌は、この武藏野に、はじめて江戸城を築いて古河に備へ、主家の威勢を張つたので、山内家にねたまれ、その讒言にあつて遂に殺された。これから、兩家がまた争ひ合つて、共に衰へるやうになつた。

北條氏が關
東地方の大
半を統べた

かやうに戦亂が絶えない間に、紀元二千百年代の中頃になつて、堀越公方政知が薨すると、子の茶々丸は、繼母が自分を疎んずるのを怨んで、これを刺し殺したので、その家は非常に亂れた。この頃、伊勢の人北條早雲は、駿河に下つて今川氏の部將となり、ひそかに東國の形勢をうかゞつてゐたが、堀越公方家の騒動につけこんで、にはかに襲つて茶々丸を滅し、遂に伊豆を取つて北條に移り、更に小田原城を奪つて、相模を従へた。その子氏綱、孫の氏康もまた勇武で、しきりに隣國を侵したので、古河公方は、兩上杉氏と連合して、この新しい敵にあつた。しかるに、いづれも多年の争によつて、疲弊した後であつたので、これに對抗することが出來ず、武藏川越の戦に大敗して、扇谷家の朝定は討死し、山内家の憲政も

高國史上

(小田原)

上杉謙信と
武田信玄と
の争

いつたん上野に逃げかへつたが、まもなく追はれて越後に入り、古河公方もついで滅された。これから、北條氏は、小田原にあつて、關東地方の大半を統べることとなつた。氏康は、武略に長じてゐたばかりでなく、また文學を好んで、たび／＼城中で和歌の會を開いた。殊に父祖の風にならつて、士民を愛し、よく國を治めたので、それを慕つて、四方から小田原に集つて來るものが多く、その城下は、商家が軒を並べて繁昌し、東國第一の都會となつた。
憲政は、越後に走つて、もとの家臣であつた長尾景虎にたよつた。景虎は、武勇の聞えが高く、越後を従へて威勢を隣國に振るつたが、憲政から家名と管領職とを譲られて、上杉謙信と稱へ、管領家を再興しようとして、たび／＼兵を關東に出

信玄は西上
の志を果さ
なかつた

して北條氏と争つた。ところが信濃の豪族村上氏らも、甲斐の武田信玄に破られて、越後におちて来たので、謙信はまた、これを助けて川中島に出陣した。たび／＼信玄と戦を交へて、共に勇名をとゞろかした。

信玄は、智謀が深く、戦術に長じてゐた上に、心を民政に用ひて、よく領内の法制を整へた。その貨幣の制度や衡の製法などは、後の世までも永く用ひられた。それで、国内の人望が厚く、威勢が高まつてくると、信玄は、京都に上つて、天下に號令しようとの志を起し、みづから大兵を率ゐて南下し、軍を進めて遠江に侵入した。當時、濱松城にあつた徳川家康は、織田信長と連合して、その軍を遮つたので、信玄は、これを三方原に破り、更に三河にうち入つたが、まもなく病死した。これか

高國史上
高國史上

謙信も上京
の志を遂げ
なかつた

ら、武田氏は、しだいに振るはなくなり、もはや謙信の敵でなくなつた。謙信も、まへ／＼から西上の志があつたが、この時にいよいよ、目的を果さうと、道を北陸道に取り、まづ越中能登の諸國を從へた。たま／＼陣中、秋たけて月の清らかな夜、諸將を集めて酒宴を開き、



上杉謙信が秋夜詩を吟ず

霜軍營に満ちて秋氣清し、數行の過雁月三更越山
と并せ得たり能州の景遮莫家郷の遠征を思ふは。

と吟じて、その得意を歌つた。謙信はまた、武略の外に、文藝にも達した一代の名將であつたが、いよ／＼上京の機會が來て、出發しようとするまぎはに、にはかに病死し、遂に目的を果すことが出來なかつたのは、惜しいことである。

奥羽地方に據つた諸族の中では、伊達氏の勢が最も強かつた。けれども、その地が東北にかたよつてゐるので、しぜん、中央の大勢に影響することは少かつた。

かうした間に、本州の中部に起つて、よく地勢を利用して、まつさきに志をしとげたのは、尾張の織田信長である。織田氏は、もと管領斯波氏の家臣で、主家に代つて尾張を治めてゐ

伊達氏が奥羽で勢があつた

織田信長が入京した

高國史上

高國史上

たが、主家の衰へたのにつけこんで獨立し、信長に至つて勢がますます盛になつた。信長は、今川義元が侵入して來たのを桶狹間に襲ひ、立ちどころにこれを殺して、その西上の企をくじいた。さうして、徳川家康と結んで武田氏に備へ、そのうしろを堅めて置いて、みづから兵を率ゐて美濃にうち入り、齋藤氏を滅して、岐阜城に移つた。そこで、正親町天皇は、信長の武名を聞き召されて、勅使を下して、綸旨を賜はつた。ついで、足利義昭が信長をたよつて來たので、紀元二千二百二十八年(永祿十一年)に、義昭を奉じて入京し、朝廷に申しあげて、義昭を將軍職に就かせた。けれども、その後まもなく、義昭は、信長の威名を嫌つて、これを除かうとはかつたが、失敗しかへつて追はれることとなり、足利氏は遂に亡びた。時に、紀

(足利氏が亡んだ)

毛利元就が
中國を定め

(山口)

元二千二百三十三年(天正元年)で、これから、信長が、足利氏に代つて天下に號令するやうになつた。轉じて、中國の方面を見ると、出雲に尼子經久がゐた。その家は、四職のうちの京極氏の一族で、富田城を根據として、しきりに諸國を合はせ、勢を山陰道に振るつて、しばしば大内氏と戦つた。大内氏は、代々周防長門に據り、その領地が九州の北部にまで及んだが、義興の代になつて、領地を東方にひろめ、また明國と貿易して、利益を得たので、たいそう富強となつた。それで、京都の公卿や學者の大内家にたよつて來るものが多く、山口の城下は、一時大いに賑はつて、西都と呼ばれた程であつた。ところが、義興の子義隆は、富強にまかせ、奢に耽つて武備を怠り、爲に勢力がしだいに衰へて、遂に部將陶

高國史上

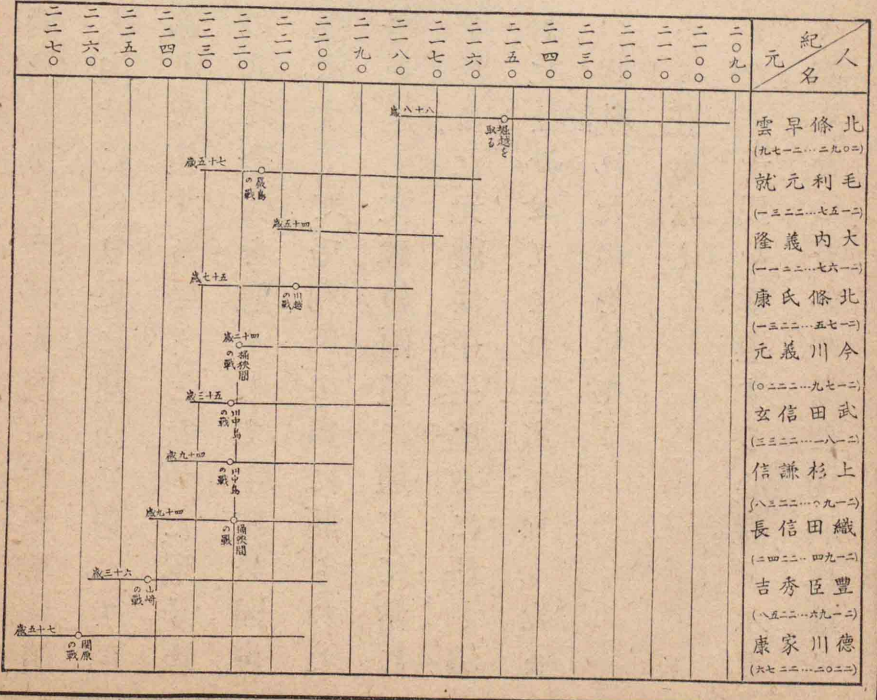
高國史上

晴賢に害された。そこで、義隆の部下毛利元就は、兵を擧げ、晴賢を嚴島にうち滅して、大内氏に代り、更に富田に迫つて、尼子氏をも攻降し、十箇國餘りを領することとなつた。尼子氏の遺臣山中鹿介は、義烈の人で、全力を盡くして、主家の回復をはかつたが、遂に志を達せずして、毛利氏の爲に斬られた。元就は、安藝の小族から身を起し、文武の兩道に通じて、常に部下を愛し、よくその國を治めた。元就は、平生座右に餅と酒とを備へて置き、將士の好にまかせて、これをもてなした。また或時は、春の山路に花の咲亂れたのを見て、

うらむなよ、心にもるゝ花もなし。
との發句をよんで、それとなく士民を愛撫する心持を示しなどして、人望はいよゝゝ高くなつた。かやうに、毛利氏は、一

長曾我部元親が四國の大部分を従へた

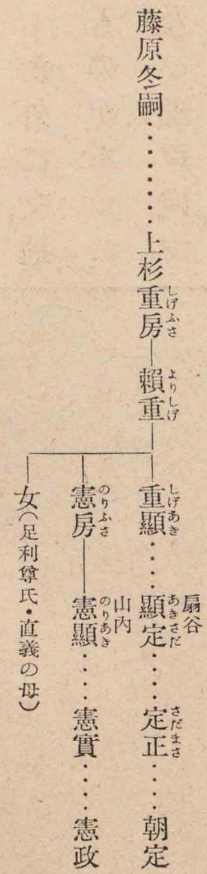
家主従の一致共同によつて、とう／＼中國を定め、その勢力は海を越えて、四國九州の地方にまで及んだ。
四國には、はじめ管領家の一族である細川氏が勢力を振るつたが、それが衰へると、長曾我部元親が土佐から起つて、とう／＼四國の大部分を従へた。九州では、少貳氏



高國史上

島津義久が九州を合はせようとした

の家臣龍造寺氏が主家に代つて肥前に起り豊後の大友氏は、明及び新に來航した西洋人と貿易したので、その國が富んだ。けれども、後には薩摩の島津義久が、しだいにこれらの諸族をおさへて、ほとんど九州を合はせようとする勢を示した。

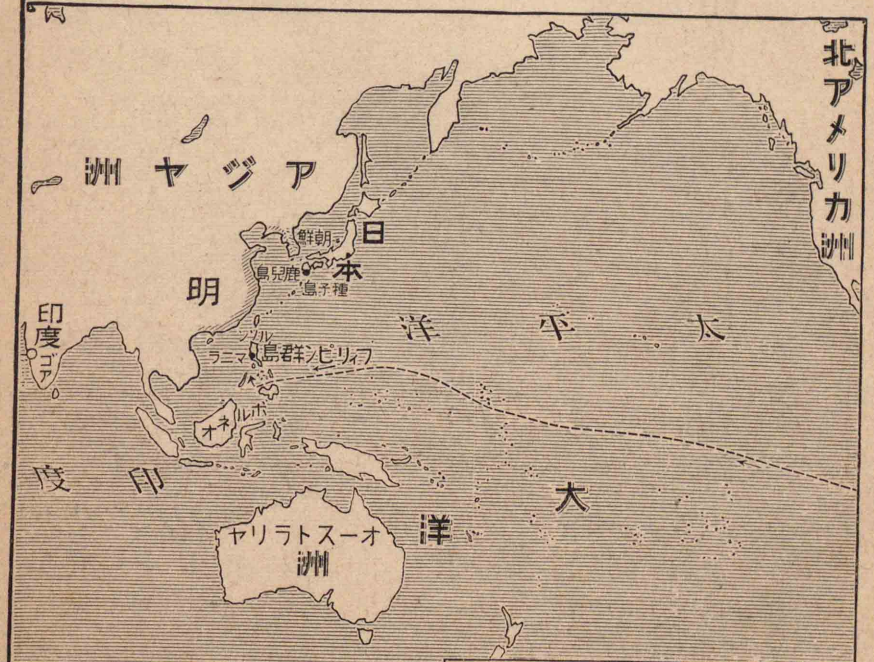


高國史上

西南地方の住民が海外に渡つた

第三十二 邦人の海外渡航 西洋人の渡來
戦國時代には、人々がそれ／＼實力を競つたので、國民の元氣は、國內にみなぎつたばかりでなく、更に海外にあふれた。

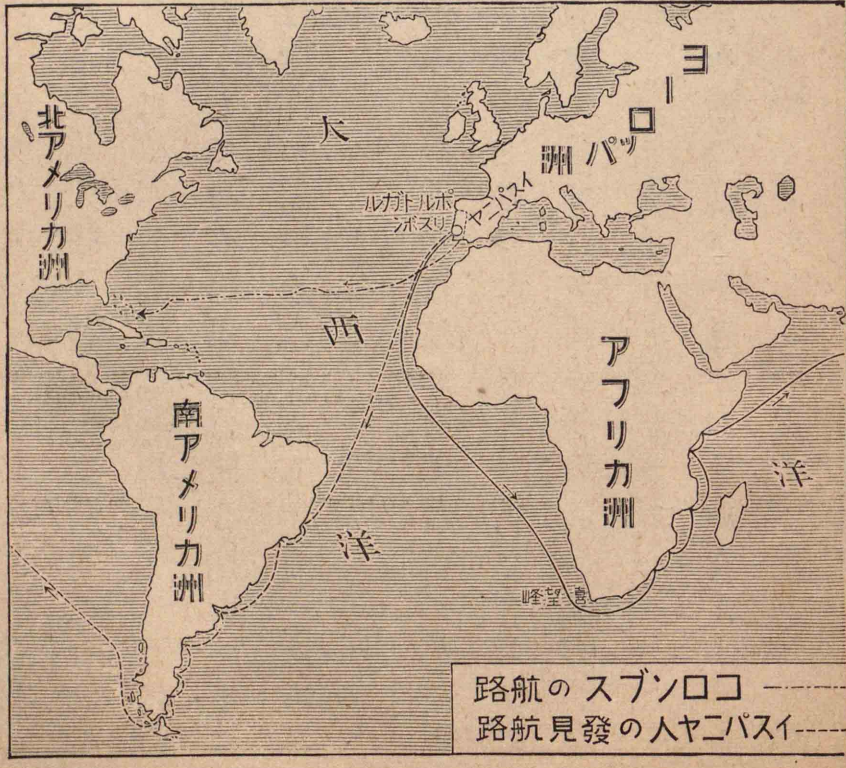
もと、我が西南の地方は、特に海運の便利がよいので、海事思想が發達して、早くから海外に交通するものがあつた。九州及び瀬戸内海附近の住民のうちには、黨を結んで支那朝鮮に渡り、専ら商賣の利得を求め、それが聽かれぬ



邦人及海外渡航の地圖 邦人渡航の地圖 邦人渡航の地圖 邦人渡航の地圖

高國史上

場合には、たゞちに武力を振るふものが少くなかつた。明及び高麗は、大いにこれを恐れ、たびたび書を足利義満に送つて、これを禁ぜられたいと願ひ出したので、義満は、その願をいれて、一時それらの徒を取締つた。けれども、應仁の



コロンブスの航路 西人発見の航路

亂後、室町幕府が衰へるやうになると、その徒の勢力は再び
さかんになり、軍船をそろへ、八幡大菩薩と書いた旗をおし
立てて彼の地に渡り、時には、明の暴民に利用されて、その沿
岸をあらし廻つた。かうして、我が國民の冒險心は、しぜん
振るひ起され、中には、遠洋に航海を試みるものさへあらは
れるやうになつた。

この頃、西洋でも航海の術が非常に進んで、しだいに航路を
東洋に開かうとする形勢となつた。イタリヤ人、コロンブス
は、マルコ・ポーロの著書を見て、我が國の金銀及び産物に富
んであることを知つて、來航しようとして企て、イスパニヤ女王
の助力を得て、大西洋を西に横ぎり、思ひがけなくアメリカ
を發見した。その後まもなく、ポルトガル人は、アフリカの南

西洋人が東
洋に航路を
開いた

高國史上

高國史上

ポルトガル
人がはじめ
て小銃を傳
へた

端を廻航して、はじめて印度に達した。

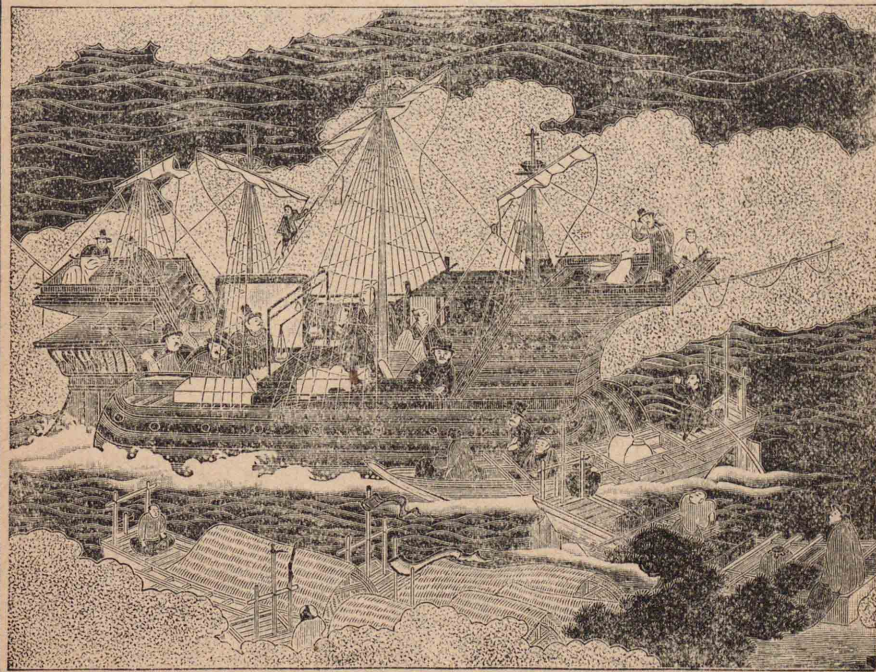
これから、西洋人の東洋に來航するものが、おひ／＼多くな
り、中にも、ポルトガル人は、率先して印度の西岸にあるゴア
を占領し、こゝを根據として、盛に商業に従事し、たび／＼支
那に往來するうちに、たゞ／＼紀元二千二百三年、後奈良天
皇の天文十二年に、その商船が暴風にあつて、大隅の種子島
に漂着した。これは、實に西洋人が我が國に渡來した始であ
る。この時、小銃がはじめて傳はつて、世に種子島と呼ばれ、そ
の効力は、はるかに弓矢にまさつたので、大いに武人に珍重
せられて、忽ち四方にひろまつた。そこで、この影響を受けて、
戦術は一變し、築城法なども、面目を改めたのである。
イスパニヤ人もまた、コロンブスのアメリカ發見以來、しき

イスパニヤ
人が來航し
た

がキリスト教
が傳はつた

りに新大陸の經營に
従つたが、後に、太平洋
を航海して東洋に來
た。さうして、フィリピン
群島を取つて、ルソン
のマニラを根據地と
して、ポルトガル人に
ついて、我が國に來航
した。

この頃、イスパニヤ人
ザビエルといふもの
が、印度でキリスト教



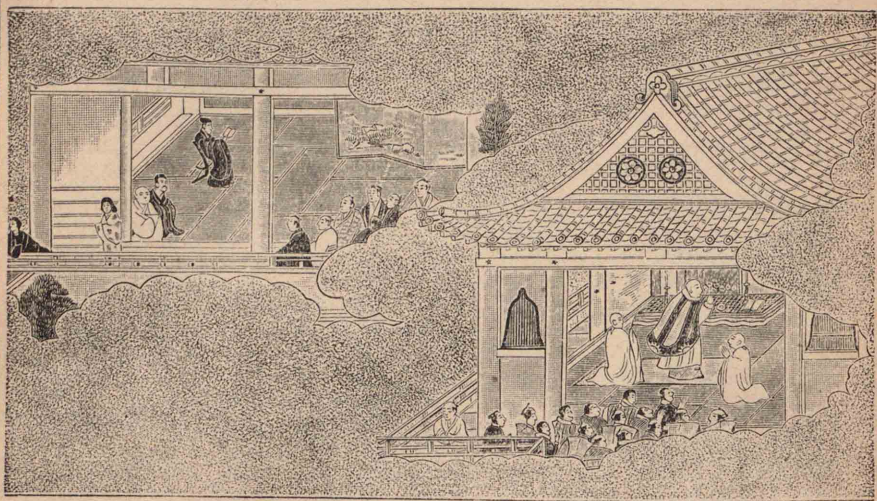
南 蠻 船

高國史上

高國史上

南 蠻 寺

を宣傳してをつたが、遂に天文
十八年、鹿兒島かごしまに來てその教を
傳へ、諸國を廻つてこれをひろ
めた。キリスト教は、我が垂仁天
皇の頃、キリストによつてはじ
められた宗教で、古くから西洋
に行はれたものであるが、この
時、はじめて我が國に傳はり、大
内・大友らをはじめ、諸大名がこ
れを信仰し、教會堂や學校など、
が所々に設けられて、西洋文化
がしだいに諸國にひろまる糸



(南蠻人)
(天主教)

口を開いた。當時、我が國では、これらの外人をすべて南蠻人と呼び、その宗教を切支丹宗きしたんしゅうまたは天主教てんしゆけうといった。かうして、その文化は、信長の天下統一の事業が進むにつれて、その保護によつて、更にいつその發達を見るやうになつた。

高等小學國史上卷終

高國史上

高國史上

年表

御代數	天皇	紀元	年	號	摘	要
一	神武天皇	元	二	年	即位の禮を擧げ皇后をお立てになつた	
同	崇神天皇	四	四	年	功臣を賞せられた	
同	崇神天皇	五	六	年	鳥見山で皇祖をお祭りになつた	
同	崇神天皇	五	十	年	天照大神を別宮にまつらせたまうた	
同	崇神天皇	五	十	年	將軍を四道にお遣はしになつた	
同	崇神天皇	五	十	年	人口を調べてみつぎものを納めさせられた	
同	崇神天皇	五	十	年	諸國に船をお造らせになつた	
同	崇神天皇	五	十	年	池や溝をお開かせになつた	
同	崇神天皇	五	十	年	將軍を任那に遣はして鎮めさせられた	
同	崇神天皇	五	十	年	天照大神を伊勢に遷しまつらしめられた	
同	崇神天皇	五	十	年	諸國に命じて池や溝をお開かせになつた	
同	崇神天皇	五	十	年	熊襲を御征伐になつた	
同	崇神天皇	五	十	年	武内宿禰に東北地方の様子を調べさせたまうた	

年表

一

三	三	元	二	五	四	三	三
崇峻天皇	用明天皇	同 欽明天皇	同 雄略天皇	同 應神天皇	同 仲哀天皇	同 成務天皇	同 景行天皇
二四九	二四七	二三三	二三三	九四九	八六〇	七五三	七七一
二	二	二十三	七	八	九	三	二十七
年	年	年	年	年	年	年	年
<p>日本武尊に熊襲を平げさせたまうた 日本武尊に蝦夷を鎮めさせたまうた 武内宿禰を大臣としたまうた 山川によつて國・縣をお分ちになつた 神功皇后が新羅をお伐ちになつた 弓月君が歸化した 王仁が論語などを奉つた 阿知使主が歸化した 稚郎子が高麗の書の無禮を責められた 阿知使主を支那にやつて織縫の女工を求めさせられた 皇后に蠶をかはせたまうた 錦織の職工及び陶工・畫工などが百濟より來た 使を支那にやつて織縫の女工を召させられた 豐受大神を伊勢におまつりになつた 百濟王が佛像や經文を奉つた 新羅が任那の日本府を滅した 蘇我馬子が物部守屋を滅した (隋が支那を統一した)</p>							

三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
推古天皇	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
舒明天皇	舒明天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	皇極天皇	
二五三	二六三	二六四	二六七	二六八	二七〇	二七二	二七三	二七四	二七五	二七六	二七七	二七八	二七九	二八〇	二八一	二八二	二八三	二八四	二八五	
元	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	
一	二	五	六	八	十	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	
聖德太子が四天王寺を建立したまうた	太子が冠位の制を定められた	太子が十七條の憲法を作りたまうた	太子が小野妹子を隋に遣はしたまうた	太子が法隆寺を建立したまうた	太子が隋使をともなつて歸朝した	太子が留學生を従へて再び隋におもむいた	高麗の僧曇徴が來た	(隋が亡び唐が起つた)	使を唐に遣はしたまうた	蘇我蝦夷・入鹿父子が誅せられた	はじめ年號を立てられた	私有の土地・人民を收めて田地をわかち授け租・庸・調の制を定めたまうた	阿倍比羅夫が蝦夷を伐つた	比羅夫が再び蝦夷を伐つた	比羅夫が三たび蝦夷を伐つた	我が軍が唐の軍と戦つて敗れた	唐の使が來朝した	都を大津に遷したまうた	藤原鎌足に法令を定めさせられた	(高麗が亡んだ)

高麗史上

年表

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

大寶律令が出来上つた
 はじめて錢を鑄させられた
 都を奈良にさだめたまうた
 古事記が出来た
 諸國に命じて風土記をお作らせになつた
 日本書紀が出来た
 藤原光明子を皇后にお立てになつた
 國毎に僧尼の兩國分寺をお造らせになつた
 東大寺の大佛を鑄させられた
 唐僧鑑真が來朝した
 和氣清麻呂が道鏡をくじいた
 道鏡をおとし清麻呂を召しかへされたまうた
 最澄が比叡山に延曆寺を建てた
 都を今の京都にさだめたまうた
 坂上田村麻呂を征夷大將軍としたまうた
 膽澤城を築かせられた
 最澄・空海が唐におもむいた
 最澄が歸朝して天台宗を傳へた

五	平城天皇	一四六	大同元年	空海が歸朝して真言宗を傳へた
五	嵯峨天皇	一四六	弘仁七年	空海が高野山に金剛峯寺を開いた
五	同	一四一	同十二年	藤原冬嗣が勸學院を立てた
五	文德天皇	一五七	天安元年	藤原良房を太政大臣に任じたまうた
五	清和天皇	一五八	同二年	良房を攝政としたまうた
五	宇多天皇	一五七	仁和三三年	藤原基經を關白としたまうた
六	醍醐天皇	一五四	寛平六年	遣唐使の派遣をとめられた
六	同	一五一	延喜元年	菅原道眞が太宰府に遷された
六	同	一五五	同五年	古今集が出来た
六	朱雀天皇	一五七	同七年	(唐が亡んだ)
六	同	一五五	承平五年	(新羅が亡び翌年高麗が半島を統一した)
六	同	一六〇	天慶三年	平貞盛らが平將門を誅した
六	同	一六〇	同四年	源經基らが藤原純友を誅した
六	圓融天皇	一六元	天元二年	(宋が支那を統一した)
六	後一條天皇	一六二	治安二年	藤原道長が法成寺を建てた
六	同	一六一	長元四年	源賴信が平忠常を降した
七	後冷泉天皇	一七三	天喜元年	藤原賴通が平等院に鳳凰堂を建てた
七	同	一七三	康平五年	源賴義が安倍貞任らを滅した

年表

高國史上

八五	仲恭天皇	一八一	承久三年	承久の變
八四	後堀河天皇	一八四	元仁元年	親鸞が眞宗を開いた
八三	同	一八七	安貞元年	道元が歸朝して曹洞宗を傳へた
八二	同	一八二	貞永元年	北條泰時が貞永式目を定めた
八一	後深草天皇	一九〇	建長元年	北條時頼が建長寺を鎌倉に建てた
八〇	同	一九三	同	日蓮が法華宗を開いた
七九	龜山天皇	一九六	文永五年	蒙古の使が來た
七八	後宇多天皇	一九四	同	文永の役
七七	同	一九九	弘安二年	(元が宋を滅した)
七六	同	二〇二	同	弘安の役
七五	同	二〇四	同	北條時宗が圓覺寺を鎌倉に建てた
七四	伏見天皇	二〇五	正應四年	龜山上皇が南禪寺を京都におはじめになつた
七三	後醍醐天皇	二〇八	元弘元年	院政がやんで天皇が御みづから御政をお執りになつた
七二	同	二一一	同	北條氏を伐たうとなさつた
七一	同	二一三	同	北條氏が亡び鎌倉幕府がたふれた
七〇	同	二一四	同	政治を改新したまうた
六九	同	二一五	同	足利尊氏が鎌倉で反いた
六八	同	二一六	同	吉野に行幸したまうた

年表

九七	後村上天皇	一九九	延元四年	尊氏・直義が天龍寺を京都にはじめ安國寺を諸國に起させた
同	同	二〇八	正平三年	賀名生に行幸したまうた
同	同	二〇九	同四年	尊氏が基氏を關東管領とした
九八	長慶天皇	二〇六	同二十三年	(元が亡び明が起つた)
同	同	二〇四	弘和三年	足利義滿が相國寺を京都に建てた
九九	後龜山天皇	二〇五	元中九年	(高麗が亡び朝鮮が起つた)○京都に還幸して神器を後小松天皇に傳へたまうた
一〇〇	後小松天皇	二〇七	應永四年	義滿が金閣を北山に造つた
同	同	二〇五	同五年	義滿が幕府の職制を定めた
同	同	二〇六	同八年	義滿が好を明に通じた
一〇一	稱光天皇	二〇七	同二十六年	將軍義持が明と好を絶つた
一〇二	後花園天皇	二〇九	永享四年	將軍義教が再び明と好を修めた
同	同	二〇九	同十一年	永享の亂
同	同	二〇二	嘉吉元年	赤松滿祐が義教を害した
同	同	二一五	康正元年	足利成氏が下總の古河に走つた
同	同	二一七	長祿元年	太田道灌が江戸城を築いた○足利政知が伊豆の堀越に迎へられた
一〇三	後土御門天皇	二一七	應仁元年	應仁の亂が起つた
同	同	二二七	文明九年	應仁の亂がやんだ
同	同	二四三	同十五年	義政が銀閣を東山に造つた

年表

一〇三	後土御門天皇	二二五	延徳三年	北條早雲が堀越を取つた
同	同	二二五	明應元年	(イタリヤ人コロンブスがアメリカを發見した)
一〇五	後奈良天皇	二二五	同 七年	(ポルトガル人が海路印度に達した)
同	同	二二六	天文十二年	ポルトガル人が種子島に漂着して小銃を傳へた
同	同	二二九	同 十五年	川越の戦
同	同	二二五	同 十八年	ザビエルが鹿兒島に来てキリスト教を傳へた
一〇六	正親町天皇	二二〇	永祿三年	嚴島の戦
同	同	二二二	同 四年	桶狭間の戦
同	同	二二五	同 八年	川中島の戦
同	同	二二六	同 十一年	將軍義輝が害せられ弟義昭が走つた○(イスパニヤ人が フリビン群島を取つた)
同	同	二二三	元龜三年	織田信長が義昭を奉じて入京した
同	同	二二三	同 三年	三方原の戦
同	同	二二三	天正元年	義昭が追はれて足利氏が亡んだ

昭和十二年九月廿二日修正印刷
昭和十二年九月廿四日修正印刷
昭和十二年九月廿四日修正印刷
昭和十三年二月廿一日翻刻發行

高等小學國史上卷

臨時定價 金拾六錢

著作權所有

著作兼
發行者

文
部
省

昭和二十二年九月廿八日
文部省檢査濟

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
翻刻發行
兼印刷者 代表者 石川正作

印刷所 東京書籍株式會社工場

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

東京書籍株式會社

發行所

二部一年 增原政登

庫
7
88

広島大学図書

2500029788

